

國家の樞機であるから、宜しく通明公正を以て之を處すべきである。武帝は後宮に遊宴したから常に宦者を用ゐたが、これは古制ではない。宜しく中書宦官を罷めるがよい」と。議久しく決しなかつたが、恭顯等は却つて帝に讒して曰く、「望之、堪、向(漢の宗室劉向)等は朋黨を結んで數々貴戚を讒誣し、以て權勢を恣にせんとし、誠に不忠不道であるから、請ふ召して廷尉に致さむ」と。帝は之に従つた。既にして帝は堪・向を召さんとしたが、其の獄に下つたといふことを聞いて、大に驚いて曰く、「只廷尉に下して查問しただけではないのか」と。よつて直に出して事を見せしめた。蓋、帝は、廷尉に致すといふことは、獄に下すものであることを知らなかつたのである。恭顯等は、よつて更に高をして帝に説かしめて、再び三人を黜シラフけた。後帝は復た望之を相と爲さんとしたが、顯等はまた之を讒し、再び獄に下さんと欲し、兵を以て其の第を圍んだから、望之は鳩を飲んで自殺した。其の後恭は病死し、顯は中書令と爲り、黨を結んで政を恣にし、威權内外を傾くるに至つた。然れども帝は優游不斷で、顯の專横を知つて居ながら、亦如何ともすることが出来ないので、孝宣の業は茲に至つて衰へた。

外戚の專權

外戚の專權 元帝が崩じて太子驚ウツ立ち、之を成帝といつた。生母后王氏を尊んで皇太后と爲し、太后の弟王鳳を大司馬大將軍として尙書の事を領せしめ、石顯を徙して太后の

五侯

宮に奉事せしめて、復た政權に與らしめぬ様にした。時に顯の奸佞は朝野に知られたから、帝の即位の翌年に、丞相御史等は、顯の舊惡を指摘して之を彈劾したから、顯及び其の黨與は悉く廢黜せられ、顯は故郡に歸る途中で死んだ。是に於て宦官は勢を失ひ、是より政權が全く外戚の王氏に歸した。是の歳王鳳の弟崇は、安成(縣名、汝南郡に屬す)侯に封ぜられ、次いで又其の五弟譚・商・立・根・逢時等は、同日に列侯と爲つたから、世に之を五侯といふた。時に王鳳が權を握り、王氏の一族は皆顯官を占め、郡國の守相將吏に至るまで、皆其の黨を以て充ウすに至つた。是に於て王氏の勢は並ぶ者なく、一族競うて豪奢を極めたが、巧に士を好み賢を養ひ、財を散じて人心を收めたから、賓客等が競うて其の聲譽を傳へ、名聲が天下を動かすに至つた。此の時京兆尹王章は、帝に見えて王鳳を斥けんことを勧めたが、帝は却つて章を殺した。又光祿大夫の劉向は、宗室の危きを見るに忍びないで、帝に極諫して、王氏と劉氏の並立すべからざることを以てしたが、帝は用ゐることが出来なかつた。既にして鳳は卒し、音・商・根等が相次いで大司馬となつた。初め王太后の兄弟は八人あつたが、弟曼が獨り早世して侯とならなかつた。曼の子莽は幼にして孤と爲り、五侯の子が、皆時に乘じて侈靡遊佚であつたにも拘はらず、彼は獨り身を持つことが恭儉で、且つ博く學び、諸父(伯叔父)に事へて頗る禮が有つた

王莽



から、永始元年(成帝二年)に新都(縣名、今四川成都に屬す)侯に封ぜられ、尋いで侍中と爲つたが、位尊くして躬は益々謙で、聲望は諸父を傾くるに至つた。時に成帝は酒色に荒み、政は外戚に歸し、漢業は愈衰へたが、己にして王根は、姪莽を薦めて、己に代はつて大司馬たらしめた。帝は子が無く、姪定陶(今の山東定陶縣)王欣を立て、太子と爲し、在位二十六年にして崩じ、太子が立つた。之を孝哀帝となす。皇太后を尊んで太皇太后としたが、太皇太后は、莽をして哀帝の外戚たることを避けしめたから、莽は罷めて國に就いた。是に於て丁傅の二氏(哀帝の母は丁姫祖、母は傅太后の族)が事を用ゆるに至つたが、其の勢は前朝の王氏に於けるが如くではなかつた。侍中の董賢は帝の寵幸を得たが、帝は常に讒を信じて、屢々大臣を誅殺して主威を示さんとしたから、賞罰は當らず綱紀は紊れて、漢祚は遂に日に微なるに至つた。

**王氏の篡弒** 哀帝は子無く、在位六年にして崩じたから、王大皇太后は、(傅太后、丁太后は共に哀の帝の代に)使を馳せて王莽を召し、再び大司馬として尙書の事を領せしめた。莽は即ち元帝の庶孫の箕子を迎へ立てた。年甫めて九歳、之を孝平帝となす。太皇太后が朝に臨み、大司馬莽は政を乗り、孔光(孔子十三世の孫)を太師とし、王舜(王音の子)を太保とし、莽自ら太傅と爲つて、安漢公と號した。是の年は實に我が紀元六百六十一年で、西洋紀元元年である。四年に莽は其の女を納れて皇后と爲し、又伊尹周公の稱號を采りて宰衡と稱し、諸侯の

上に位して庶政を總覽した。又宣帝の裔孫三十六人を列侯に、漢の宗室及び功臣の後百餘人を王侯に封じ、以て民心を收攬した。莽は又周の古制に倣うて、明堂・靈臺・辟雍を起し、博士の員數を増し、學者の異能ある者を徵すこと前後千數百人に及んだ。成帝哀帝より以來、張禹・孔光等の徒は名儒を以て三公に列し、曲學を以て世に阿オモねつたから、一世を通じて諂諛風を成したが、是に至つて、公卿は皆莽の功德を稱して之を周公に比し、吏民の上書して莽の徳を頌する者が四十八萬人に及んだ。因つて莽に策命して九錫を加へた。是の年莽は帝を毒殺し、宣帝の玄孫嬰の未だ二歳なるを迎へて皇太子と爲し、號して孺子(周の成王の幼時の號)と曰ひ、莽自らは攝位に居つて祚を踐み、祭贊には假皇帝と曰ひ、臣民よりは攝皇帝といはしめた。斯くて西漢は、高祖の五年に帝と爲つてからは是に至るまで十三世、二百七年で王氏の爲めに國を篡はれた。

**王莽の施政** 王莽は居攝三年にして、遂に眞皇帝の位に即き、國を新と號し、始建國と改元した。是より悉く漢の遺制を改め、妄りに虞周の制を採用し、以て漢の面目を一新せんとした。即ち新に四輔(太師・大傅・大司馬・大司空)・三公(大司馬・大司徒・大司空)・四將(更始將軍・衛將軍・五國將軍・前將軍)を置き、悉く宗屬を封じて、侯伯子男と爲し、漢の諸侯王を悉く降して公と爲し、後皆爵を奪ひ、四夷の王と稱する者は、皆改めて侯とした。漢の時には、豪族兼併し、貧富の懸

王莽の施政  
新と號す

四輔・三公・四將



五均の官

隔が殊に甚しかつたが、莽は古の井田法を用ゐ、悉く天下の田を收めて王田と曰ひ、奴婢を私屬といひ、皆賣買することを禁じた。又五均の官を設け、民間の貨物を買ひ、價が騰貴せる時に之れを賣つて利を納め、錢府官を設け、民に金錢を貸して其の利息を收め、又貨幣を改鑄し、從來の五銖錢を廢し、新に金・銀・龜・貝・錢布等を造つて、寶貨と稱して流通せしめたが、人民私かに鑄錢し、或は寶貨を非沮（通用を拒む）して罪せらるゝ者が擧げて數ふべからざるに至つた。斯く法令が煩奇であつて、賦歛は益々重かつたから、農商は業を失ひ、小民の餓死流亡する者が益々多く、盜賊は所在に蜂起して、天下は復た漢室を懷ふに至つた。加之、莽は威を匈奴に示さんと欲して、匈奴の單于を改めて降奴の服子と爲し、諸將に命じて北征せしめたから、單于智者（呼韓邪の子）は怒つて曰く、先單于は漢の宣帝の恩を受けたから背くことを得なかつたが、今の天子は宣帝の子孫でないのに、何を以て立つことが出来るかと。兵を出して塞に入り、是より北邊に始めて事多く、西域諸國も皆叛くに至つた。既にして智が卒して弟威が單于となり、陽（陽）はりて新と和したから、よつて莽は、匈奴を改めて恭奴と曰ひ、單于を善于と改めて其の意を迎へたが、然かも匈奴の侵寇は止まず、人心は全く離反し、豪族が四方より競ひ起つて、王莽に抗爭するに至つた。

王莽の敗滅  
赤眉の賊

王莽の敗滅

此の時に當つて青州（山東省）の賊樊崇等は、皆其の眉を朱にして赤眉と稱し、山東江淮の間に横行し、新市（地名、故城は湖北省京山縣の東北に在り）の人王匡は、湖北に起つて綠林（山名、湖北省雲夢縣の東北に在り）の兵と號し、平林（縣名、南陽郡に屬す、故城は湖北省隨州東北に在り）の兵も亦起つて之に應じた。時に漢の宗族の劉縯・劉秀兄弟も、相與に兵を（シヤウワヤツ）春陵（鄉名、湖北省棗陽縣の東）に擧げ、新市平林の兵と合して、其の衆既に十餘萬に達したが、之を統率する者が無かつたから、諸將は皆劉氏を立て、人望に従はむことを欲し、劉縯を推す者があつたが、新市平林の諸將は、其の威明を憚つて之に反對し、遂に縯の同族である劉玄の懦弱なのを利として、之を擁立して漢の皇帝と爲し、元を建て、更始とし、劉縯を大司徒とした。是より漢軍の向ふ所に敵無く、進んで昆陽・定陵・鄗（三縣共皆河）を下し、又攻めて宛（縣名、今の南陽）を取り、入つて之に都した。新帝（王莽）乃ち王尋・王邑を將とし、四十二萬の兵を以て之を拒がしめたが、劉秀は自ら歩騎千餘を將ゐて先鋒となり、諸軍之に従ひ、大に新軍を昆陽（縣名、河）に破つて王尋を殺した。關中之を聞いて震恐し、四方の豪傑が響應し、争うて其の牧守を殺して漢の年號を用ゐた。幾ばくも無く、新市平林の諸將は、縯・秀兄弟の威名を忌み、漢帝（劉）に勸めて縯を殺したが、劉秀は直に馳せ歸りて謝し、敢て喪にも服せず、又未だ嘗て功に伐らなかつたから、漢帝は却つて慙ぢ、秀を拜して破虜將軍とした。時に成紀（縣名、今の甘）

劉玄（更始帝）

昆陽の戦

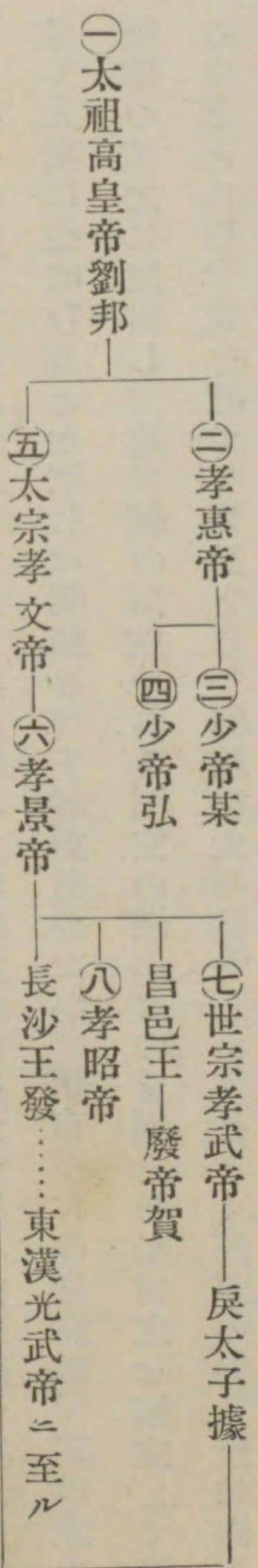
劉秀



蕭(安縣)の隗囂も亦兵を起して漢に應じ、漢軍進んで、一は洛陽に向つて之を陥れ、一は武關に入り、進んで長安を攻めたが、莽は猶豪語して曰く、「天徳を予に生ず、漢兵其れ予を如何にせんや」と。明日衆兵入つて莽を切り、首を傳へて宛に至つた。斯くて莽は帝と稱することが十五年にして亡びた。時に皇紀六百八十三年(垂仁の朝、西紀二三年)である。漢帝(劉)は遷つて長安に都し、大に宗室功臣を封じて王と爲す者凡そ二十人、諸將士に濫りに官爵を授けた。

前漢の世系

○前漢の世系



孝宣帝の中興

○孝宣帝の中興

宣帝名は病已、孝武帝の曾孫である。初め事を以て獄に繋かれたが、霍光奏して曰く、病已は躬節儉仁慈にして人を愛すと。迎へ入れて即位せしめた。光が歿して、帝が政を親ら

麒麟閣

○麒麟閣

するに及び、精を勵まし治を圖り、信賞必罰、内政の改良せられたものが甚多く、民皆其の恵を仰ぐに至つた。又外に對しては、多くの兵力を費すこと無くして、匈奴以下西域諸國に至るまで皆來歸し、武帝の外征は全く帝によりて其の功果を收むるに至つた。帝は在位二十五年、地方には趙廣漢・朱邑・龔遂・尹翁・韓延壽等の民を治めて美績を擧ぐる者が多く、中央政府には丙吉・黃霸・于定國等の賢相があつて、帝の世は實に漢代隆盛の頂に達し、世に稱して漢室中興の祖といふ。

○麒麟閣 武帝が嘗て麒麟を得た時に、其の像を畫かしたによつて名づけた。宣帝の甘露三年に、匈奴の呼韓邪單于が來朝した時、帝は戎狄の賓服するを以て、股肱の美を思ひ、其の人を麒麟閣に畫いた。即ち霍光を第一とし、大司馬大將軍博陸侯姓は霍氏と記した。次は張安世・韓增・趙充國・魏相・丙吉・杜延年・劉德・梁丘賀・蕭望之・蘇武と、凡て十一人。皆功德ありて名を當世に知られた者のみである。

魏相

○魏相

字は弱翁。宣帝の時相に拜せられた。相は好んで漢の故事を見て、漢初以來便宜の行事、及び賢臣賈誼・晁錯・董仲舒等の言ふ所を記し、奏して之を施行し、丙吉と心を同うして政を輔けたから、帝は皆之を重んじ、共に一代の賢良であつた。宣帝は嘗て匈奴の衰弱に因り、兵を出して其の右地を撃ち、匈奴をして復た西域を擾さしめない様にしやうとした時に、魏相は諫めて曰く、臣聞く、亂を救ひ暴を誅する者之を義兵といひ、兵義なる者は王者たり。敵已に加ふるにより、已むを得ずして起る者之を應兵といひ、兵應する者は勝つ。小故を争ひ憤怒を忍ばざる者之を忿兵と謂



ひ、兵忿る者は敗る。人の土地貨寶を貪る者之を貪兵と謂ひ、兵貪る者は破る。大を恃み衆を矜り威を敵に示さむと欲する者之を驕兵と謂ひ、兵驕る者は滅ぶと。匈奴は未だ邊疆を犯せるにはあらず、車師を争ふといつても、以て意となすに足らぬ。今兵を興して其の地に入らんとしても、臣は愚にして此の兵の何の名分が有るかを知らぬ。今年の計を案するに、子弟の父兄を殺し、妻の夫を殺す者が凡そ二百二十八人もある。此れ小變ではない。左右は之を憂へないで織芥の怨を遠夷に報いんと欲するは、其の可なるを知らない。帝之に従つた。

○丙吉 ヘイキツ 字は少卿。魯の人。宣帝は生れて數月で衛太子の事に坐して獄に繋がれたが、吉は謹厚の女徒を擇んで之を保養せしめた。會、望氣者が有つて曰く、長安獄中に天子の氣があると 詔して盡く獄中の人を殺さしめんとした。然るに中使が夜至つたが、吉は、門を閉ぢて入らしめないで曰く、皇曾孫が御出になるぞと。帝はよつて全きを得たのである。後帝が即位するに及んでも、吉は決して功に伐らなかつたが、後之を知られ、博望侯に封じ、相に拜せられた。吉は人と爲り、深厚寛大で、禮讓を好み小事を親らせない。官屬に於ては務めて過を掩ひ善を揚げたので、世間では其の賢なるを稱した。

○鄭吉 テイキツ 會稽(今の浙江省紹興府會稽縣)の人。初め卒伍となつて軍に隨ひ、屢西域に赴いて功を以て郎と爲つた。時に匈奴の日逐王は、單于と隙を生じて漢に降らんとしたので、鄭吉は奏して西域諸國の民五萬人を發して日逐王を迎へて京師に至らしめた。時に鄭吉は宣帝の命を奉じて、西域經畧

に従事し、其の威が西方に振つたから、帝は鄭吉を拜して西域都護となし、烏壘城に治せしめ、烏孫康居等西域三十六國を監察せしめた。之を西域都護の始めとす。時に神爵二年(皇紀六〇一年)。功を以て安遠侯に封ぜられた。

○劉玄 リウケン (更始帝) 字は聖公。後漢光武帝の族兄である。王莽の末年に新市(地名、故城湖北京山縣の東北に在り)・平林(縣名、南陽郡に屬す、故城は湖北隨州の東北に在り)等の兵が起つた時に、景帝六世の孫の劉演も、弟劉秀と共に兵を舂陵(郷名、南陽郡蔡陽縣に屬す。故城は湖北棗陽縣の東に在り)に起し、新市平林の兵と合した。兵既に十餘萬有つたが、統一する所が無いので、共に天子を立てん事を議した。諸將は劉演兄弟の威名を憚つて、更始將軍劉玄を立て、天子とした。更始は素より懦弱であつたが、南面して立ち、群臣を朝せしむるに、羞愧して汗を流し、手を舉げて言ふことが出来なかつたが、先づ更始と改元し公卿を置いた。次いで王莽を亡して長安に遷つた。更始三年九月に赤眉(青州の賊樊崇等皆其の眉を朱にし赤眉と稱す)の軍が長安を攻めた時に、更始は出奔して赤眉に降り、次いで殺された。帝となりてより亡ぶ迄三年。

○昆陽の戦 コンヤウ 昆陽は今河南省葉縣の南に在る。新の地皇四年に、新帝(王莽)は其の族王尋・王邑等をして大軍を發して山東を平げしめたが、其の兵四十二萬、百餘萬と號して旌旗百餘里、輜重千里に續き、虎豹犀象の屬を驅つて威武を助けた。漢の諸將は其の兵の盛なるを見て、皆反り走つて昆陽に入つた。時に城中の兵は僅に八九千人であつたが、秀は別將をして昆陽城を守らしめて、夜竊に十三騎

劉玄

鄭吉

丙吉

昆陽の戦



と共に城の南門から出て兵を外に収めた。尋邑の二將は兵を縦つて城を圍み、鉦鼓の聲は數十里に聞え、或は地道を爲り、或は衝鞠を以て城を撞き、積弩亂發、矢の下ること雨の如く、城中では戸を負うて水を汲む程で、城兵も力盡きて降を請うたが許されなかつた。既にして秀は定陵(郟城縣)に至り、悉く諸營の兵を發し、自ら歩騎千餘に將として前鋒となり、尋邑等の大軍に當り、斬首數十級に及んだ。是に於て諸將は喜んで曰く、劉將軍は平生は小敵を見れば怯であるのに、今大敵を見て勇むは、甚だ怪むべきである。吾々は誓つて將軍を助けねばならぬといつて、諸部等しく進み、斬首數十百級、諸將は膽氣益す壯に、一以て百に當らざるはなかつた。そこで秀は決死の士數千人と共に、城西の水上から敵の中堅を衝いたが、果して尋邑の陣が亂れたから、漢兵は勝に乗じて奮戦し、遂に敵將王尋を殺した。此の時城中も亦鼓噪して出で、内外勢を合せ震呼の聲が天地を動かした。そこで王莽の軍は大に潰え、走る者は相騰踐した。會大風雷雨して屋瓦は皆飛び、河水は盛に溢れ、虎豹は皆股戰し、士卒の溺死する者は萬を以て數へられた。關中は聞いて震恐し、海内の豪傑が響應した。時に更始元年(王莽の地皇四年。皇紀六八三年)で王莽の敗亡と、漢室の再興とは、此の一戦に決したのである。

第十六章 東漢の政。匈奴・西域の叛服。

光武の興復 漢帝劉玄は既に王莽を滅ぼしたが、河北の諸郡は猶未だ平定せなかつた

光武の興復

鄧禹

から、劉秀を以て大司馬の事を行はしめ、兵を率ゐて之を徇へしめた。秀は曩に昆陽の戦に、兄續と共に殊功を奏したにもかゝらず、玄は續の功を忌みて之を殺したから、禍の及ばんことを畏れ、深く自ら晦まして苟も功に伐らず、自ら持すること頗る慎んだが、今や命を受けて直に發し、過ぐる所秦の苛政を除いたから、吏民は悦び争うて之を迎へた。時に南陽の人鄧禹は秀に説いて曰く、更始(劉玄を指す)は常才で到底帝王の資ではなく、加之部下の諸將は皆凡庸であつて、一人も爲すに足る者は無いから、明公は宜しく英雄を收攬し、民心を悦ばし、以て高祖の業を恢弘するに若くはないと。秀大に悦び禹を陣中に止めた。時に邯鄲(戰國時代の趙の都、河北廣平府)の卜者王郎といふ者が詐つて成帝の子と稱し、幽(今の河北の北境、及び遼寧省、朝鮮の北境)・冀(今の河北保定以南)二州を降し、州郡響應して勢甚だ盛であつたが、會上谷漁陽の諸將も兵を率ゐて秀に會したから、秀は進んで邯鄲を抜いて王郎を殺し、悉く郡縣を徇へ、威名益々熾であつた。漢帝は即ち使を遣はし、秀を蕭(縣名、今江蘇徐州)王に封じ、兵を罷めて還らしめんとしたが、耿弇(カウエン)は秀に説いて宜しく自立すべきを以てしたから、秀は河北の未だ平らざるを辭として徴に應ぜないうで、當時河濟の間に横行して居る銅馬の諸賊を撃つて之を降し、悉く河北の地を平らげ、遂に諸將の勧めに従つて皇帝と爲り、漢室を再興した。是を漢の世祖光武帝と爲す。實に我が紀元六百八十五年である。

光武帝



東漢

尋いで都を洛陽に移した。洛陽は長安の東に位して居るので、史に之を東漢と稱し、又前漢に對して後漢ともいふ。是より先き、赤眉の樊崇等は猶山東に横行し、劉秀の河北平定の虚に乗じて關中に攻め入り、長安を攻めて帝玄を降し、尋いで之を殺し、歲未だ十二なる劉盆子を推して帝とした。光武即ち鄧禹・馮異等を遣はして赴き撃たしめ、大に之を崑山(河南永寧縣の北に在り)の附近に敗つたから、樊崇等は力屈して、肉袒して出で降つた。是に於て黄河の南北及び關中の地は悉く平らいだ。

光武の一統

光武の一統 光武が立つて洛陽に都するや、中原の地は既に漢威に服したが、四方の群雄の中では、未だ各地に割據し、或は帝王を稱して漢命を奉ぜざる者が多かつた。其の主なる者を擧ぐれば、先づ河西に竇融トウユウがあり、隗囂トウキョウが有る者、公孫述は四川に據つて帝を稱し、其の他東南方には楚王と稱する者、淮南王と稱する者、睢陽に帝と稱する者、齊王と號する者、海西王と號する者等があつた。其の他交趾諸蠻の叛せる者もあつたから、光武は因つて鄧禹・馮異・吳漢・耿弇・馬援等の諸將を遣はし、前後十數年を要して悉く之を平定統一した。

(一)河西

(一)河西 時に河西(金城・武威・張掖・酒泉・敦煌五郡の地、今の甘肅蘭州涼州甘州及び肅州安西州)の竇融は、初め王莽に仕へたが、莽が敗るゝに及んで、更始(劉)の大司馬趙萌に降つて重んぜられ、累世河西に仕官して具

さに其の土俗を知つて居たが、更始の敗るゝや、推されて五郡(武威・張掖・酒泉・敦煌・金城)大將軍と爲つて河西に據つた。時に隗囂は辨士を遣はして、融に自立を勧めたが、融は従はないで、遂に使を以て書を洛陽に奉ぜしめたから、帝は之に璽書を賜ひ、融を涼州の牧と爲し、尋いで大司空とした。時に建武五年である。融は自ら舊臣でないのに、一旦入朝して功臣の右に在るを思つて、容貌辭氣共に頗る卑恭の態度で、上書して屢々爵位を辭したが、帝は許さなかつた。是より河西は全く平いだ。

(二)隴右

(二)隴右 光武の初めて立つや、天水(今の甘肅省通渭縣)の人隗囂トウキョウは隴西に在つて西州大將軍と稱し、人を遣はして書を洛陽に奉じて、光武に通ぜしめた。光武は殊禮を以て之を遇したが、囂は常に異心を抱き、或は蜀の公孫述と連合を策し、或は河西の竇融に説いて自立を勧めたが、皆成らなかつたので、後遂に公孫述に降つて臣と稱したが、述は囂を立て、朔寧王と爲して之を援けたから、其の勢は漸く盛となつた。建武八年に光武は自ら將として囂を討つた。時に馬援は米を積んで山谷を作り、形勢を指摘して軍の従ふ所の徑道を開示し、竇融も五郡の太守を率ゐて之に會し、共に軍を進めたから、囂は西城(隴西郡に屬す、故城は甘肅秦州の西南に在り)に奔つた。會、穎川に盜賊が起り、帝は還つて之を征したが、九年に囂は病んで死し、子純が嗣いで王と爲つたが、漢軍は攻めて之を降し、隴右は全く平



だ。時に建武十年であつた。

(三)蜀

(三)蜀 曩に更始(劉玄)が立つや、公孫述は群雄を破り、自立して蜀王と爲つたが、光武の建武元年に遂に天子となり、成家と號し成都に都した。建武四年に隗囂は其の將馬援をして往いて公孫述を觀せしめた。援はもと述と能く知つて居つたから、心中に以爲ふのに、われ今行けば述は當に手を握つて平生の如く歡ぶだらうと。然るに豈圖らんや述は陸衛を陳ねて援を延き、禮饗甚だ盛であつたから、援は歸つて囂に謂つて曰く、子陽(字述の)は井底の蛙だ、而かも妄りに自ら尊大にして居る。宜しく意を東方に專にするに若くはないと。建武九年に、光武は書を述に與へて、禍福を陳じ降を勸めたが、述は曰く興廢は天の命だ、世豈降天子が有らんやと、刺客を放つて漢の將を殺した。時に河西は既に平らぎ、隴右も亦定まり、天下に餘す所は只蜀有るのみであつたから、光武乃ち謂つて曰く「人苦不自足」。既得隴復望蜀」と。建武十一年に大司馬吳漢を遣はして、兵に將として蜀を伐たしめ、十二年成都に至り、撃つて述を殺し、蜀は全く平いだ。

(四)東南・東北

(四)東南・東北 以上の他に光武の初年には、尙一方に割據して漢威に服せぬ者が多かつた。即ち劉永は睢陽(縣名、今の河南商丘縣)に據つて帝を稱し、董賢を立て、海西(縣名、江蘇海州の南)王と爲し、張歩を齊王とした。又秦豊は黎丘(城名、湖北宜城縣の北)に據つて楚の黎王と稱し、李憲は廬江(郡名、今の安徽安慶廬州)に據つて淮南王と稱し、後帝と稱した。漁陽の太守彭寵は、漢に叛いて自ら燕王と稱し、其の他群盜が猶多かつた。光武は即ち將軍吳漢等を遣はして東伐せしめたが、睢陽の人が劉永を斬つて降り、又將軍耿弇をして北伐せしめたが、彭寵の奴が寵を斬つて降つた。又將軍朱祐は急に黎丘を攻め、秦豊は出て降つたから洛陽に送つて之を斬つた。次いで光武は自ら將として董賢及び叛將龐萌を撃つて之を走らせ、尋いで捕へ殺した。斯くて十年を出ないで、天下は全く平らぎ、遂に統一の業を完成した。

光武の施政

光武の施政 光武は年二十八の時始めて兵を起し、三十一で帝位に即き、四十二歳で群雄を平げ、今や大業が既に濟り、海内に亦漢に敵する者が無くなつたから、是より大に意を内治に用ゐ、専ら武臣を退けて文吏を進め、柔道を以て治國の要道とした。帝は久しく兵馬の間に在つたから、武事を厭ひ、蜀が平いで後は、警急なる場合でなければ、軍旅の事を言はなかつた。會、匈奴の衰頽に乗じて之を滅さうと上書する者があつたが、帝は黃石公の記を示して曰く、「柔能く剛を制し、弱能く、強に勝つ」と。是より諸將も敢て兵を言ふ者が無くなつた。帝は常に、前漢の高祖の功臣が終を全くせなかつたのを惜み、務めて功臣を保全して官職に任せしめなかつたから、功臣二十八將は皆能く終を全うすることを得た。吳漢・賈復は皆帝の世に終つたが、漢は性敦厚で、而かも智略が

吳漢



賈復

あり、師を出すに、朝に詔を受ければ夕に道に就き、或は戦うて利が無くても、意氣自若たるものであつた。帝常に歎賞して曰く、吳公は人意を強くし、隠として一敵國の如きものであると。されば其の卒するに及んで、帝は其の第に臨み、言はんと欲する所を問うたが、漢が曰く、臣は愚にして知る所が無いが、惟願はくは陛下慎んで赦す無からんことを請うと。賈復は征伐に従つて未だ嘗て敗れなかつたが、嘗て戦ひて重傷を被つたので、帝驚いて曰く、吾が名將を失つたと。會、其の婦の孕めるを聞いて、若し男子を生んだならば我が女を之に嫁してやらう、又女子であつたならば、我が子が之を娶つてやらうと仰せられた。其の群臣を愛撫することが此の如くであつた。然れども帝は賊罪に於ては毫も貸す所が無かつた。大司徒歐陽歙が嘗て賊罪を犯したので、歙の授くる所の尙書の弟子千餘人が、闕を守つて哀を求めたが、免さずに、歙は竟に獄中に死んだ。之を以て東漢の初世には、地方官の廉潔なる者が多く、民皆意を安んじた。帝は又學を好み、銳意文治に力を注いで、悉く王莽の諸制を廢し、大學を起し、古典を稽式し、禮樂を修明した。帝は毎旦朝を視、日昃カクいて乃ち罷めた。又常に公卿郎將を會して儒書を講論し、夜分になつて乃ち寝ねたので、太子が之を憂へて諫めたが、帝は曰く、我自ら此を樂むものであるから、未だ嘗て疲れはせぬと。帝は又前漢の末に、天下の人士が、皆王氏に媚び

歐陽歙

光武の好學

周黨

嚴光

て諂諛を事としてから、其の風が盛に行はれ、名徳の士も多く隱遁したから、之を矯めやうとして、努めて高節の士を優遇し、先づ處士の周黨・嚴光を徵した。黨乃ち入りて見え伏して謁せなかつたので、博士が奏して之を詆つたが、帝曰く、古より明王聖主には必ず賓せざるの士が有つたと、帛を賜うて之を罷めた。光は嘗て帝と同じく學んで相知つたが、帝は天下を物色して之を得たから、累シキりに徵したので乃ち至つた。よつて諫議大夫に拜したが、肯て受けずに、去つて富春山浙江省桐廬縣の西に在りに耕釣して世を終つた。斯く帝は高節の士を禮したから、節を尙ぶの風が靡然として起り、以て東漢一代の風尙を馴致した。帝は又儒學を好み、既に中原を平らげてからは、首として大學を起して、古典を稽式し、禮樂を修明し、遂に明堂・靈臺・辟雍を起し、公卿郎將を引いて儒書を講論したから、諸功臣も亦皆書を讀むに至り、學術が頗る盛なるに至つた。斯くて光武は在位三十三年、六十二歳で崩じ、皇太子が立つた。之を顯宗孝明皇帝となす。

明帝  
章帝の治

**明帝・章帝の治** 明帝は聰明にして儒を好み、太子王侯及び群臣の子弟に皆儒經を授けた。帝は又親しく辟雍に臨んで、大射養老の禮を行ひ、禮畢つて諸儒を伴つて堂に升り、問難講論したが、冠帶搢紳の士の觀聽する者が幾千百に達し、實に壯觀を極めた。又畫工に命じ、鄧禹を首とし、吳漢・賈復・耿弇・寇恂・岑彭・馮異・朱祐・祭遵等を始



佛教傳來の初

め、中興の功臣三十二人の像を南宮の雲臺に圖せしめ、以て其の功を頌した。唯だ馬援は皇后の父であるので與らなかつた。帝は光武の制度を遵奉して少しも變更せず、后妃の家は侯に封じて、政に預ることを得ざらしめた。故を以て當時吏は其の人を得、民は其の業を樂み、戸口は繁殖し、遠近皆畏服した。然れども性幅察で、好んで人の罪科を摘發し、公卿大臣以下、詆毀誅殺せられた者が數千人に及んだ。帝は又西域に佛教のあつたことを聞き、使を遣はして印度に之いて其の道を求めしめ、佛經及び二僧を得て伴ひ來つた。是れが支那に佛教の傳來した初めである。帝は深く之を尊信し、爲めに白馬寺を建てたが、之亦支那に佛寺あるの初である。斯くて明帝は在位十八年にして崩じ、太子烜が立つた。之を肅宗孝章帝と爲す。

章帝

章帝は前朝察察の後を承けて、民の苛切を厭ふことを知つたから、努めて寛厚に従ひ、刑を慎み徭を省き、又師を尊び學を重んじ、親ら魯に至つて孔子の廟に祠り、六代(黃帝夏商周)の禮樂を起し、或は宣帝が嘗て群儒を石渠閣に會して五經の異同を論定した故事に倣つて、班固・賈逵以下の諸儒を白虎觀に集め、親ら臨決して「白虎通」を作つた。帝は在位十三年間、精を勵まし治を圖つたから、天下は能く治まつた。崩じて太子肇が立ち、之を和帝といふた。光武よりは是に至る迄、三帝六十餘年の間、内は綱紀大に張り、

「白虎通」を作る

南北匈奴

外は匈奴、西域の征伐、佛教の渡來等があつて、實に東漢の盛時であつた。

**南北匈奴** 匈奴は、曩に前漢元帝の朝に、呼韓邪單于が歸服して以來、累世漢に服屬したが、漢が中絶して王莽が立つに及び、威を匈奴に示さんと欲し、匈奴の單于を改めて、降奴の服と爲し、諸將に命じて北征せしめたから、是より再び離反し、烏桓・鮮卑・西域諸國等と相結んで、連りに山西陝西を劫かして王莽に抗した。尋いで後漢の光武帝が立つに及び、努めて内治を勵み、外國と事端を開くことを避けたから、匈奴は益々驕つて、連りに北邊に入寇したが、連年の饑饉と疫病との爲めに、人畜の死亡する者が甚だ多く、加ふるに烏桓が之に乗じて頻りに匈奴を侵寇したから、匈奴は遠く北に移つて、漠南には復た人無きに至つた。會々匈奴に於ては、單于の繼承に就いて内訌が起り、呼韓邪單于の孫の日逐王比は、蒲奴單于と隙を生じて、皇紀七百八年(光武帝建武廿四年西紀四八年)に匈奴南邊の八部は、日逐王比を擁して南單于と爲し、漢に内附した。是に於て匈奴は遂に南北に分れた。時に光武帝の建武廿五年(西紀四九年)である。漢は即ち南單于を西河(郡名、今の山西汾州の境)の美稷(縣名、西河郡の北境、故城は内蒙古鄂爾多斯左翼中旗東南に在り)に置き、匈奴中郎將を任命して、兵を將ゐて之を擁護せしめた。尋いで北匈奴も亦使を遣はして和親を求め、漢は之を却けたが、再來するに及んで之を許した。然れども反覆常無く、明帝の初年に至つて西域諸を威服し、尋いで



で漢の邊疆を侵したから、耿秉(耿弇の姪)は北匈奴を撃たんと請ひ、宜しく武帝が西域に通じて、匈奴の右臂を断ちたるが如くすべしと奏したから、帝は其の言を嘉みして、秉及び竇固(竇融の姪)を以て都尉と爲し、永平十六年(皇紀七三三年)に諸將を率ゐて北伐せしめた。是に於て固等は敵を追うて蒲類海(今巴爾庫勒海、甘肅鎮西の西北)に至り伊吾廬(今哈密)を取つて、兵を留めて屯田した。

班超の遠征

班超の遠征 曩に王莽の時に、西域諸國は皆叛いて匈奴に服屬したが、後其の賦歛の重いのに苦しみ、光武帝の時に至り、車師(師姑)・鄯善(樓蘭)等の十六國は、各其の子を質として漢に内附し、復た西域都護を置かんことを請うたが、帝は外國と事端を啓くことを欲せず、之を拒絶したから、概ね北匈奴に降附した。永平十六年に、明帝は竇固等を遣はして匈奴を征したが、武帝の舊圖に倣つて西域に通じ、以て北匈奴の勢力を殺がんと欲して、假司馬の班超を西域に遣はした。超は先づ鄯善を威服し、更に于寘(西域國名、今の疏勒、疏勒(西域國名、今の新疆和闐の地)を降したから、是に於て、諸國は皆子を遣はして漢に質とし、西域は復た通ずるに至つた。時に竇固・耿秉等は車師(漢の師姑)を撃つて之を定め、陳睦を都護と爲し、耿恭(耿弇の從弟)・關寵の諸將をして、分れて車師の地に屯せしめた。會、十八年に明帝が崩じ、章帝が立つたが、此の機に乗じて、龜茲は陳睦を没し、北匈奴は耿恭關寵を圍

んだから、章帝は兵を遣はして之を救つたが、寵は敗没し、漢兵は恭を迎へて歸つた。是に於て漢廷は意を西域に絶ち、伊吾廬の屯田を止め、班超を召還せんとしたが、于寘・疏勒等は皆超の去ることを欲せず、泣いて留まるを請ひ、超も亦西域を平らげんと欲し、上疏して兵を請うたから、章帝は即ち兵千餘人を給した。そこで超は于寘諸國の兵を發して、先づ莎車を撃つて之を降し、次いで月氏龜茲諸國も來り降つたから、漢は超を以て都護と爲して龜茲に居らしめた。尋いで超は又龜茲・鄯善等八國の兵を以て、撃つて焉耆を破つたから、是より西域五十餘國は、裏海の濱に至る迄、悉く質を納れて漢に歸服するに至つた。斯くて超は、曩に西域に使してから、此の地に鎮撫すること前後凡そ三十年に及び、年既に老いて歸るを乞うたから、和帝は之を許し、永元十四年(皇紀七六二年、景行天皇朝、西紀一〇二年)に洛陽に歸り、一月にして卒去した。よつて任尙が代はつて都護と爲つたが、頗る邊和を失し、西域諸國は多く叛いたから、安帝の永初元年(皇紀七七年)に至つて、漢は竟に西域を棄て、是より復た都護を置かなかつた。

北匈奴の西移

北匈奴の西移 班超の西域諸國を征服してから、北匈奴は益々衰耗し、黨衆概ね離反し、南部は其の前を攻め、丁零は其の後に寇し、鮮卑は其の左より、西域は其の右より迫つたから、益々困憊したが、章和元年(章帝十三年)に鮮卑は更に撃つて優留單于を斬つたの



で、匈奴は益々亂れ、其の南邊の五十八部は遂に漢に降つた。其の後和帝の永元元年(皇紀七四九年)に、竇憲が罪が有つたので、之を償はうとして帝に請ひ、匈奴を撃つて大に之を破り、二十餘萬人を降し、燕然山(今の杭愛山、外蒙古)に登り、班固(班超の兄)に命じ、功を石に刻して還つた。同三年に憲は復た匈奴を金微山(外蒙古界内に在り)に破り、北單于は走死し餘衆は遠く西方裏海の邊に遁逃した。是れが即ち後にフン(フンヌス又はフンネン)として西洋史上に著はるゝ者である。是に於て、古來屢々支那北邊の憂をなした匈奴は漸く平定したが、其の移轉した跡には、東胡の一種なる鮮卑族が東方から來て其の地を占領し、漸く強大となり、魏・晉の頃には其の勢が頗る盛となつた。

**大秦との交通** 曩に班超が西域都護であつた時に、會和帝の永元九年(景行天皇の朝、西紀九七年)に、其の部將の甘英を大秦に遣はし、之と交通せしめんとしたが、英は途中安息に妨げられ、目的を達せないで條支(又叙利亞と書す)から歸つた。大秦は即ち羅馬帝國で、當時歐羅巴を統一し、南は亞非利加の北土を領し、東は小亞細亞及び條支を並せ、帕提亞(安息)と境を接し、其の境域人口は漢と相匹敵し、實に東西の二大帝國であつた。抑々支那は古くから絹布(綸綵とも單に綸ともいふ)を産したが、希臘・羅馬の舊書に曰く、「東方に大國あり設利迦(セリヤ)と示ひ美錦を産す云々」と。設利迦といふは蓋し漢土を指せるものである。當時西亞細亞の商賈は、

時々葱嶺を踰え、漢の邊境に來て絹布を購ひ、以て羅馬に輸入した。當時羅馬帝國は世界の富を其の首府(羅馬)に集めたから、其の富豪は争うて漢の錦綺を纏ひて、頗る之を珍重したが、途中・西亞細亞商人の手を経るから、其の價が頗る不廉で、一時は黄金と絹と同一の重量を以て交易したといふことである。されば大秦人も亦陸路から直接に漢との交通を望んだが、帕提亞(安息)が常に東洋の貨物を以て、羅馬との貿易の利を占めんとしたから、之を遮つて羅馬に達することの出来ない様にした。然るに桓帝の時に至り、大秦王安敦(羅馬皇帝マルクス・アウレリウス・アントニウス)は、兵を遣はして東征し、大に安息を破つて、波斯灣頭の地を得るに至つたから、乃ち海路より使を遣はし、印度洋を経て日南(交址支那)に來た。時に桓帝の延熹九年(皇紀八二六年、西紀一六六年)で、是より東西兩洋の交通が初めて開け、三國西晉の頃まで、大秦の商賈は時々支那の南邊に來て貿易に従事し、支那の商人も亦錫崙島附近に迄通商する者があるに至つた。然れども其の後中絶して、貿易は遂に盛なるに至らなかつた。

**○劉秀(光武帝)** 字は文叔。南陽(今河南省南陽の人で、高祖九世の孫である。王莽の末年に、新市、平林の兵が起り、南陽騒動した。秀の兄績は慷慨で大節があり、憤々として社稷を回復しやうと欲し、身を傾け産を破つて、常に天下の雄俊に交つたが、是に於て績は自ら春陵の子弟を發したが、皆恐懼して逃げ匿れ、曰はく、伯升(績の字)我々を殺すのであると。然るに秀が絳衣大冠するのを







書に通じ、才學當時に聞えた。父班彪はもと司馬遷の史記に次いで、西漢一代の歴史を作らんとし、數十人の傳を作つた。班固は父の志を継ぎ、且つ明帝の命を奉じて「漢書」を編纂したが、二十餘年（皇紀七一八年より始む）を経て畧之を完成した。然れども其の八表及び天文志を終へないで死んだから、和帝は彼の妹班昭に詔して之を完成せしめた。されば漢書は、班氏父子兄弟の手によつて、三十餘年の長年月を経て成つたものである。和帝の永元元年に大將軍竇憲の北匈奴を征するや、班固は參謀と爲り、匈奴を破つて燕然山に登り、班固に命じ、石に刻して漢の功を勒せしめた。後竇憲が謀逆の罪を以て誅せらるゝに及んで、班固も亦連坐して獄に下され、次いで殺された。

班昭

○班昭 班固等の妹である。曹壽の妻となつたが、壽が早世した後は、寡居して篤行があつた。昭は博學高才を以て聞えたから、和帝が召して宮に入れ、皇后貴人をして皆之に師事せしめたので、時人は之を尊稱して曹大家といつた。昭は兄を助けて漢書を完成し、尙「女誡」七篇を作り、婦人の執るべき道德を説いた。かくて安帝の末年に年七十餘にして歿した。

任尙

○任尙 班超が年既に老いて官を辭して歸ると、任尙が之に代はつて西域都護となつた。尙は班超に教を請うたが、超が曰く、君は性嚴急であるが、夫れ水が清ければ大魚は住まないから、宜しく蕩佚簡易を旨とすべしと。尙私かに人に謂つて曰く、我は班君の奇策あるべきを思ふたが、今言ふ所は誠に平凡なことであると。然るに尙は、後果して邊境の和を失ひ、漢は遂に西域を棄て、都護を廢するに至つた。

班勇

○班勇 班超の子である。當時西域は既に漢に反き、北匈奴も復た北邊を略有し、連りに河西の地に寇をしたから、安帝の永寧元年に、邊郡守が之を撃たんと請うた。鄧太后は、班勇が父の風があるといふことを聞き、召して謀を問うた。勇が曰く、宜しく敦煌の營兵を復し、又西域長史を遣はして、出で、樓蘭の西に屯せしむるがよいと。太后は之に従うた。安帝は後又勇を西域長史と爲し、兵五百を率ゐる。出で、柳中（車師前部の地、今の吐魯番廳の東に在り）に屯せしめたが、勇は匈奴の車師に屯田する者を逐ひ、又車師後部を撃ち、其の王及び匈奴の使者を捕へ、次いで順帝の永建元年（皇紀七八六年）に諸國の兵を發し、匈奴を撃つて之を走らせた。是に於て西域は復た漢に服したが、勇が去つて後は、漢の威令は復た西域に行はれざるに至つた。

鮮卑

○鮮卑 今の通古斯民族に屬し、滿洲及蒙古の東部に住んで居つた。その鮮卑と稱するのは、鮮卑山の附近に住んで居るからだといふ。漢初に匈奴に破られ、遠く遼東の塞外に走つた。當時は未だ漢と交通せなかつたが、後漢の光武帝の時に、漢の北邊に寇したから、建武二十一年に、漢軍に撃たれて内屬するに至つた。和帝の時に竇憲が匈奴の北單于を撃破して逃走せしめたから、鮮卑は之より其の地に移りて勢漸く盛であつた。斯くて鮮卑は東西四千餘清里、南北七千餘清里の廣大なる版圖を有し、其の地を別つて東、中、西の三部となし、各盛であつた。其の部屬遍く北邊に散在したが、晋の代に至つて宇文・慕容・拓跋・秃髮等の諸族は、皆鮮卑から出て著はるゝに至つた。

甘英

○甘英 後漢の永元九年に班超の椽となつたが、超は東羅馬と交通の爲めに彼を遣はしたが、西海（波



斯灣岸に至り土人(安息人)に脅かされて還つた。蓋し漢との羅馬と直接の交通が開けたら、安息人は絹の仲買の利を失ふから之を妨げたのであらう。

○大秦 漢の世に當りて、西に在りては羅馬大帝國が歐羅巴を統一し、南は亞非利加の北土を併せ、東は小亞細亞及叙利亞を兼ね、帕提亞と界を接し、面積人口は殆ど漢と相匹敵した。よりに漢人は相傳へて「其の人民は皆長大平正で中國に類するものがある。故に之を大秦と謂ふ」と曰ふた。蓋、當時に在つては、外國人は漢人を指して秦(支那)といひ、羅馬は西方の文明國であるから、大秦というたものであらう。或は羅馬の領地たりし地中海濱の商港タルシ(Tarsi)を訛つたものであらうともいはれ、或は漢史に大秦一名犁軒とあるが、之は紅海岸の一商港レケム(Raken)の名を取り、羅馬帝國に負はせたものだらうともいはれてゐる。

○條支 甘英が大秦に使したのは、唯其の東部に達したのみで、未だ歐羅巴の地には入らなかつた。漢史に「英、抵條支、臨大海、不渡而還」とある。條支とは多分その地方人の冠つてゐた冠(タジック)を指したもので、叙利亞の地方だと思はれ、大海とは波斯灣を謂ふのであらう。

○安敦(マルクスオレリウスアントニウス) 後漢の桓帝の時に、帕提亞(安息とも書す)が羅馬の東邊を侵畧したから、羅馬王安敦(Caraus Anselmus Antonius)は、將に命じて東伐して大に之を敗つた。即ち使を遣はして、海路より漢に至らしめた。之は延熹九年(桓帝二十年。我皇紀八二六年。西紀一六六年)であつた。

大秦

條支

安敦

大宛

○大宛 北は康居と、南は大月氏と境してゐる。土地・風物・人情等は、大月氏・安息等と同である。葡萄を以て酒を造り、富人に至つては酒を藏すること萬餘石に至り、久しきものは數十年に至つても尙敗せないといふ。人は酒を嗜み、馬は苜蓿を嗜むで居る。武帝は張騫の言により、使を遣はし千金を持って以て宛の善馬を得んとしたが、宛王は漢が絶遠であつて大兵を出すこと能はざるを知つて、漢の使者を殺した。大初元年(皇紀五五七年)に、武帝は李廣利を遣はして其の都城を攻め、勝たずして歸つた。後、帝は再び李廣利を遣はして大宛を討たしめたので、宛人は其の王母寒の首を斬りて献じた。漢軍善馬數十頭、中馬以下三千頭を取り、宛の貴人味蔡を立て、王とし、年々良馬を献ぜしむることを約して、遂に葡萄・苜蓿の種を採つて歸つた。是より漢の威は西域に震ひ、西域諸國が前後して來貢するに至つた。

○疏勒 漢の時に通じた。今の新疆省喀什噶爾(Kashgar)附近の國である。漢より唐までは疏勒と呼ばれ、佛書には沙勒と記されてある。此の國は稻・粟・蔗・銅・鐵・綿等を産す。後漢明帝の永平年中、龜茲王建は、疏勒王成を攻殺して別に疏勒王を立てた。漢の班超が使用するに及んで、成の兄の子忠を立て、疏勒王とした。後魏の文成の末朝貢し、隋の大業中、唐の貞觀にも來朝した。

○安息 バルチア(Parchia)である。西紀前五〇年の頃、バルニ(Parni)人が今の波斯のホラッサン(Khorassan)州並に附近の地を併せて王國を建て、遂に波斯全部を統一してアルサク王朝を建設するに及び、全國を呼ぶにベルシアと稱せないので、バルチアと稱するに至つた。漢の時安息の名で

安息

疏勒



聞えたのは此の國である。抑、此の種族はもとバルニと稱し、バクトリア地方に遊牧せる勇悍強捷の族で、ベルシア人と同じく、アリア種に屬せるものであるが、アレクサンドル大王の遠征により、去りて西方バルチャに移住し、此所に王國を建設してバルチャと稱するに至つた。此の國には名君が出て、屢羅馬と交戦して其の東侵を防いだが、後四百餘年ばかりしてサッサン王家の起るに及び、遂に滅亡した。

呼韓邪單于と郅支單于

○呼韓邪單于と郅支單于

漢の時匈奴に内亂が起り、五單于争ひ立ち、遂に分れて二國と爲つた。呼韓邪單于と郅支單于と相攻め、呼韓邪は敗れて漢に降り臣と稱した。黃龍元年(宣帝二十五年)に郅支單于は烏孫を破り、五年漢の使者を殺し、西の方康居に走つた。其の後西域の副校尉の陳湯が兵を發し、都護甘延壽と郅支單于を康居に撃つて之を殺した。其の後呼韓邪單于が入朝し、漢の婚たらんと請うたので、元帝は宮女王昭君を以て之に妻はせた。之より匈奴の後裔は、世々漢の甥と稱し姓を劉といふに至つた。

大秦名稱の起原

○大秦名稱の起原

(一)後漢書の説「後漢書西域傳に「其人民皆長大平正。有<sub>レ</sub>類<sub>二</sub>中國<sub>一</sub>。故謂<sub>二</sub>之大秦<sub>一</sub>。」といひ、其の意は、當時外國人は、漢人を指して秦(支那)といひ、羅馬も亦西方の文明國なれば、之を大秦といふたのであると。

(二)レケム (Mach) 轉訛説 大秦一に犁軒といひ、犁軒は獨逸人ヒルト (Hirt) 氏の説にては、當時

羅馬の領地たりし紅海の頭の商港レケムの名を訛りて羅馬帝國に負はせたるものだといふから、大秦も亦同様の起源に因れる名稱にあらずやと推測せらる云々。

(三) タルシ (Tars) 轉訛説。ラクーベリ (Laconicie) 氏は當時羅馬の領地たりし地中海濱の商港タルシを訛りたるものなるべし云々。(桑原博士東洋史教授資料より)

第十七章 東漢の衰亡

外戚宦官の擅權

外戚宦官の擅權

光武帝は前漢の末路に鑑みて、特に外戚の禍を防ぐに注意し、明帝も亦之に倣つて外戚に任ぜなかつたが、章帝が立つて竇后を寵するに及んで諸竇氏が皆貴く、漸く外戚專權の端を開いた。凡そ古來外戚の國を禍したことは漢より甚しきは無く、又外戚にして禍を受けた者の多いことも漢の世に如くものは無い。實に兩漢を通じて后妃の家の著はれた者が四十餘氏あつたが、其の身家共に全き者は五六に過ぎない。章帝崩じて、子の和帝が十歳で位に即き、竇后が太后となつて政を攝し太后の兄憲は、匈奴を征して大功を建てたので、大將軍と爲つて權を專にし、一族卿校と爲りて朝廷に充滿した。和帝は長じて憲の逆謀を知り、宦官鄭衆と謀つて憲に迫つて自殺せしめ、其の黨與を黜けて、衆を以て大長秋(皇太后)とした。和帝は在位十八年で崩じ子が無かつた

竇太后



鄧太后

ので庶子隆を迎へ立てた。生れて百餘日。之を殤帝といひ、鄧太后(和帝の后)が朝に臨んで政を見た。帝は在位八ヶ月で崩じたから、太后は即ち兄鄧騭タウシツと謀つて安帝を立てた。年甫めて十三。太后が同じく朝に臨み、騭は大將軍となつた。曩に和帝の時に、宦官鄭衆が功を立てたに依つて、和帝は常に之と政を議し、宦官が此れより權を用ゐるに至つたが、今や鄧太后が女主を以て制を稱し、公卿に接せず、宦官を通じて凡べての命を傳へしめたから、宦官の權が益々重きを加ふるに至つた。安帝は少くして聰明であつたが、既にして太后崩じ、宦官等は太后の兄弟が異謀をはかると誣告したから、帝は怒つて悉く諸鄧を斥け、皇后閹氏の兄閹顯、及び宦者江京等に政を委ねた。帝は在位十九年で崩じ、閹后が太后となり、兄顯等と策を定め、安帝の從弟懿を迎へ立てたが、間もなく崩じた。そこで宦官の孫程等は江京を斬つて順帝を迎へ立て、諸閹を殺し、太后を離宮に遷したが、尋いで崩じた。此の時宦官の、冊立の功によりて侯に封ぜられた者が十九人もあつた。順帝長じて梁貴人を皇后とした。そこで后の兄の冀が大將軍と爲り、權を恣にし姻族が朝に滿ちた。順帝在位十九年で崩じ、太子が立ち、冲帝といふた。年二歳。梁后が太后と爲り朝に臨んだが明年帝崩じ、太后は梁冀と謀り質帝を立てた。年八歳。帝は性聰明で、嘗て冀を目して、此れ跋扈將軍なりと云つたので、冀は深く之を惡

梁太后  
梁冀

單超

み、左右をして毒を進めして之を弑した。在位一年餘。冀は又策して桓帝を立てた。時に冀は大將軍として政を乗ること十九年、凶恣日に募つたので、帝は宦官單超等と謀り、兵を勒して冀の印綬を收め、冀は自殺し、梁氏少長と無く皆棄市せられた。是に於て超等五人侯に封ぜられ、之を五侯といつたが、五侯は是より驕横を極め、刑殺は其の意の儘に行ひ、貪虐放縱恰も盜と異ならなかつた。當時名臣相繼いで三公に陞り、國民望を屬したが、皆宦官に制せられ、爲す無くして空しく没した。是に於て天下の大權は悉く宦官に歸し、其の勢は朝廷を傾けるに至つた。

黨錮の禍

**黨錮の禍** 曩に光武帝は、頻りに處士を優遇し、名節を獎勵したので、遂に一代の風尚を馴致し、清節の士が多く輩出し、時勢を論議し、宦官の專横を憤る者が多かつたが、遂に此等の士と宦官との間に、激烈なる軋轢を惹起するに至つた。桓帝の時、太尉陳蕃、司令校尉李膺等は、名節を以て相交はり、大學の諸生三萬餘人、郭泰及び潁川の賈彪等が其の冠となりて、皆之に應じ、交々相褒賞した。學中常に語つて曰く、天下の模楷は李元禮(元禮は膺の字)、強禦を畏れざるは陳仲舉(仲舉は蕃の字)である。是に於て中外風を承け、臧否を以て相尙び、朝臣も皆之に貶議せらるゝを畏れた。會々南陽の太守成瑨と、太原の太守劉瓛とは、宦官の徒を殺し、獄に下されて棄市せられた。又山陽の太守翟超は、宦官



が制を超えて營んだ冢宅を破り、東海の相黃浮は、宦官の族人の法を犯した者を殺したので、超・浮二人は皆罪を得た。陳蕃は大に之を争つたが、帝は聽かない。時に李膺も亦宦官の徒を殺したから、宦官等は上書して、膺等大學の遊士を養ひて黨を組み、朝廷を誹謗し、風俗を攪亂すと奏したので、帝は震怒し、李膺以下杜密陳寔范滂の徒二百餘人を獄に下した。時に陳蕃は極諫したので官を免ぜられた。會々、彪は洛陽に赴いて、皇后の父竇武に説いて、上疏して帝の怒を解かしめ、膺等の獄辭も亦多く宦官の子弟を引いたので、宦官等は懼れて、帝に奏して黨人を赦し、各其の郷國に歸らしめて終身を禁錮した。之を前黨錮の禍といふ。是より膺等の名聲は却つて愈々高くなつた。既にして桓帝は在位二十一年で崩じ子が無いので、竇皇后が太后となり、父武と議して靈帝を迎へ立てた。年十三。武は大將軍となり、陳蕃は大傳と爲り、李膺杜密尹勳等の名賢は朝に列し、民皆太平を想望したが、會々陳蕃等は竇武と謀り、宦官曹節王甫等を誅せんとし、謀洩れて蕃は執へ殺され、武は自殺し、親姻悉く誅せられ、曹節等七人は列侯と爲つた。次いで又李膺杜密范滂等百餘人を獄に下して考死せしめ、凡そ宦官と隙ある者は悉く黨人となし、其の死徒廢禁せられた者は六七百人に及び黨人の門生故吏親族等の位に在る者は、皆官を免ぜられた。之を後黨錮の禍といふ。

前黨錮の禍

後黨錮の禍

宦官の誅滅

黄巾の賊

宦官の誅滅 宦官の跋扈其の極に達し、朝政は紊亂して漢室の威令は行はれず、天下漸く亂れんとするの時に當り、鉅鹿(郡名、今の直隸順德府の東南境及び廣甲府の東北境)の張角といふ者が、黄老の學に附會し、太平道といふ妖術を以て四方に遊説し、徒衆を糾合すること十餘年、其の徒數十萬に達し、靈帝の中平元年、遂に兵を山東に起し、勢頗る盛で、旬月にして諸州が響應した。其の徒は皆黄巾を着けたから、之を黄巾の賊といつた。帝驚き黨人の賊を助くることを懼れ、急に黨禁を解き、皇甫嵩等に命じて之を討たしめた。嵩は曹操と兵を合せて、大に賊軍を破つた。既にして張角は病んで死し、賊軍全く鎮定したが其の殘黨が猶所在に縱横したから、朝廷即ち大常劉焉の議を用ひて、地方に牧伯を置き、重臣を選んで之に任じ、以て四方を鎮撫せしめたから、是より中央の權力は地方に移り、他日群雄割據の基を開くに至つた。靈帝は在位廿二年で崩じ、皇子辨が即位した。年十四。母何太后が朝に臨み、後の兄何進が朝政を執つた。時に袁紹は、進に勸めて河東(山西省の西南部)の董卓及び四方の猛將を召して宦官を誅戮せんと謀つたが、謀泄れて進は宦官の爲めに殺された。そこで袁紹は急に兵を勸し、悉く諸宦官を捕へ、少長と無く皆之を殺すこと凡そ二千人に及んだ。桓帝以來三十餘年の間、朝權を擅にし暴横を極めた宦官も、是に至りて全く其の患を絶つに至つた。會、董卓は召に應じて洛陽に入り、袁紹を逐ひ河太



后を弑し、帝辨を廢して弟獻帝を立て、權を擅にした。是に於て關東の州郡兵を起して、袁紹を推して盟主と爲し、董卓を討つを以て名とした。そこで卓は、洛陽の宮殿を焼き、諸陵墓を發いて其の珍寶を收め、諸富民を殺して其の財物を沒收し、餘民數百萬を驅つて都を長安に遷し、凶暴は日に募つた。是に於て司徒王允等は密に謀り、卓の臣呂布を誘ひて卓を殺さしめた。然るに卓の餘黨の徒が軍を率ゐて長安に入り、王允を殺し、呂布は走りて袁述に依り、又袁紹に歸した。

漢末の大亂

漢末の大亂 此の頃、關東の諸將は互に攻伐掠奪を事とし、天下は無政府の状態に陥り、遂に群雄割據の勢をなすに至つた。即ち遼東に公孫度あり。直隸に公孫瓚あり。袁紹は其の西に在りて冀・青・幽・并の四州を領し、曹操は山東に據りて袁・豫二州を占め、其の他袁術(袁紹の從弟)は河南・安徽の間を占め、劉表は湖北を有し、孫堅は湖南に據り、劉璋は四川の地を保ち、各々機を得て天下に雄飛せんとするの形勢となつた。中にも曹操は最も智略に富み、初め黃巾の賊が起つた時に、皇甫嵩と力を合せて之を討じ、其の後袁州に據りて竊に形勢を傍觀したが、建安元年(獻帝の七年)に獻帝が洛陽に還るや否や、謀士荀彧の策を用ひて、直に兵を將ゐて入朝し、帝を許(縣名、今の河南許州)に迎へて之を擁して天下に號令した。時に袁術は、淫侈滋々甚しく、資實は空盡して自立することが出來ず、自ら宮

室を燒いて青州に奔らんとしたから、操は兵を遣して之を滅し、河南・江南の地を併呑した。時に袁紹は山西の地に在り、公孫瓚を斬つて其の地を併せ、心益驕り、遂に精兵を以て許を攻めんとしたから、曹操は之と官渡(城名、河南中牟縣の東北)に戦つて、大に之を破り、紹は病を發して死んだ。操は之に乗じて悉く袁紹の故地を略し、更に北伐して烏桓を平げた。尋いで遼東の公孫康(度の子)も來降し、北方諸州は平定したから、更に兵を南に進めて、劉表を襄陽(縣名、今の湖北襄陽)に討つた。時に表は卒し、其の子の琮は荆州を以て操に降つたから、劉備は其の衆を率ゐて江東に奔つた。備は前漢の景帝の後裔である。曩に黃巾の賊を討つて起り、義弟關羽、張飛と共に公孫瓚に頼り、尋いで曹操に歸し、大に優遇せられて豫州の牧と爲つたが、會、車騎將軍董承といふ者が、密詔を受くると稱し、備と謀りて曹操を誅せんとしたが成らず、董承は殺され、劉備は奔りて袁紹に頼つて居つたものである。然るに今や袁紹が操と戦つて敗死したから、備は更に荆州に奔つて劉表に歸したのである。是より先き備が襄陽に居つた時、賢人諸葛亮を得て天下三分の謀を聽き、大に機の到るを待つて居つたが、是に至つて亮は、備に勸めて江東に赴き、孫權と共に力を合せて操の軍を防がしめた。孫權は孫堅の子で、兄孫策の後を承けて江東の地に據り、勢漸く盛であつた。初め孫堅は湖南に據つたが、劉表と戦つて殺されたの



で、其の二子の策と權とは逃れて袁術に歸し、命を受けて江東を定めたが、會、術は曹操と戦つて敗死したから、策は遂に江東に據り、將に兵を出して許を襲ひ、漢劉を迎へんとして密に兵を治めたが、未だ發せざるに臨み、會、怨家(策を怨める者)の爲めに傷を被りて死んだ。そこで弟の權が代つて其の衆を領するに至つたが、是に至つて孫權は劉備の請を容れ、軍を合せて曹操の軍八十萬と赤壁(湖北省嘉魚縣の東北)に相對した。此の時孫權の將周瑜は、僅に精兵三萬を督し、奇計を以て大に之を破つたので、曹操狼狽し、纔に身を以て免れ還つた。之を赤壁の戦といふ。

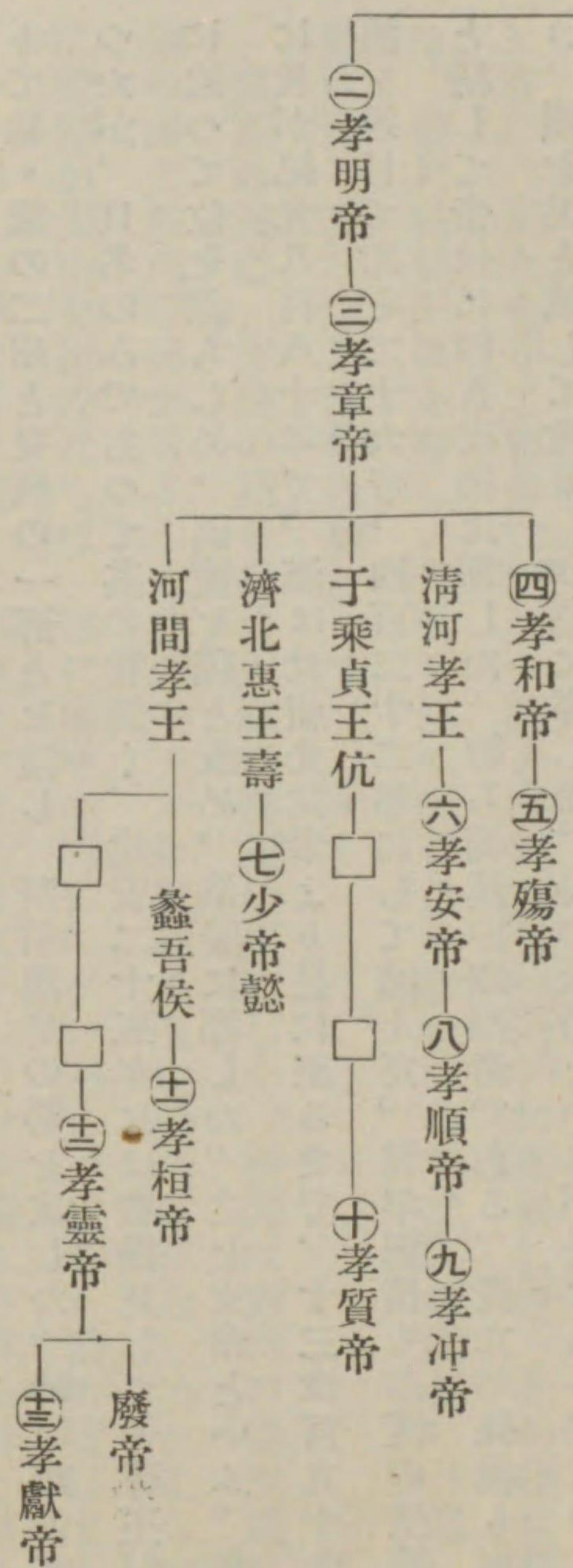
**東漢の滅亡** 赤壁の戦の後に周瑜は孫權に上疏して、劉備は梟雄の姿を以て、關羽張飛の如き熊虎の將が有るから、此の三人を聚めて俱に疆場に在らしめたならば、恐らくは蛟龍が雲雨を得たならば、終に池中の物ではないから、宜しく備を徙して吳に置くがよいと曰うたが、權は従はなかつた。會、瑜は卒したが、權は魯肅の勸を容れて劉備に荆州(湖北省)の地を貸し、進んで巴蜀の地を取らしめ、共に曹操を挾撃せんと謀つた。備は即ち荆州の四郡を定め、關羽を江陵(湖北省)に留めて之を守らしめ、親ら兵を率ゐて江を溯り、巴より蜀に入り、涪城(涪縣、今の四川省綿州)に據り、遂に成都に入り、自ら益州の牧を領した。是に於て孫權は人を備に遣し、荆州の諸郡を返さしめんとしたが、備は従はずし

て之れと争つたが、尋いで荆州を分けて湘水を以て界とした。時に曹操は魏公と爲り、遂に爵を進めて王と爲つたが、次いで劉備も魏軍を破つて漢中を取り、自立して漢中王と稱した。曩に關東の諸將は、皆董卓を討ずる目的を以て起つたが、已にして各々自立を圖りて互に相交伐し、遂に悉く曹操に併せられ、唯だ孫、劉の二氏が存するのみとなつた。即ち曹操は江北十三州を領し、孫權は江南五州を有し、而して劉備は其の西に在りて益・梁の二州と交州の一部とを領し、所謂鼎足の勢を成した。時に獻帝は猶位在つたが、只名のみであつて其の實無く、建安二十五年には曹操死して子曹丕が嗣ぎ、帝に迫つて位を禪らしめ、國號を魏と改め、洛陽に都した。之を文帝といふ。是の歳は實に我が紀元八百八十年で、漢は世祖光武帝より是に至るまで、十三世百九十六年、前後漢を通じて凡そ二十六帝、四百二十二年にして滅んだ。翌年劉備も亦漢の皇統を繼承すと稱して帝位に即き成都に都した。即ち蜀漢の昭烈帝である。後九年孫權も亦帝位に即き、國を吳と號して建業(江蘇省南東)に都した。吳の太帝といふが是である。よつて之より後を三國の世と稱するのである。



○東漢の世系

西漢高祖四代孫長沙定王發—春陵節侯買—鬱林太守外—  
春陵戴侯熊渠—利—子張—更始帝玄



○隗囂 字は季孟。天水(今の甘肅省通渭縣)の人。王莽の末に兵を起して漢に應ず。諸將を分遣して隴西(今の甘肅省蘭州鞏昌の大半)成都(今の四川省成都)金城(今の甘肅省蘭州)張掖(今の甘肅省甘肅省酒泉(今の甘肅省肅州)・敦煌(今の甘肅省安西)等を徇へて皆之を降した。光武が即位するや、囂使を京師に通じたので、光武は殊禮を以て之を遇した。幾も無くして又公孫述に通じて臣と稱し、述立て、朝寧王と爲した。建武八年、光武自ら將として囂を撃ち、囂は西城(隴西郡に屬す、

故城は甘肅秦州の西南に在り)に奔り病んで飢え、悲憤して死んだ。  
○竇融 字は周公。平陵(今の陝西省鳳翔縣)の人。初め王莽に仕へたが、莽の敗るゝに及んで、更始の大司馬趙萌に降りて大に重んぜられた。融、累世河西(今の甘肅の地)に仕官して具さに其の土俗を知つたから、至るに及びて兄弟相謀りて、能く雄傑を撫結し、羌虜を懐柔して其の歡心を得た。殊に大守都尉梁統等五人と最親善であつた。更始が敗れると、推されて河西の大將軍となつた。融光武の威徳を聞き、遂に使を以て書を洛陽に奉じた。帝之に璽書を賜うて融を涼州の牧となし、次いで大司空としたが、融は自ら舊臣でないのに、一旦入朝して功臣の右に在るを思ひ、容貌辭氣卑恭甚しく、上書して屢爵位を辭したが帝許さなかつた。年七十八にして卒す。諡して戴侯といふ。

○公孫述 字は子陽。茂陵(今の陝西省興平縣)の人である。更始が立つた時、述は群雄を破り自立して蜀王となつた。光武の建武元年、遂に天子となり、成家と號して成都に都し、建元して龍興という屬すた。時に光武は山東を事とし、未だ西伐に追が無かつたので、關中の豪族呂鮪等、兵數萬を擁して所を知らず、往いて述に歸した。隗囂も亦使を遣はして臣と稱した。述性苛細にして小事に察に、誅殺を敢てして大亂を見ぬ。其の兩子を立て、王と爲した時、群臣諫めて曰く、成敗未だ知るべからず、戎士野に暴露するに、今遽に皇子を王とするは大志無きを示すもので、將士の心を傷くるものであると。述聽かず。建武九年光武書を與へて禍福を陳じ降を勧めたが、述曰はく興廢は天なり、豈降天子あらむやと。却つて刺客を放ちて漢の將を殺した。十二年大司馬吳漢の軍と成都



鄧禹

に戦ひ敗れて死んだ。

○鄧禹

字は仲華。南陽(今の河南省南陽)の人。劉秀初め更始(光武帝の兄)の命を以て河北を徇へた時に、鄧禹秀に説いて曰く、更始は常才にして諸將は皆庸人である、帝王の大業は凡夫の任ずる所に非ず。明公宜しく英雄を延攬し、民心を悦ばし、高祖の業を立て、萬民の命を救ふに努めたるならば、天下は定むるに足らないと。秀大に悦び、禹をして常に止宿せしめて、與に計議を定めた。赤眉の軍が長安を攻むるに及び、禹命を奉じて西す。軍紀正しく、百姓風を望み相携へて軍を迎へ、垂髫(幼者)戴白(老人)車下に滿つるの情況であつた。禹車を停めて之を勞來し、禹の名は關西に震つた。即にして長安に入り、赤眉の軍と戦つて利あらず、馮異の兵を率ゐて來り會するに及び、力を合せて遂に之を潰亂せしめた。後大司徒となり、高密侯に封ぜられ、明帝の永平元年(皇紀七一八年)歿し、元侯と諡せられた。明帝が漢業中興の功臣三十二人を南宮に畫いた時には、禹を其の第一に置いた。

馮異

○馮異

字は公孫。潁川(今の河南省開封)の人。左氏春秋や孫子兵法に通じた。光武に事へて主簿となつた。始め光武が河北を徇へた時に、邯鄲の王郎が兵を起し、薊(縣名、戰國の燕都、漢の廣陽國治たり。今の京城の地)中が皆之に應じた、光武晨夜南に馳せて蕪蕪亭(今河北省饒陽縣の東北に在り)に至つた時、天寒く人飢え、具さに困苦を嘗めた。時に馮異は豆粥を上つた。會、大風雨に遇ひ、道傍の空舍に入り、馮異薪を抱き、鄧禹は火を熱した。光武は竈に對して衣を燎り、異

大樹將軍

は又麥飯を進めた。異は人と爲り謙退にして人に伐らず、諸將功を論ずるに當り、異は獨り常に樹下に退き坐したので、軍中號して大樹將軍といつた。建武二年(皇紀六八六年)赤眉の賊を討ちて漢中を定め、後夏陽侯に封ぜられ、建武十年軍中に歿し節侯と諡せられた。明帝の漢業中興の功臣を南宮に畫くや、異も其の一人であつた。

馬援

○馬援

字は文淵。茂陵(今の陝西省興平縣)の人。少い時から大志を抱いた。初め隗囂に依り、建武四年囂の命によりて公孫述に使した。援述と舊より相知つて居つたから、我至らば當に手を握つて歡ぶだらうと考へた。然るに述は陸衛を陳ねて援を延き、禮饗甚盛であつたので、歸りて囂に謂つて曰く、子陽(述の字)は井底の蛙だ、而かも妄りに自ら尊大にして居るから、宜しく意を東方に專にすべきであると。因りて又、使して光武を見、囂を説いて光武に歸せしめんとしたが、囂が決せなかつたので、援は即ち去つて光武に歸した。建武八年に光武が隗囂を討つ時に、援の計を用ひて之を亡し其の地を取つた。後伏波將軍に拜し、交趾を討ち之を平げた。後武陵(今の湖北省竹山縣)の蠻が反した時に、援はまた往かんとしたが、帝は其の老を愍みて許さなかつた。然るに援は鞍に據つて顧盼し、以て用ふべきを示したので、帝遂に之を許した。援即ち四萬人を率ゐて之を征し、利あらずして軍中に歿した。

竇憲

○竇憲

字は伯度。太后の弟である。孝和帝は年十歳で即位し、竇后朝に臨み、憲は外戚を以て侍中となつた。憲、嘗て、都郷侯劉暢の來朝し、屢太后と會見するを見て、其の宮省の權を分つこと



を懼れ、刺客を以て暢を殺さしめた。そこで太后は憲を車騎將軍として、匈奴を伐ちて其の罪を贖はしめた。永元元年(皇紀七四九年)に憲は耿秉と共に精騎萬餘を帥ゐて北單于と稽落山に戦つて大に之を破り、二十餘萬人を降し、塞を出で燕然山(今杭愛山と名づく、外蒙古賽因諾顔部の界内に在る)に登り、班固に命じ、石に刻し功を勒して還つた。後三年憲復兵を遣し、撃つて匈奴を金微山(外蒙古の界内に在り)に破り、北單于走死した。和帝、後、竇憲父子兄弟の朝廷に充滿して專權逆を謀るに至らむことを憂へて、中常侍鄭重と議して憲を誅せんとしたが、太后の故を以て誅と名づくるを欲せず、迫つて自殺せしめた。

鄭衆

○鄭衆テイシウ 字は仲師、父に従ひて左氏春秋を受け、永平の初、明經を以て給事中となつた。竇氏一族の跋扈甚しきに及び帝は鄭衆と議して之を除いた。衆は功を以て中常侍より大長秋に進んだ。帝

勳功を正し、賞を班つた時に、鄭衆常に多きを辭して少きを取つたから、帝は益鄭衆を賢なりとして、之より常に共に事を議したので、やがて宦官の權を用ゐることも此に始まつた。其の後、帝は又鄭衆を剽鄉侯に封じた。宦官の封侯も亦之を始とした。

單超

○單超センテウ 河南(今の河南省洛陽縣)の人。孝桓帝の朝に宦官となり、中常侍となつた。時に梁冀リヤウキの一族が朝廷に蔓り、驕横を極めたので、超等五人帝と謀り、冀の印綬を收めて自殺せしめた。よ

りて超等五人功を以て侯に封ぜられ、世に之を五侯といふた。超、後、車騎將軍と爲つて卒す。

梁冀

○梁冀リヤウキ 商の子。順帝の時大將軍と爲り、外戚を以て縱暴自ら恣にし、姻族朝に滿ちた。帝嘗て張

綱等をして地方の吏治の得失を察せしめた時に、綱は、豺狼路に當る、安んぞ狐狸を問はんやと曰うて、遂に梁氏が君を無にするの心十五事を劾奏した。質帝立ち、嘗て朝會の時、冀を目して跋扈將軍といふたので、冀は深く之を惡み、遂に左右をして毒を進ましめ、帝は崩じた。冀、桓帝を迎へ立て、凶恣日に重なり。政を乗ること十九年、威内外に行はれた。桓帝、よりに宦官單超等と謀りて兵を勅して冀の印綬を收めたので、冀は自殺した。是に於て梁氏少長となく皆棄市せられた。

李膺

○李膺リヤウ 字は元禮。潁川(今の河南省開封府)の人。性簡亢にして容接する所無く、常に只荀淑及び

陳寔を以て師友とした。荀爽嘗て一日膺の爲めに御者となり、還りて喜んで、今日李君に御たるを得たりといふた。其の人に慕はれたことがわかる。膺は常に天下の名教を正すを以て任としたが、後、孝廉に擧げられて青州の刺史に累官した時に、管内の守令の貪慾なる者は皆風を望んで自ら印綬を解いて去つたといふことである。次いで司隸校尉となつた。時に朝廷の綱紀頹弛したが膺は獨り風裁を持し、聲名を以て自ら高うした。當時天下の士の其の容接を被つた者があれば、名つけて登龍門としたといふ。後、黨錮を以て官を免じ、遂に殺された。

陳蕃

○陳蕃チンバン 字は仲舉、汝南(今の河南省汝寧及び陳州の南境、光州の北境)の人。年十五の時、獨、一

室に居りて庭宇荒蕪しても顧みなかつたので、或人之を候ひ謂つて曰く、孺子何ぞ灑掃して以て賓客を待たぬやと。蕃曰く大丈夫當さに天下を掃除すべし、安んぞ一室を事とせんやと。其の人甚之を奇としたといふ。後安樂の太守となり、次いで豫章の守となつたが、常に賓客に接せず、惟だ徐



稚(豫章の高士を以て聞ゆ)が来れば特に一榻を設け、去れば則ちまた之を懸けて置いた。後、大傳に拜せられ、宦官の跋扈して國政を私するを慕ひ、大將軍竇武及び李膺等と謀り、之を誅伐せんことを圖り、却つて殺された。

竇武

○竇武 字は游平。茂陵(今陝西省興平縣)の人で、融の玄孫である。其の女は桓帝の后となつた。

武、位に在りて多く名士を辟し、身を清くし惡を疾み、門に私交無く、妻子は衣食粗ぼ足るといふ程度で、兩宮の頒賜を得れば、悉く大學の諸生に與へ、又貧民に施與した。之を以て衆譽之に歸し、陳蕃劉淑と共に三君と稱せられた。君とは一世の宗とする所をいふのである。李膺杜密の黨が事に坐して死に當つた時に、武は獨り之を抗疏した。武大傳陳蕃と同心戮力して王室を獎したので、天下の士頸を延べて太平を想望した。因りて宦官を誅せんと謀つたが、侍人曹節等詔を矯めて之を殺し、漢室こゝに於て衰ふるに至つた。

黨錮の禍

○黨錮の禍 後漢の中世以降は幼帝位を繼ぎ、譬へば和帝は十歳、殤帝は生後百餘日、安帝は十

歳、少帝は不詳、順帝は十一歳、冲帝は二歳、質帝は八歳、桓帝は十五歳、靈帝は十二歳にて即位)外威權を專にし、加之和帝の時、母后朝に臨みて内外の政務を宦官鄧衆に委ね、遂に其の力を借りて外威の權を抑へたから、これより宦官の勢漸く強く、桓帝の時に至りては、大權全く其の手に歸するに至つた。是に於て天下有爲の士は、宦官の恣に權威を弄して國政の日に衰ふるを憤慨し、桓帝の時、名臣李膺・陳蕃等、大學の書生三萬餘人と共に、國政を評論し朝臣を非難した。宦官乃ち

上書して、膺等大學の遊士を養ひ、共に部黨を爲し、朝廷を誹謗し、風俗を疑亂すと告げた。帝震怒し、郡國に令して李膺以下二百餘人を獄に下し終身を禁錮した。次いで靈帝が立ち、竇武は大將軍、陳蕃は大傳となり、名賢朝に列し、國民太平を想望するに至つた。是に於て陳蕃は竇武と謀り、中常侍曹節王甫等を誅せんとしたが、宦官は之を知り、夜血を軌りて共に盟ひ、靈帝を擁して出で、前殿に御し、王甫は蕃を執へて之を殺し、禁兵を將ひて武を圍み、武は自殺した。よりにて姻戚も悉く誅せられた。翌年、節は又有司に命じ、李膺以下百餘人を殺し、其の妻子を邊に徙した。凡そ宦官と隙有る者は一切指して黨人と爲し、其の死徙廢禁せらるゝ者六七百人、更に黨人の門生故吏親族等の位に在る者を考査し悉く官を免じ、錮五族に及んだ。

竇固

○竇固 竇融の姪。明帝の頃匈奴既に南北に分れて兵勢漸く衰へたので、帝は耿秉及び竇固を都尉

と爲し、出で、涼州に屯せしめた。永平十六年(皇紀七三三年)秉等諸將と道を分ちて北伐し、固は敵を追ひて蒲類海(今巴爾庫勒海と名づく、甘肅鎮西府城の西北に在り)に至り、伊吾廬(哈密)の地を取りて屯田した。固假司馬班超を遣はして西域に使せしめ、又秉耿と共に出で、車帥を撃ちて前後兩部を定めて還つた。(前部は今の甘肅省鎮西吐魯番廳の地。後部は今の奇台縣及迪化の地)

耿秉

○耿秉 字は伯初。耿弇の姪。腰帶八圍もあり、常に能く司馬兵法を説いた。明帝の時に北匈奴を

撃たんと請ひ、宜しく武帝が西域に通じて匈奴の右臂を斷つが如くなるべしと説いたので、帝其の言を嘉し、秉及び竇固を都尉となし永平十六年(皇紀七三三年)北伐せしめた。翌十七年秉また竇固



と共に西域を伐ちて車帥を定め、次いで和帝の永元元年(皇紀七四九年)竇憲と共に北匈奴を撃ちて大に之を破り、燕然山に登り班固に命じて石に刻し功を勅して還り、功を以て美陽侯に封ぜられた。

馬皇后

○馬皇后

東漢明帝の皇后。伏波將軍馬援の女である。始め光武帝の時父援は、武陵(郡名、今の湖南の西境)及び貴州の東境の蠻夷を征して利あらず軍中に歿した。梁松、竇固等之を構陥したから、家益々勢を失して世の侵侮を被るに至つた。是に於て後の從兄は憂憤に勝へず、上書して後宮に充てんことを乞ひ、遂に選ばれて太子の宮に入り、明帝位に即くに及びて立ちて皇后となりて愈自ら謙肅した。后は能く易を誦し、好んで春秋楚辭を讀み、最も董仲舒の書を善くした。公卿諸將の事を奏し、較議解し難きもの、ある時は、帝輒ち后を試むるに、忽ち其の理を分解し、能く其の情を得たので、常に帝に侍し、會言の政事に及ぶことあれば裨補する所が頗る多かつた。明帝の治を致したのは後の内助の功が頗る多かつた。帝崩じて章帝位に即くに及んで、尊んで皇太后といふた。建初四年疾に寝し、巫祝小醫を信せず、數々勅して禱祀を絶つたが、六月崩じ、明德皇后と諡した。后資性恭謙、常に親族を戒飾し、皇室をして后宮の家に親ましめなかつたので、馬氏一族は多く侯に封ぜられたけれども、遂に禍はなかつた。

6.9.15.

第十八章 三國の鼎立。西晉の一統。

吳・漢(蜀)の争 建安二十四年(東漢獻帝)に劉備は撃つて魏軍を破り、漢中を取り自立して

吳・漢(蜀)の争

漢中王と爲つた。時に關羽は備の命に因つて江陵を守つたが、備が進んで漢中に入るや、羽は江陵から出て北進し、樊城(襄陽城の北漢江の右に在り)を攻め、襄陽を取り、許より以南は遂に羽に應じ、其の威は中原に震つた。是に於て魏王曹操は大に恐れ、將に許の都を徒して其の銳鋒を避けんとしたが、謀臣司馬懿は操に説いて曰く、劉備と孫權とは外見は親しいが内實は疎であるから、關羽が志を得て勢力を得ることは、必や權の願はざる所である、宜しく人を遣はし、權に勸めて其の後を撃たしめ、江南を割いて之に封ずることを約するがよいと。操は之に従つて權と通謀した。そこで權は羽の背後を衝いて江陵を取り、魏軍は兵を出して樊城を救つたので、羽は腹背に敵を受け、戰敗れて遂に吳兵に捕斬せられた。既にして魏王曹丕(曹操の子)は、漢帝(獻帝)の禪を受けて帝位に陞り、黃初と改元した。之を高祖文帝といふ。時に蜀中では漢帝(獻帝)が害に遇つたとの流言があつたので、漢中王劉備は、漢帝の爲めに喪を發し、諡して孝愍帝と曰ひ、群臣の勧めにより、遂に帝號を稱し、章武と改元し、成都に都した。即ち漢の昭烈帝である。漢帝(昭烈帝)は深く羽の歿したのを耻ぢ、群臣の諫むるをも聽かず自ら將として孫權を撃たんと欲し、權も亦和を求めたが許かれなかつたので、先づ魏に降り、吳王に封ぜられて北顧の憂を除き、力を專にして漢に備へた。黃初三年(漢章武二年、孫權黃武元年)に漢帝は兵を進めて夷陵(縣名今の湖北宜昌)の

關羽殺さる

魏の文帝

漢の昭烈帝



界に至り、吳と相對すること六月に及んだが、會、吳將の陸遜が攻めて漢の四十餘營を破つたので、漢軍は崩潰し、帝は夜通れて白帝城(夔州城の東に在り)に入つた。然るに會、魏帝は、吳が質子を送るの約を履行せぬのを怒つて之を撃つたから、吳王は江に臨みて拒守し、使を遣はして漢に使聘を通じ、こゝに漢吳の和が復た成つた。是の時、漢帝は白帝城に留ること一年、憂憤して遂に病を成したが、其の遂に起たざるを知つて、丞相亮に後事を托して曰く、「君の才は曹丕に十倍して居るから、必ず能く國を安んずるだらう。嗣子輔くべくんば之を輔けよ、如し其れ不才であるならば、君自ら之を取れ」と。そこで亮は涕泣して、「臣敢て肱股の力を竭し、忠貞の節を効し、之に繼ぐに死を以てせざらむや」と答へた。帝は又太子禪に勅して、「汝丞相と事に従ひ、之に事ふること父の如くなるべし」と曰うて遂に崩じた。(漢の三年、皇紀八八三年)是に於て亮は遺詔を奉じて新帝禪を輔佐し、使を遣はして更に好を吳に求めたので、吳は遂に魏と絶つて、専ら漢と和するに至つた。そこで魏の文帝が大に怒り、自ら舟師を率ゐて吳を撃つて廣陵(江蘇省揚州)に至つたが、江水が漲つて渡ることが出来ないで、江に臨んで歎じて曰く「我雖有武騎千群無所施也」といふて、師を旋へした。尋いで翌年復た大軍を以て來り攻めたが、江に臨み波濤の洶湧せる有様を見て、歎じて曰く「嗟乎、固天所以限南北也」と。戦はずして還つた。

蜀漢の世系

○蜀漢の世系 (劉氏漢景帝の子中山の靖王勝の後凡そ二世四十三年)

①昭烈帝備 ②後主、晉の安樂思公禪

吳の世系

○吳の世系 (孫氏、凡そ四世、五十二年)

烏程侯(武烈帝)堅 ①太祖大帝權 南陽王和 ④晉歸命侯皓

②廢帝會稽王亮

③景帝休

魏の世系

○魏の世系

魏武王(太祖武帝)操 ①高祖文帝丕 ②烈祖明帝叡 ③廢帝齊王、晉邵陵厲公芳、

燕王宇 ⑤元帝、晉陳留王、奐 東海定王霖 ④廢帝髦

諸葛亮の忠勤

諸葛亮の忠勤 漢の昭烈帝の死後、諸葛亮は、後主劉禪を輔けて政を執り、大に官職を改め、法制を修め、好を吳に通じて魏を攻め、以て中原を定め、漢室を再興するを以て己の任とした。斯くて建興三年に南夷(諸蠻の雲南に居るもの)を撃つて之を平らげたから、是より北伐の師を興して専ら魏を攻めむとした。時に魏の文帝は既に崩じ、子明帝が立ち、將軍曹眞、陳群、司馬懿等が政を輔けたが、明帝の大和元年(漢の五年、皇紀八八七年)に、漢の丞相亮



前出師表

は、諸軍を率ゐて漢中に屯し、以て魏を圖らんとした。發するに臨み、表を上つり師を出すの理を述べ、政治の要を説いたが、其の旨意懇切を極め誠忠を盡し、言々肺腑より出で、誠に鬼神を泣かしむるものがあつた。世に之を前出師の表といふ。時に魏は、漢の昭烈帝既に歿し、新主が位を繼いで數歳なるも、寂として聞ゆることが無かつたので、敢て備を爲さなかつたが、二年(漢の六年)漢軍が進んで祁山(甘肅西和縣の西北に在り)を攻むるに及んで、戎陳整齊、號令明肅であつたから、朝野色を失ひ、天水(今の甘肅鞏昌の東境及び秦州の北境)南安(今の鞏昌部)安定(今の甘肅涇州及び平涼)の諸郡は皆叛いて亮に應じ、關中は爲めに震駭した。そこで魏帝は親ら將として長安に到り、將軍張郃(字はモウカウ)に命じ、步騎五萬を率ゐて之を拒がしめた。亮は其の將の馬謖を先鋒として街亭(甘肅省秦安縣の東北)に戦つたが、謖が亮の節度に違うて大に魏軍に破られたから、亮は軍を收めて漢中に還つた。已にして亮は復た上表(後出師表)して、漢魏の到底兩立すべからざることを説き、兵を率ゐて散關(陝西寶雞縣の西南)を出て陳倉(縣名、今の寶雞縣)を圍んだが、魏將郝昭が能く防いで、戦利あらず、加之糧食が盡き、また軍を還すの已むなさに至つた。五年(漢の九年)に亮は復た諸軍を督して祁山を圍み、大に魏將司馬懿を破つたが、糧食が盡いたので、又も軍を退けて漢中に還り、これより農を勸め、武を講じ、大に糧食を蓄へ、士民を休養すること三年に及んだ。既にして魏の青龍二年(漢の十二年)

後出師表

亮の人と爲り

に、亮はまた十萬の衆を發して斜谷(陝西褒城縣の北に在り)より出で、使を遣して吳と約し、同時に大舉して魏を伐ち、亮先づ進んで五丈原(郿縣の西南)に軍した。亮は前に屢々兵を出したが皆糧食が繼がず、爲めに其の志を達することが出来なかつたので、此の度は兵を分つて、屯田持久之策を執つた。時に吳帝(孫權)も約を守りて大軍を發し、三道より魏に入つた。魏帝は乃ち親ら將として、撃つて吳軍を却け、懿に敕して、壁を堅くして出でて戦ふこと莫からしめたから、懿即ち亮と對峙すること百餘日に及び、亮屢戦を挑んだが懿は應ぜなかつた。亮乃ち巾幗婦人の服を贈つて懿を嘲り諷したが懿は尙出ない。既にして亮は病んで陣中に歿したから、漢の諸將は兵を整へて歸途に上ると、懿は聞いて俄に兵を出して之を追はしめた。そこで姜維が令して旗を反へし、鼓を鳴らして、將に懿に向はんとするの勢を示した。すると懿は復た軍を斂めて退いたから、附近の百姓等が笑つて諺して曰く、「死せる諸葛が生ける仲達(懿の字)を走らせた」と。亮の政を爲すや、誠心を開き公道を布き、名に循ひて實を責め、信賞必罰、其の刑政は峻嚴であつたが、然かも一人の怨む者が無かつた。馬謖は素より亮に信ぜられたが、街亭の役に、亮の節度に違ひて敗軍するに及び、亮は涙を揮つて之を斬り、而して其の後を卹んだ。李平・廖立等は皆嘗て亮の爲めに官を罷められた者であるが、亮の喪を聞くに及んで皆歎息流涕し、平は



西晋の一統

卒に病を發して死んだといふ。以て其の人と爲りが知られる。諡して忠武侯といふた。

**西晋の一統** 魏の諸帝は骨肉相殘害したから、帝室は援け無く、遂に司馬懿の端を開いた。初め魏の明帝が死んで其の子の齊王芳が立つや、司馬懿は遺詔を受けて之を輔佐したが、遂に自ら丞相と爲りて國政を擅にした。懿が死んで其の子師が繼いで國政を執り、遂に帝を廢して、文帝の孫髦を迎立して、權を振つたが、師が死んで弟昭繼ぎ、また相國と爲り、晉公に封ぜられ、遂に爵を進めて王と爲つた。是に於て魏國の政權は全く昭に歸し、元帝は徒らに虚位を擁するに過ぎなかつた。既にして昭は蜀漢の衰微に乗じて之を滅し、幾何も無くして死し、太子炎嗣ぎ遂に魏の祚を篡ひ更に吳を併せて天下を統一し、洛陽に都した。之を西晋の武帝といふ

(一)蜀漢の滅亡

**(一)蜀漢の滅亡** 蜀漢は諸葛亮の死後に姜維が兵權を握り、其の才武を負み、屢々大舉して魏を撃たうとしたが、費禕は曰く、「丞相(亮)ですら猶中夏を定むる能はずして歿したものを、況んや吾等に於てをや、宜しく國を保ち民を治め、謹みて社稷を守るに如かず」とて従はなかつた。然るに禕の死するに及んで、維は遂に兵を出して魏を撃つたので、司馬昭は之を患へて、二將鄧艾・鐘會を遣はして二道より蜀を伐たしめた。そこで會は進んで劍閣(四川省)に至りて、姜維に扼止せられたが、艾は狄道(今の甘肅)より陰平

(二)魏の滅亡

(今の甘肅文縣、及び四川龍安の北境)を經、無人の境を行くこと數十里、山を鑿り道を通じ等して進んだが、山高く谷深かつたので、艾は氈を以て身を裹み、推轉して下り、諸將士は或は木に攀り崖に緣り、魚貫して進み、維の背後を衝き、進んで綿竹(今の四川)に出で、諸葛瞻(亮の子)及び尙(瞻の子)を殺し、成都に迫つた。是に於て帝禕は面縛して出で降り、蜀漢は二帝四十年で亡びた。

(三)吳の滅亡

**(二)魏の滅亡** 是に於て司馬昭の勢威は益々高く、九錫を加へて晉王と爲つたが、病んで死し、其の子炎が嗣ぐに及び、遂に元帝をして位を已に禪らしめた。帝は在位五年。魏は文帝より五代四十六年にして亡びた。時に蜀漢の亡後僅に二年、皇紀九百廿五年である。是に於て炎は皇帝と稱し、國を晉と號した。之が晉の世祖武帝である。

**(三)吳の滅亡** 吳の景帝は魏の咸熙元年(魏滅亡の前年)に崩じ、故の太子和の子皓が嗣いで立つた。皓は即位の初め、士民を恤み貧窮を賑はし、當時の明君と稱せられたが、幾ばくも無くして酒色に耽り、奢侈度無く、刑罰放濫に陥り、舊臣の殺戮せらるゝ者も頗る多く、吳の國政は是より日に非に赴いた。時に晉は既に魏を篡ひて自ら帝位に上り、大に内政を整へて民望を收め、遂には吳を併吞せんと欲し、先づ羊祜を荊州の都督として襄陽に鎮せしめた。羊祜は徳を施して吳人を懐け、私かに其の權を窺つたが、吳將陸抗も大



司馬として諸軍を督し、羊祜の軍と相對峙し、使命互に通じ、抗が祜に酒を遣れば、祜は之を飲んで疑はず、抗の病むや、祜は之に藥を與ふるに、抗は悦んで之を服し、兵を交ゆる毎に、日を刻して方さに戦ひ、苟も掩襲するが如き事は無かつたので、當時以て美談とした。時に吳帝は徳政を修めず、只妄りに兼併を欲し、屢々、晉の邊疆を侵したから、抗は連りに諫めたが聽かなかつた。既にして抗が卒するや、祜は上疏して吳を討たんことを請ひ、群臣は多く賛せなかつたが、獨り杜預・張華は之を賛した。既にして祜は病篤く、自ら杜預を薦めて死んだ。時に吳帝は淫虐益甚しく、民皆心を離したから、晉將王濬は上疏して速に吳を征すべきを請ひ、杜預も亦之を促したから、晉帝乃ち意を決して、杜預王濬をして兵二十萬に將とし、六道より吳を進撃せしめた。太康元年(武帝十六年、皇紀九四〇年)諸軍並び進んで建業に迫り、遂に石頭城(南京城の西に在り)に攻め入つたので、吳帝皓は面縛して出で降り、吳は太帝より四世五十二年にして滅びた。時に皇紀九百四十年である。斯くて晉は魏に代はつてから十六年で江南を并せ、漢末三國の鼎立(曹丕自)より、凡そ六十年で、天下は再び統一に歸した。

**西晉武帝の失政** 武帝は魏の名儒王肅の外孫で、家本と禮を傳へたから、位に即くや、宗室を優遇し、務めて禮意を存し、専ら治國に意を注ぎ、魏の孤立して滅びたのに鑑み、

大に子弟宗族を要地に分封して之に兵權を與へ、以て帝室の藩屏たらしめむとしたが、後には諸王の威望が却つて重くなり、他日所謂八王の亂を起すに至つた。加ふるに帝は性頗る放縱奢侈で、嘗て國內に詔して、みだりに嫁娶することを禁じ、良家の女五千餘人を取りて宮に入れて之を選び、吳を并するに及んで、吳の伎妾五千人を宮に入れ、常に羊車に乗つて、其の之く所を恣にし、日に遊宴に耽つたので、皇后の父楊駿が獨り事を用ゐ、請謁盛に行はれ、勳舊の功臣等は多く疎退せられたから、時に群臣と語ることがあつても、其の言は未だ嘗て經國の遠謀に及ぶ事はない。其の吳を平らげてよりは、天下無事なりと稱して悉く州郡の武備を撤去して顧みなかつた。然るに此の頃胡族の降つて塞内に在る者が屢吏民を殺害したから、侍御史の郭欽が上書して、内郡の雜胡を邊地に徙し、先王荒服の制を明らかにせんことを請うたが、帝は聽かないで、遂に晉室覆滅の基をなすに至つた。斯くて武帝は在位二十五年で崩じ、太子衷が立つた。之を孝惠帝といふ。

**八王の亂** 惠帝立つて暗愚であつたから、皇后賈氏が政に預り、權詐が多く遂に大亂を惹起するに至つた。初め武帝は太子衷の暗愚なのを知つて、死するに臨み、皇后楊氏の父楊駿(太子の外祖、父に當る)及び汝南(國名、今の河南汝寧)王亮(太子の叔父)に遺詔して惠帝を輔導せしめた。然る



に楊駿は權を專にして常に亮を疎んじ、又司馬氏に不利であつたので、賈后は之を惡んで遂に駿を殺し、楊太后を廢し、汝南王亮をして政を執らしめた。然るに亮も亦勢を恃んで專横であつたから、賈后は復た楚王瑋と謀つて之を殺し、尋いでまた瑋を捕へて之を斬り、張華裴頌王戎等を用ゐた。又太子適(母は謝氏)は己の所生でないもので、后は遂に之を廢して庶人となし、次いで之を殺し、遂に自ら政權を握り、淫虐日に甚しかつた。是に於て永康元年(惠帝十一年、皇紀九六〇年)に征西大將軍趙王(趙は國名、今の河北省趙州、趙の叔父)倫(惠帝の)は詔を矯り、兵を勅して宮中に入り、先づ賈后を廢して之を殺し、司空張華尙書僕射裴頌等を殺し、自ら相國と爲つて國政を擅にした。そこで淮南王(淮南は國名、今の安徽、鳳陽及滁和二州廬州)安が、先づ兵を率ゐて、趙王を討つたが敗れて死し、永康二年に倫は遂に逼つて位を禪らしめ、自ら皇帝と稱した。是に於て齊王(齊は國名、今の山東青州)問(武帝の姪)は、成都王(成都は國名、今の四川省成都)穎、河間王(河間は國名、今の河北省河間縣)顒等と共に兵を擧げて倫を誅し、惠帝を迎へて位に復した。問は功を以て大司馬となつて國政を統べ、漸く驕奢擅權であつたから、大安元年(惠帝十三年)に顒は長沙王(長沙は國名、今の湖南長沙)又(穎)に檄し、擊つて之を殺させた。又因つて代はりて大權を握るに至つた。然るに同二年に、河間王顒は成都王穎を誘ひて反し、力を合せて長沙王又を破り、遂に之を殺し、穎は京に入りて丞相と爲り、尋いで皇太弟と爲り、乘輿服御僭越を極めたから、東海王(東海は國名、今の山東、沂州南城、江蘇海州)



越が惠帝を奉じて穎を討つたが、却つて敗れ、帝は穎に奉ぜられて鄴に還つた。會、幽州都督王俊は兵を起して穎を討じ、穎は戰敗れたので、河間王顒は其の將張方を遣はして穎を救ひ、帝及び穎を擁して長安に奔らしめた。顒はよりて又穎を廢し、豫章王(豫章は國名、今の江西省南昌)熾を立て、太弟とした。永興二年(惠帝十六年)に越が又兵を起し、范陽王(范陽は國名、今の河北省涿州及易州)虓(宣帝の姪)が之に應じ、光熙元年(惠帝十七年)越は將を遣はして西長安に入り、帝を奉じて洛陽に還らしめ、自ら大傅と爲りて政を輔け、虓は司空と爲つた。既にして成都王穎河間王顒は相次いで殺され、内亂が始めて平いだ。斯く趙王倫が亂を起してから、宗室互に相殘害すること前後十六年、諸王の事に與る者八人(汝南王亮・楚王瑋・趙王倫・齊王問・成都王穎・河間王顒・長沙王又・東海王越)に及んだので、世に之を八王の亂といふ。惠帝は在位十七年で崩じ、太弟熾が立つた。是を孝懷帝と爲す。

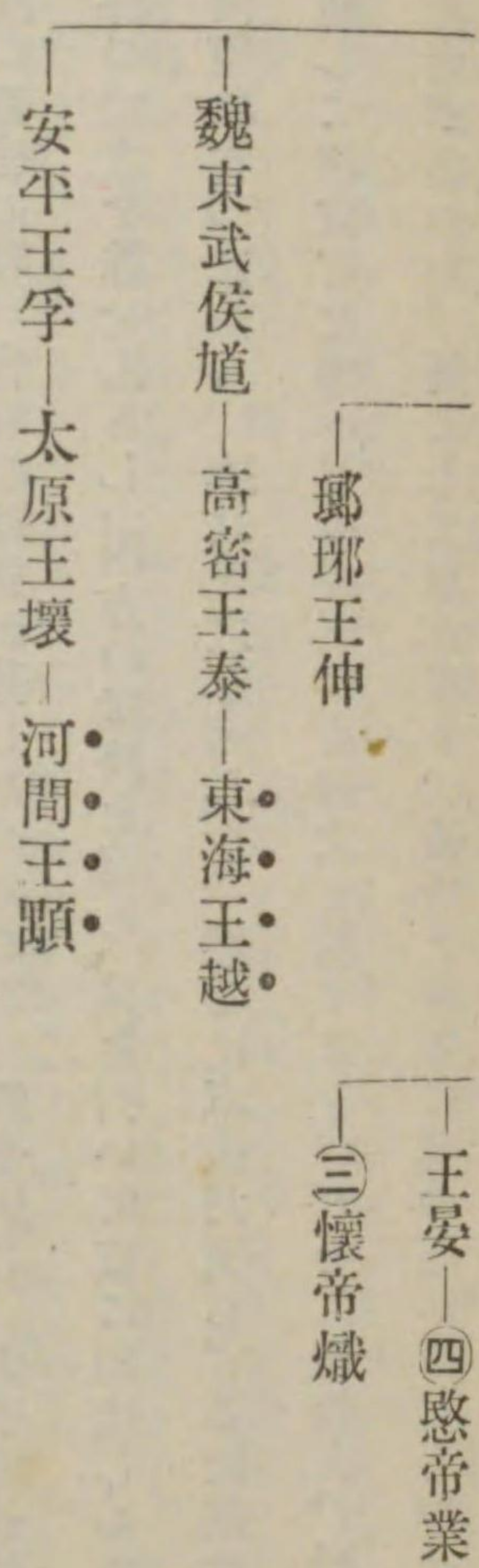
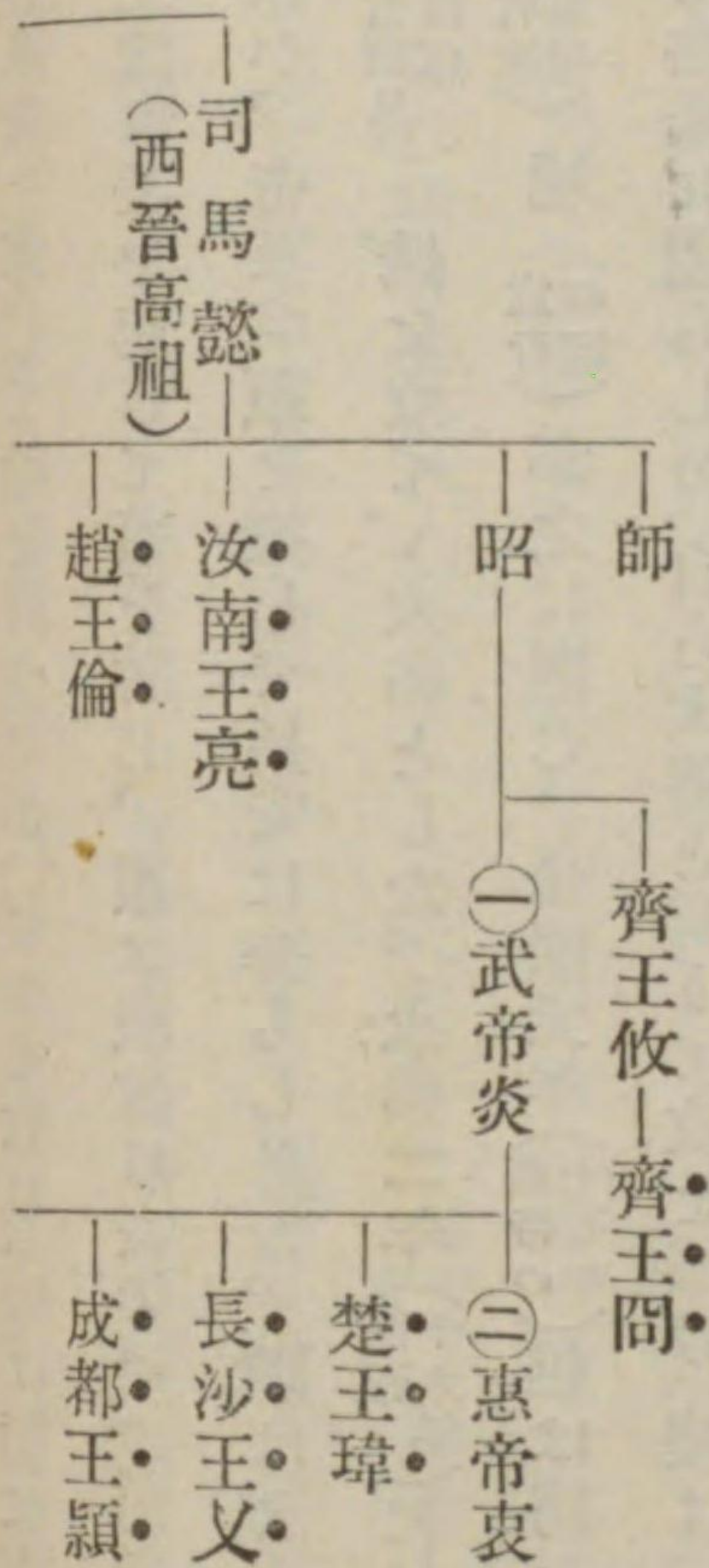
**清談の流行** 東漢の末に黨錮の禍があり、次いで天下の大亂と爲り、彼の慷慨氣節を尊んだ士風は、變じて自恣頹蕩(ゼンシキタイマウ)の風を生ずるに至つた。加之漢代の學者は、皆或る一經を專攻して之が訓詁繁縟(ハンジツョク)を極めたので、世人は漸く之を厭ひ、孔孟の學は漸く廢れ、老莊恬淡の説が盛に行はるゝに至り、學者は多くは禮法を蔑視して世務を顧みず、専ら空理空論を放談するの風を生じ、之を清談といふた。清談とは蓋俗談に對するの謂であ



る。八王の亂は、晉の宗族子弟骨肉が相鬪ぎ、所謂道德の壞敗を示せるものであるが、當時は一般に世道人心の頹廢が甚しく、士大夫以下一人の國家を憂ふる者も無く、遂に國民の元氣を消耗し盡さんとするの勢をなすに至つた。彼の魏晉の際に於ける竹林の七賢（阮籍・阮咸・嵇康・山濤・王戎・劉伶・向秀）と稱せらるゝ者の如きは、好んで放逸奇矯の行を爲し、最も清談を能くしたから、朝野争うて之を慕倣し、晉朝の前途知るべからざるものがあつたので、當時の碩學の裴頠が深く之を憂ひ、崇有論を著して其の弊を救はんとした、が出来なかつた。會、夷狄が此の機に乗じて中國に侵入し、益々勢を振つたから、晉室は遂に江南に遷るの已むなきに至つた。

八王の世系

○八王の世系（表中黒點を附せ）



黄巾の賊

張角

曹操

○黄巾の賊 西漢以來、鬼神禁厭等を説く者、神仙長生術を説く方士、卜筮を事とする易者等が多く、種種の迷信が盛に行はれた。未だ兵亂を起すに至らなかつた。然るに鉅鹿（郡名、今の河北省順徳の東南境、及廣平の東北境）の張角が出づるに及んで、遂に大亂を引き起すに至つた。張角は黄老の學を修め、妖術を子弟に教授し、符水を用いて病を療し、太平道と號し、弟子を四方に派遣して轉々相誑遊せしめたので、十餘年にして其の徒數十萬に達した。靈帝の中平元年（皇紀八四四年）に角等一時に起り、皆黄巾を著けて目標としたから、世に之を黄巾の賊といふ。朝廷即ち皇甫嵩等をして之を討たしめ、嵩は曹操と兵を合せて大に賊を破つた。既にして張角は死んだが、殘黨が尙諸州に出沒して十餘年の久しきに及び、群雄は各地に蜂起して收拾すべからざるに至り、漢室は遂に滅亡するに至つた。

○曹操

字は孟徳。西漢の高祖の時相たりし曹參の後裔で、沛（縣名、泗水郡に屬す、今江蘇徐州）の人である。少い時から機警にして權數があり、任俠放蕩にして家業を治めなかつた。汝南の許劭が



常に郷黨の人物を月旦したので、操は劭に向つて我は如何なる人ぞと尋ねたが、劭が答へなかつたから、操は之を劫かした所、劭乃ち對へて曰く、子は治世の能臣、亂世の姦雄であると。操大に喜んだ。年二十にして郎と爲つたが、黄巾の賊が起るや、操は騎都尉に拜せられ、皇甫嵩等と共に賊を討つて之を破つた。會、靈帝が崩じ、皇子辨立ち、何太后の兄大將軍何進が尙書となつた。時に袁紹は何進に勸めて宦官を誅せしめんと欲し、兵を勸して京師に向ひ、遂に悉く之を誅した。會、將軍董卓が兵を率ゐて至り、辨を廢して、其の弟獻帝を立て、長安に都を遷して凶暴を極めたから、操即ち袁紹、袁術等と兵を合せて之を討つた。既にして卓は誅に伏したが、操は袁氏と隙を生じ、帝を擁して四方を征伐し、徐州の牧陶謙を破り、袁紹袁術を滅し、呂布を殺し、吳蜀と鼎立して天下を分有した。漢帝操を以て丞相となし、魏公に封じた。漢の建安二十五年（皇紀八八〇年）に死んだ。

袁紹

○袁紹

字は本初。漢の大尉袁安の玄孫である。家は世々富貴であつて、常に公の位に居つた。後漢の靈帝の時、宦官の跋扈が甚しかつたので、靈帝崩じ、太子辨が位に即くや、紹は大將軍何進と謀つて之を誅せんとし、四方の猛將を召し、兵を引いて京に向はしめた。時に將軍董卓も兵を擁して河東に在つたから、進は又之を召した。然るに卓未だ至らざるに進は宦官に殺された。紹乃ち兵を勸して諸宦官を捕へ、少長となく皆之を殺すこと、凡そ二千餘人、鬚が無くして宦官と誤り殺された者があつた。既にして卓が至り、帝辨と語るに其の語が少しも解せなかつたが、皇弟陳留王協に

董卓

○董卓

亂の原因を問ふた所、協は年僅に九歳であつたが答へて少しも遺失が無かつたので、卓はよつて廢立を行はうとしたが紹が可かない、そこで卓が大に怒つたから紹は逃れて冀州に奔つた。卓遂に帝を廢して弘農王と爲し、陳留王を立て、帝と爲した。之を孝獻帝となす。是に於て關東の州郡が兵を起し、袁紹を盟主として卓を討ぜんとしたが、卓は凶暴甚しく、遂に王允呂布に殺された。後袁紹は河北（山西）の地に據つたが、曹操と官渡（今の河南省開封府中牟縣）に戦つて大敗し、遂に憤死した。

袁術

○袁術

後漢の靈帝の時將軍となつた。帝崩じて辨立つや、之を廢して孝獻帝を立て、何太后を弑し、凶暴益甚しく（袁紹の部参照）自ら大師となり、車服は天子に僭擬し、一族朝廷に並列した。卓、城を築き金穀を積みて三十年の儲蓄をなし、自ら云ふ、事成らば天下に雄飛せむ。成らずんば此を守りて以て老いんと。司徒王允等かねて密に卓を誅することを謀つたが、時に中郎將の呂布は膂力人に過ぎ、且つ事を以て卓を恨んで居るから、允即ち布に結んで内應せしめ、會、卓の入朝した時、允等は勇士を宮門に伏せて之を刺し殺した。時に吏皆萬歳を稱し、百姓は道に歌舞したといふ。卓の家族皆其の下に殺された。

字は公路、後漢の末、獻帝の時壽春（縣名、九江郡地、今の安徽壽州）に據りて、自ら楊州事を領した。遂に僭して帝と稱し、國號を仲家と稱し、位を僭すること二年、糧盡き衆散じ、北に走り、後劉備の爲めに滅された。



孫策

○孫策 字は伯符。堅の長子である。年十餘の時から名士と交り、其の名を知られた。堅の死するや、策往いて袁術に見え、父の餘兵を得て東の方江を渡つて轉戦し、向ふ所敢て當る者無く、百姓孫郎の至る聞いて皆魂魄を失うた。然るに策が至るに及んで、軍士は令を奉じて一も犯す所が無かつたので、民又大に悦んだ。策既に江東を定め、許を襲ひて漢帝を迎へんと欲し、密に兵を治めたが、未だ發せざるに、故と殺す所の吳の郡守許貢の奴が、策の出臘の時に、伏して之を射て創が甚重かつた。乃ち弟權を呼び、代はりて其の衆を領せしめて曰はく、機を兩陣の間に決し、天下と衡を争ふは卿我に如かず、賢を擧げ能に任じ、各其の心を盡し、以て江東を保つは我卿に如かずというて遂に卒す。年二十六。權が代つて其の衆を領した。

孫權

○孫權 字は仲謀。堅の子、策の弟である。兄策の死後を承けて、江東を據有した。後漢の建安十三年(皇紀八六八年)に曹操が水軍八十萬を以て吳に逼つた時、權は將軍周瑜をして、荊州の劉備と力を併せて操を逆へしめ、大に之を赤壁の下に破つて、操は狼狽して僅に身を以て免れた。其の後屢兵を加へたが、志を得る能はず、遂に操をして「子を生まば當に孫仲謀の如くなるべし」と嘆息せしむるに至つた。權は内には張昭、張紘等の賢相を有し、外には周瑜、呂蒙、陸遜等の勇將が有つたのと、加ふるに長江の險に據つたので、蜀と連和して強魏に當り、以て天下三分の業をなした。曹丕が漢を篡ふに及び、權も亦帝を稱し(皇紀八八九年)都を建業(今の江蘇省南京)に奠めた。之を吳の太祖大皇帝といふ。

劉表

○劉表 字は景升。山陽高平の人。後漢獻帝の初平中に、荊州(今の湖北・湖南)の刺史と爲つて賊を討じ、悉く江南を平げた。曹操が袁紹と官渡に相對峙した時、紹は人を遣はして援を表に求めたが、表は救はなかつた。後操は自ら將として表を征せんとしたが、未だ至らざるに表は病みて死んだ。

劉璋

○劉璋 焉の子。後漢靈帝の時の人。父と共に益州(今の四川省)の地に據つたが、劉備の爲めに滅された。

劉備

○劉備(昭烈帝) 字は玄徳。其の先は前漢の孝景帝から出た。幼にして孤貧、母と共に履を販ぐを以て業としたが、大志あり、言語少く、喜怒色に形はさなかつた。身長七尺五寸、手を垂るれば膝より下り、願れば其の耳を見るといふ風采であつた。備常に豪傑と交り、殊に河東の關羽や、涿郡の張飛とは恰も兄弟の如かつた。獻帝の初平二年に平原(王國の名、今の山濟東南の西北境)の相となつたが、建安二年に呂布に破られて、奔つて曹操に歸したので、操は備を豫州の牧とした。會、車騎將軍董承は密詔を受くると稱して、劉備と操曹とを誅せんことを謀つた。操は或日從容として備に謂つて曰く、方今天下の英雄は、唯だ使君と操とのみだ、袁紹の如きは數ふるに足らないと。備方さに食して居つて驚いて七箸を落したが、會大雷雨であつたので、備詭りて曰く、聖人の言に迅雷風烈には必變ありというが、良に以有ことであると。五年董承等は謀が洩れて殺され、備も袁紹の下に奔つたが、曹操が袁紹を攻めたので、備はまた荊州に奔りて劉表に歸した。表は備を以て新



野令となした。此の頃會、諸葛亮を得て、孤の孔明あるは猶魚の水あるが如しというて喜んだ。後表が死し備代りて荊州を領するに至り、次いで益州を攻めて劉璋を滅し、立つて漢中の王と爲つた。建安二十五年、操曹の子丕が獻帝を廢して自立したと聞き、備も遂に帝を稱し、國を(漢蜀)漢と號した。(皇紀八八一年)。後吳と争ひ、又之と和し、專中原を經略せんとしたが、建興元年(皇紀八八三年)終に永安宮に崩じた。帝は性弘毅寛厚、能く人を知り士を待つ所、頗る高祖の風があつた。年六十三。

成都

○成都

今の四川省成都である。秦・漢の代に蜀郡を置き、漢末に益州とした。蜀漢の劉備が帝位に即くに及んで此所に都し、唐の玄宗はこゝを南京とした。地味は豊饒で良米を産し、又有名なる蜀江の錦を産す。我國にて古來稱する蝦夷錦といふものは是であるといふ。

諸葛亮

○諸葛亮

字は孔明。瑯琊(郡名、今の山東諸城縣、及沂州の東境)の人である。襄陽(今湖北省襄陽)の隆中(山の名、襄陽城の西北に寓居し、毎に自ら管仲・樂毅を以て任じた。劉備嘗て士を司馬徽に訪うた時に、徽は孔明を伏龍なりと言ひ、徐庶も亦劉備に、孔明は臥龍なり、將軍宜しく駕を枉げ之を顧るべしと曰うた。是に於て劉備は三度其の草廬に詣りて漸く亮を見ることを得て、天下平定の策を問うた。亮曰く、今曹操は百萬の衆を擁し、天子を挾みて諸侯に令して居るから、此れは誠に與に鋒を争ふべきでない。又孫權は江東を據有し、國險に民心服して居る。此れは與に援けとなすべくして、而も圖るべからざるものである。抑々荊州は武を用ゐるの國、益州は險塞にし

て沃野千里に亘つて居る。故に若し荆・益二州を併有して、好を孫權に結び、内は政治を修め、外時變を觀察するならば、則ち霸業成るべく、漢室の再興は疑ないと。備大に喜び、是より亮と情好日に厚く、孤の孔明あるは、尙魚の水有るが如しと曰うて、大に之に任じた。建安十三年に曹操は漢の丞相となつて劉表を撃つた。此の時表は既に卒して、其の子琮は荊州を以て曹操に降つたので、劉備乃ち江陵(今の湖北省荊州)に走り、更に夏口(今の湖北省武昌)に至り、諸葛亮を吳に遣はし、孫權に見えて、協力して操を破るべきを以てした。そこで權も大に悦び、力を併せて大に曹操の軍を赤壁(今の湖北省嘉魚縣の江岸)に破つた。是より劉備は荊州を定めて、孫權と其の地を二分し、劉璋を降して益州を取り成都に都した。章武元年(皇紀八八一年)には備帝位に即き、亮は丞相となつたが、同三年には漢帝病篤く、其の起つべからざるを知り、亮に謂つて曰く、「君の才曹丕に十倍す、必能く國を安んじ、終に大事を定めむ。嗣子輔くべくんば之を輔けよ、如し其れ不才ならば君自ら取るべし」と。亮涕泣して「臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を効し、之に繼ぐに死を以てせざらんや」と對へて、其の忠節を誓つた。帝又太子禪に向つて「汝丞相と事に従ひ、之に事ふること父の如くなるべし」と。詔して、遂に崩じ、禪位に即き建興と改元し、政威亮に決した。建興三年亮武郷侯に封ぜられ、又南夷(諸蠻の雲南に居る者)を平定し、建興五年(皇紀八八七年)には諸軍を率ひ、出で、漢中に屯して魏を討つた。發するに臨み、上表して師を出すの由を陳べ、漢帝に告ぐるに政治の要を以てした。其の言々皆憂國の至誠を以て溢れて居つた。世に所謂出師の



表というて、後世之を讀んで泣かざる者は人に非ずといはれたものである。翌年漢軍祁山（甘肅省西和縣の西北に在り）を攻めたが、其の時の陣容整齊、號令明肅で魏軍は大に恐懼した。時に天水・南安・安定（皆甘肅省の地）の三郡は皆亮に應じたので、魏帝は張郃をして之を拒がしめた。亮は馬謖を以て先鋒として街亭（今の甘肅省秦安縣）に戦つたが、謖は亮の節度に違つて大敗した。此の年亮は又上書して曰く、「漢と賊とはもと兩立せず、坐して亡びんよりは進んで之を伐つに若かず、臣鞠躬盡力死して後已まん、成敗利鈍に至りては能く逆め觀る所に非ず」と。之が即ち後出師の表である。此の年兵を出して魏を討つたが糧盡きて還つた。乃ち農を勧め、武を講じ、士民を休息せしむること三年、漢の建興十二年（皇紀八九四年）十萬の衆を以て魏を征し、五丈原（今郿縣の西南に在り）に軍し屯田した。魏將司馬懿は壁を堅くして出でず持久の策を取つた。八月亮病みて遂に陣中に歿した。年五十四。諡して忠武侯といふ。

前出師表

○前出師表

臣亮言先帝創業未レ半ナラ而中道ニシテ崩殂ス。今天下三分、益州罷弊ス。此誠ニ危急存亡之秋也。然ルニ侍衛之臣不レ懈於内ニ、忠志之士安ニル身ヲ於レ外者、蓋シ追テ先帝之殊遇ヲ欲レル報セシト之於ニ陛下也。誠ニ宜シク下開ニ張シ聖聽ヲ以テ光カシ先帝遺德ヲ恢弘ス志士之氣ヲ不レ宜シ妄リニ自菲薄引レ嘘ヲ失レ義ヲ以テ塞グ忠諫之路ヲ也。宮中府中俱ニ爲ス一體ニ陟ニ罰臧否ノ不レ宜シ異同ス。若有作レ姦ヲ犯レ科及ビ爲ス忠善者、宜シク付シ有司ニ論ニ其ノ刑賞ヲ以テ昭ス陛下平明之治ヲ不レ宜シ偏私使シテ内外ヲ異ニス法ヲ也。侍中侍郎郭攸之費禕董允等、此皆良實志慮忠純是ヲ以テ先帝簡拔シテ以テ遺ニ陛下ニ愚以爲ラ宮中之事事無ク大小悉ク

以テ咨レ之ニ然ル後施行シ必ク能ク裨シ補闕漏ヲ有レン所ニ廣益ス。將軍向寵性行淑均曉ニ暢シ軍事ニ試用セラレ於レ昔日ニ先帝稱シテ之ヲ曰レ能ト是ヲ以テ衆議共レ寵ヲ以テ爲レ督ト愚以爲ク營中之事事無ク大小悉ク以テ諮レハ之ニ必能ク使シテ行軍ヲ和穆シ優劣得サレ所ヲ也。侍中尙書長史參軍ハ此レ悉ク貞亮死節之臣也願ク陛下親レ之ヲ信セヨ之則チ漢室之隆可ニ計レ日ヲ而待ツ也。親レ賢臣ヲ遠ク小人ヲ此先漢ノ所以興隆スル也親レ小人ヲ遠クハ賢臣ヘテ後漢所ニ以傾頽スル也。先帝在時毎ニ與レ臣論ジ此事ヲ未ダ嘗テ不五嘆息痛恨於ニ桓靈ノ也。臣本布衣躬耕於ニ南陽一苟全シ性命於ニ亂世不レ求ニ聞達於諸侯ニ先帝不レ以臣カ卑鄙ノ自枉屈シ三顧レ臣ヲ於ニ艸廬之中ニ諮レフニ臣ニ以テ當世之事ヲ由レリテ是ニ感激シ遂ニ許スニ先帝ニ以テ驅馳ニ後值ニ傾覆ニ受ケ任テ於ニ敗軍之際ニ奉命於ニ危難之間ニ爾來一十有一年矣。先帝知レ臣カ謹慎ノ故臨ニ崩寄レスルニ臣ニ以テ大事ヲ也受ケ命以テ來夙夜憂歎恐レ付託不レ效以テ傷ニ先帝之明故五月渡レ滬深ク入レ不毛今南方已ニ定リ甲兵已ニ足當テ帥ニ將シ三軍ノ北ヲ安定ハ中原ヲ上庶クハ竭シ驚鈍ノ攘ニ除シ姦凶ノ興ニ復漢室ヲ還リ于舊都一此臣之所ニ以報ニ先帝ニ而忠陛下ニ之職分也至レ於ニ斟酌損益盡シ忠則攸之禕允之任也。願ク陛下下托スルニ臣ニ以テ討賊興復之效ヲ不レ效則治ニ臣之罪ヲ以テ告先帝之靈若シ無シ興德之言則責ニ攸之禕允等之咎ヲ以テ彰ニ其ノ慢陛下ノ亦宜シク自謀リ以テ咨ニ詠善道ヲ察ニ納雅言ヲ深ク追先帝ノ遺詔ヲ臣不レ勝ニ受ケ恩感激今當ニ遠ク離レ臨シ表ニ涕泣シ不レ知所レ云フ

○赤壁の戦

後漢の建安十三年（皇紀八六年）、曹操は劉表を討つたので、劉備は夏口に奔り、吳と協力して曹操を討つたことを約した。是に於て操は軍を江陵に進め、江に順つて東下せんとし、

赤壁の戦



權に書を遣つて、今水軍八十萬衆を治めて將軍と吳に會環せんと申込んだ。權之を群下に示した所、諸將皆色を失ひ操を迎へんとしたが、獨り魯肅は之を不可として權に勸めて周瑜を召した。瑜進んで精兵數萬を得て夏口に往き、將軍の爲めに誓つて之を破るべしと云うたから、權之に従ひ、瑜をして三萬人を督し劉備と力を並せて曹操の軍を赤壁(山の名、嘉魚縣の東北に在り)に逆へしめた。やがて操の軍は、來つて江北に次した。瑜の部將黃蓋乃ち蒙衝鬪艦十艘に、油を灌いだ燥荻枯柴を滿載し、帷幕を以て之を裹み、走舸を其の尾に繋ぎ、先づ書を遣りて降を請うた。時に強烈なる東南の風が吹いたが、操の軍士は皆指示して瑜の降を觀て居つたが、やがて操の軍を距ること十餘町の所で同時に火を發したと見るや、火烈しく風は益々強く、船の往くこと恰も箭の如く、忽ち北船(魏軍の船)を燒盡し、烟焰天に漲り、人馬の燒溺する者數を知らず、瑜等之に乗じて、輕銳を率ゐる雷鼓して進み、北軍狼狽して走り還り、操は纔に身を以て免れた。之を赤壁の戦といふ。

關羽

○關羽

字は雲長。河東の人。劉備と友として兄弟の如く、互に生死を同うせんと誓つた。建安五年に曹操と戦つて囚へられた時、操は其の臣張遼をして羽に説いて降らしめ、之を封じて漢壽亭侯となし、厚く之を遇したが、羽、張遼に謂つて曰く、我は極めて曹公の我を待することの厚きを知るが、我は、もと劉將軍の恩を受け共に死せんことを誓つたから、義として背かれず、吾は終に留ることは出來ぬから、要は當に功を立て以て曹公に報じて後去るべきのみであると。操も之を義とした。斯くて操が賜ふ所を盡く返し、告辭して劉備の居る袁紹の軍に奔つた。後、備が帝位に即く

張飛

○張飛

字は翼德。涿郡(今の河北、北平の西南、保定の東境、及易州)の人。少い時から關羽と共に及んで、羽は即ち前將軍に拜せられて荊州を鎮した。ついで兵を率ゐて曹仁を樊城に攻め、于禁を擒にし、龐德を殺した。其の後孫權が呂蒙の謀を用ひて荊州を襲うた時に、羽は敗れて走り、章郷に至りて其の子平と俱に呂蒙の將の馬忠の爲めに獲られて遂に殺された。後世羽を嗣つて關帝とす。

司馬懿

○司馬懿

字は仲達。河内(今河南省懷慶及び衛輝)の人である。弱冠の時より才氣あり。漢末に魏武に聘せられて文學椽と爲り、太子中庶子に累遷した。奇策を藏し常に謀議に與かつた。魏の武帝は懿が雄豪の志あるを察し、太子丕に向つて、司馬懿は人臣の器ではないから、後には必汝が家事



に預るに至るだらうと注意した。然るに太子は常に懿を信任して之を保護したから、全きを得た。魏の文帝の時將となり、屢出で漢の丞相諸葛亮と戦ひ、亮をして志を中原に得る能はざらしめた。魏の廢帝芳の嘉平元年(皇紀九〇九年)に丞相曹爽を殺し代つて丞相となり、遂に國政を掌握するに至つた。魏帝之に九錫の禮を加へたが、三年病みて歿した。年七十三。後、晉が魏に代るに及びて高祖宣皇后と追諡した。

司馬師

○司馬師

字は子元。懿の長子。常に大事に處しても夷然として平日の如く、又兵を勸することも甚整然たるものがあつた。懿が昔て魏の丞相曹爽を殺さんとした時も、子元が獨り之に與つて秘策陰謀をめぐらした。懿の歿するに及んで、撫軍大將軍に進み、魏の政を執つた。後、魏帝芳を廢し、高貴卿公を迎へ立て、自ら相國となつて、魏の正元二年に薨じた。年四十八。晉に至りて景帝と追諡した。

司馬昭

○司馬昭

字は子士。懿の次子。兄師の歿後其の後を嗣いで、魏の大將軍となり、尙書の事を録し、國政を專にしたが、已にして相國と爲り、晉公に封ぜられた。甘露四年、魏帝髦(もとの高貴卿公)を弑して元帝を立てた。此の時既に蜀を滅して、國內統一の業は稍緒に就いたが、咸熙三年に歿した。年五十五。晉の始め文帝と追諡した。

鄧艾

○鄧艾

字は子載。棘陽(今の湖北省襄陽)の人。魏に事へて尙書となり、累進して鎮西將軍都督隴石諸軍事に至つた。元帝の景元四年(漢の炎興元年、皇紀九二三年)に、艾は鍾會と共に命を受け、

大舉して蜀を撃つて漢中に入つた。此の時蜀軍、劍閣に據つて拒いだが、艾即ち狄道(縣名。今の甘肅狄道)より進み、陰平(郡名。今甘肅文縣及四川龍安の北)に至り、無人の地を行くこと數十里、或は山を鑿り道を通じ橋閣を作りて進軍した。途中山高く谷の深い所は、艾自ら氈を以て身を裹み推轉して下り、諸將士も亦木に攀ぢ崖に緣り魚貫して進み、遂に江油(漢の戍兵を置く處。今の江油縣)に達した。よりて書を以て漢將諸葛瞻諸葛亮の子を誘つたが、瞻は其の使者を斬つて(綿竹縣名、廣漢郡に屬す。今の四川は德陽縣)に陣し艾を邀へた。艾直に之を破り、瞻及其の子は皆戦死した。よりて進んで成都に入ると、帝禪は面縛して降り、蜀漢は二帝四十三年で亡びた。艾猶蜀に止つて之を鎮したが、會々鍾會は艾と同じく兵に將として出戦したが、功艾に及ばなかつたので、遂に艾に反狀有りと讒し、己も亦反して殺され、艾も監軍衛瓘に殺された。

劍閣

○劍閣

今の四川省劍州の東北に在る形勝の地である。其の峰は恰劍の如く、其の勢閣の如き所から、此の名を生じた。三國の時、魏の將鄧艾、鍾會等が蜀漢を攻めた時に、蜀漢の姜維が此の劍閣を守つて防いだ所、即ち魏・蜀兩軍の爭奪戦の行はれた地である。

姜維

○姜維

字は伯約。天水の人。始め三國の魏に事へて郎中となり、後、蜀漢に入り、諸葛亮に見え、遂に其の將となり、累進して征西將軍となつた。亮歿するの後、成都に還り、尙書の事を録した。魏將鄧艾等の蜀を攻めた時、維は劍閣に據つて之を防ぎ、大に魏軍を惱ました。後、平襄侯に封ぜられた。



○杜預 字は元凱、博學にして文武の才があつたので朝野稱して杜武庫というた。西晉の武帝に仕へて鎮南大將軍となつた。時に吳帝皓は淫虐であつて大に朝廷を紊し、上下心を離したから、杜預は速に之を征せんことを請うたので、武帝即ち意を決し六道より進んで吳を撃たしめた。杜預はよりに江陵に出で、王濬は巴蜀を下り、太康元年(魏武帝の十六年、吳の天紀四年、皇紀九四〇年)に、諸軍並び進んで、向ふ所皆克ち、遂に建業に逼つた。そこで吳帝皓は面縛して降り、晉は遂に天下を統一した。預は功を以て富陽侯に封ぜられたが、後襄陽に歸つて、澧涓諸水を以て原田萬餘頃に灌いで、大に農利を興したので、民屢之に頼り、後には稱して杜父というに至つた。功成りて後、思を經籍に耽らし、春秋左傳集解を作り、後世、人の重用する所となつた。大康五年卒去した。」

### 第十九章 五胡及び東晉

五胡の蜂起 兩漢・三國・西晉の間に、塞外種族の内附せる者を塞内(長城以內)に移して雜居せしめたから、西晉の頃には、是等の夷族は益々蕃殖して、匈奴は山西の大半を占め、羯は山西遼州の境に居り、鮮卑は河西の地に據り、氐・羌は漢中に蔓つた。此の匈奴、羯、鮮卑、氐、羌を五胡といふのであるが、匈奴と羯とは土耳其族、鮮卑は蒙古族、氐、羌は伯圖特族であるから、五胡というても實は三人種である。斯くて此等の五族は、晉

の内亂に乗じて蜂起し、所在に割據して國を建つること前後十六、東晉を経て南北朝の初に至るまで、互に攻伐すること百餘年に及んだ。

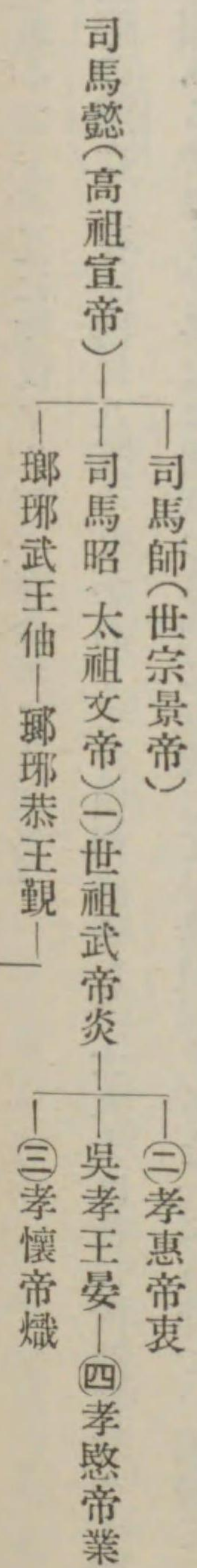
#### 西晉の滅亡

晉は内に八王の亂がありて骨肉相殘害し、士大夫は徒に清談に耽つて國事を顧みる者無く、外には胡族の塞内に割據して暴横跋扈するといふ有様で、國勢日に衰へて復た如何ともすべからざるに至つた。此の時に當つて匈奴賢王劉豹の子に劉淵といふ者があつた。幼より雋異で、博く經史を習ひ、兼ねて武備を學んだが、長ずるに及んで、膂力人に過ぎ姿貌も魁偉であつた。初め洛陽に在つたが、豹が死するに及んで、父に代つて左部の帥と爲り、地方の豪傑名儒等が多く往いて之に歸した。時に淵の從祖右賢王宣は族人に謂つて曰く、漢亡びてより以來、我が單子は徒らに虚號有つて尺土も無い、今我が衆は衰へたと曰うても、猶二萬に減ぜず、司馬氏骨肉相殘害し、四海は鼎沸して居る。左賢王は英武世に超えて居る。呼韓邪の業に復するのには此れ其の時である。乃ち相與に謀つて淵を推戴して大單子の號を上つた。次いで淵は漢王と稱し、劉禪を追封して孝懷皇帝と曰ひ、漢の三祖(高祖、世祖、昭烈)五宗(太宗、世宗、中宗、顯宗、肅宗)を祭り、尋いで皇帝と稱し、都を平陽(今山西平陽)に徙し、其子聰及び羯人石勒等を遣はして、連りに晉の内郡を攻めて之を取つた。尋いで淵は殂し、太子和が立つたが、聰を忌んで之を殺さんとし



たので、聰は和を弑して之に代り、劉曜、石勒等を遣して晋を攻めしめた。時に晋にては懷帝が位に在り、國中に檄して四方の兵を徴し入り援けしめたが、遂に至る者無く漢兵は進んで洛陽を陥れ、懷帝を執へて平陽に送つた。そこで晋は帝の姪秦王業を長安に迎へ入れて皇太子と爲した。尋いで聰は懷帝を殺したので、太子業が自ら帝位に即いて愍帝と稱した。帝の建興四年に、劉曜は攻めて長安を陥れ、帝は出で降り、次いで殺され、西晋は遂に亡びた。此の時司馬懿の曾孫瑯琊(國名、今の山東沂州)王睿は、建業に鎮撫して居つたが、懷、愍二帝の殺されたことを聞き、遂に帝位に建康(吳の建業)に即いた。是を中宗元帝となす。時に皇紀九百七十七年である。建業は洛陽の東南に當るを以て、史家は之より後を東晋の世と稱す。斯くて西晋は四帝四十二年にして亡び、是より江北一帯の地は全く胡族の占領する所となり、中國の文化は一時全く江南に移つた。

○晋の世系

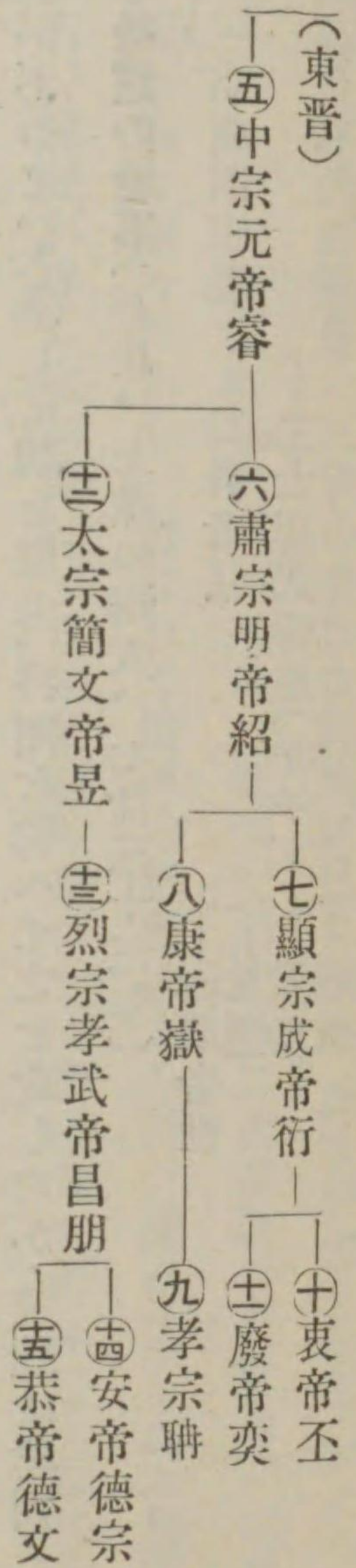


晋の世系

東晋

五胡の雄傑

前趙及び後趙



五胡の雄傑 五胡の中で、最も雄傑とも稱すべき者は、漢主劉淵、後趙主石勒、燕王慕容皝、秦王苻堅、後燕主慕容垂、後秦主姚萇等である。

前趙及び後趙 漢の劉聰は、一時江北の大部を占領したが、東晋元劉の太興元年に死んで、太子粲が立つたが、太后の父靳準が之を弑し、自ら漢天王と稱し、劉氏は男女少長と無く皆殺されたから、劉淵の族子劉曜は羯人石勒と共に内亂を鎮定して自立し、長安に都し國號を改めて趙と叫んだ。既にして準は殺されたが、石勒は劉曜と隙を生じ、襄國(河北刑臺縣)に據つて自立し、又趙王と稱したから、趙は二國に分裂した。因つて史家は前者(劉曜の國)を前趙といひ、後者(石勒の國)を後趙といふた。曩に洛陽長安を陥れて、一時江北を統一し、殆ど支那の大半を領有したが、後趙が起るに及んで、劉曜は關中に據り、石勒は河北に據り、兩雄が各趙の故國を統一せんとして相攻戦したが、皇紀九百八十九年(東晋成帝の三年)に、兩軍は大に洛陽に戦ひ、劉曜は敗れて捕斬せられ、前趙は亡びた。前

前趙亡ぶ

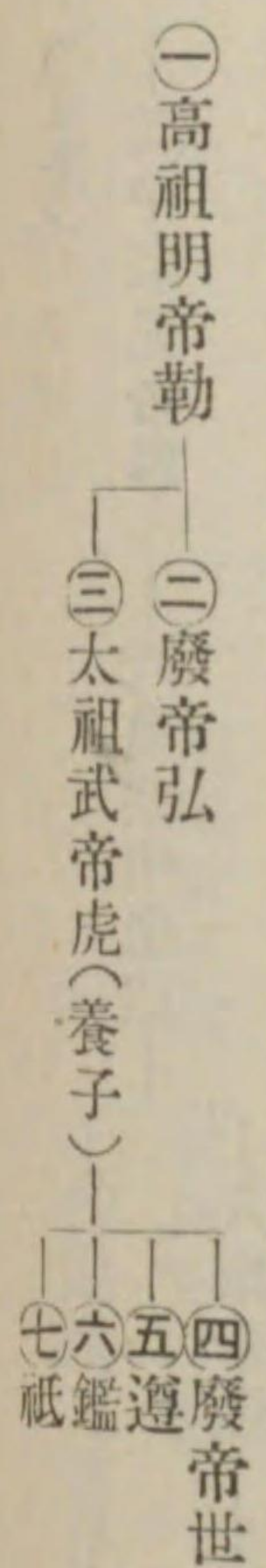


石勒帝と稱す

趙は劉淵より曜に至るまで凡そ五世廿一年である。是に於て石勒は志を達して、天王と稱し、尋いで帝と稱した。勒はもと學ばなかつたが、好んで諸生をして書を讀ましめて之を聽き、其の意を以て得失を論じ、聞く者悦服した。在位六年の間に、大に制度を改め、綱紀を張り、此の時治績稍、見るべきものがあつたが、東晉成帝の咸和八年に歿し、太子弘が立つた。勒の從子石虎が丞相となつたが、やがて弘を弑して自ら趙天王と稱し、都を鄴に遷した。虎は性豪奢で臺觀を鄴に作り、又長安洛陽二宮を營み、美女三萬人を發して内官に充て等して暴虐を極めたから、大に人心を失ひ、初め東晉を侵して志を得ず、或は燕と戦ひ、涼を征して皆敗れ、國勢が大に衰へたが、其の死するや、王位相續の争が起つて國が亂れたから、將軍石閔が遂に國を篡ひて帝位に即き、國を魏と號し、石氏の三十八孫を夷滅した。史に之を冉魏と稱して曹魏と別つた。閔は本姓は冉石虎の養ふ所となつたが、是に至つて其の姓を復したものである。是の時に當り遼東遼西の地に慕容儁があつて、大舉して魏を撃ち、冉閔を執へて之を殺したから、魏は建國三年で亡びた。

後趙の世系

○後趙の世系(石氏、上黨の羯人、七世三十三年)



冉魏

前燕及び代の隆盛

拓跋氏

前燕及び代の隆盛 三國の頃には匈奴は已に衰へ、鮮卑が漸く繁盛であつて、部族が甚だ多かつたが、西晉の末に至つては、慕容、拓跋の二氏が最も著れた。東晉武帝の時、慕容廆が降を請うたから、晉は以て鮮卑の都督と爲した。廆はよく政を修め民を愛撫したから、流民が多く之に歸し、日に強盛となつて、遂に自ら鮮卑の大單于と稱するに至つた。拓跋氏は、其の風俗、索を以て髪を辮じたから、又索頭部とも號し、其部酋を可汗といつた。世々北荒に居つて中國に交らなかつたが、魏の時南に遷つて匈奴の故地に據り、力微可汗の時に、復た盛樂の故城(前漢の定襄郡治、後漢雲中郡治に屬す故城は山西歸化城の南に在り)に徙つた。力微の少子祿官可汗の時に、國を分つて三部となし、一は上谷(今の河)の北に居り、祿官自ら之を統べ、一は代郡(今の宣化蔚州及山西大同東境)の北に居り、兄の子猗苞をして之を統べしめ、他の一は盛樂に居り、猗苞の弟猗廆をして統べしめた。既にして猗苞は、漠を越えて北巡し、西方諸國を略し、降附する者三十餘國に及んだが、其の後猗苞と祿官とが死するに及んで、猗廆は三部を統一して勢が愈盛となり、次いで晉の封爵を受けて代王となつた。又慕容氏は、元帝の時に、廆が大に宇文氏を敗つて遼東を取り、使を遣し捷を晉に奏したから、元帝は廆を平州(今の遼寧省及朝鮮の西境)の牧遼東公と爲した。既にして廆は卒し世子皝が立つた。皝は雄毅であつて權略多く、東晉成帝の時に燕王と稱し、龍城(故城は内蒙古土默特右翼の西に在り)を

慕容氏



前燕

築いて之に都した。史家は之を前燕と稱した。是より東高句麗(朝鮮の三國一で今の朝鮮の北境及び興京の地)を伐つて其の都城を毀ち、南趙王石虎の兵を敗り、北は宇文氏を滅し、扶餘(東夷の國名、今の中部滿洲)を襲うて其の王を虜にし、國勢は日に熾になつた。時に後趙主石遵は其の將冉閔に弑せられ、弟石鑑が立つたが、閔は復た之を弑し、遂に自立して魏帝と稱した。會、慕容皝が卒し、世子儻(シユン)が立つたが、此の機に乗じて魏を滅し、都を鄴に遷し、將に江北を併吞せんとするの勢であつた。

東晉初世の治亂

王氏一族の隆盛

東晉初世の治亂 晉の瑯邪王司馬睿は、建康に即位して東晉の元帝となつた。帝は曩に安東將軍として揚州の都督であつた時、王導を以て謀主と爲し、事毎に咨詢し、以て漸く江東の人心を得て、王氏の力に頼ることが頗る多かつたので、位に即くに及んでは、王導をして國政を掌らしめ、王氏の從兄王敦に兵事を統率せしめ、王氏の一族の顯要に列する者が頗る多かつた。時人語つて、「王と馬と天下を共にす」と嘲つた。次いで敦は鎮東大將軍となりて、江(今の湖北武)・揚(今の江蘇大江以南)・荆(今の湖北、及河南南陽、陝)・湘(今の湖南大半及)・交(今の廣東の西南境、及安南國)・廣(今の兩廣)六州の諸軍事を督し、功を恃んで頗る驕恣であつたから、帝は之を畏れ惡み、劉隗・刁協等を用ゐて腹心として、王氏の權を抑損し、導も亦漸く疎外せられた。是に於て敦は遂に兵を武昌に擧げ、劉隗刁協を誅するを

王敦の擧兵

蘇峻反す

以て名と爲し、進んで石頭城(江蘇省南京城西)に據つた。隗・協等は道を分つて出で戦つたが、却つて大敗して還つたので、帝即ち百官をして石頭に詣りて敦に見えしめた。時に太子紹は幼より聰慧であつたが、長じし仁孝に、能く賢を好み士を禮し、頗る徳望があつたので、王敦は誣ゆるに不孝を以てして之を廢せんとしたから、元帝は憂憤病を發し、在位六年にして崩じた。是に於て太子紹が立ち、之を明帝といふた。既にして敦は王位を篡はんと欲し、將に兵を擧げんとしたが、會、疾が篤かつたので、兄王含をして兵を率ゐて建康に向はしめた。帝は蘇峻等を從へ、自出で、之を征し、夜壯士を以て含の軍を襲つて之を破つたから、敦は疾を力めて自ら起たんとしたが、起つ能はずして尋いで死んだ。是に於て敦が黨は全く平定した。明帝は在位三年にして崩じ、太子衍が立ち、是を成帝といふた。歳僅に五歳であつたから、王導は帝の舅の中書令庾亮(亮、ヨウ)尙書令卞壺等と共に力を合せて之を補佐した。時に歴陽(郡名、揚州に屬す今の安徽和州)の内史蘇峻は、前に王敦を討つて功を立て、威望漸く著はれたが、今や卒銳く、器精しかつたので、朝廷を輕んじ、密かに亡命の徒を招集して異圖を蓄へたから、庾亮等は請うて其の權を奪はうとし、峻を徵して大司農とせんとしたが、峻は命を拒み、遂に兵を擧げて叛し、進んで建康に迫り、勢甚だ盛であつた。亮乃ち江州の都督溫峯將軍陶侃等の援を得て、峻を討つて之を斬



成漢

李雄成國を興す

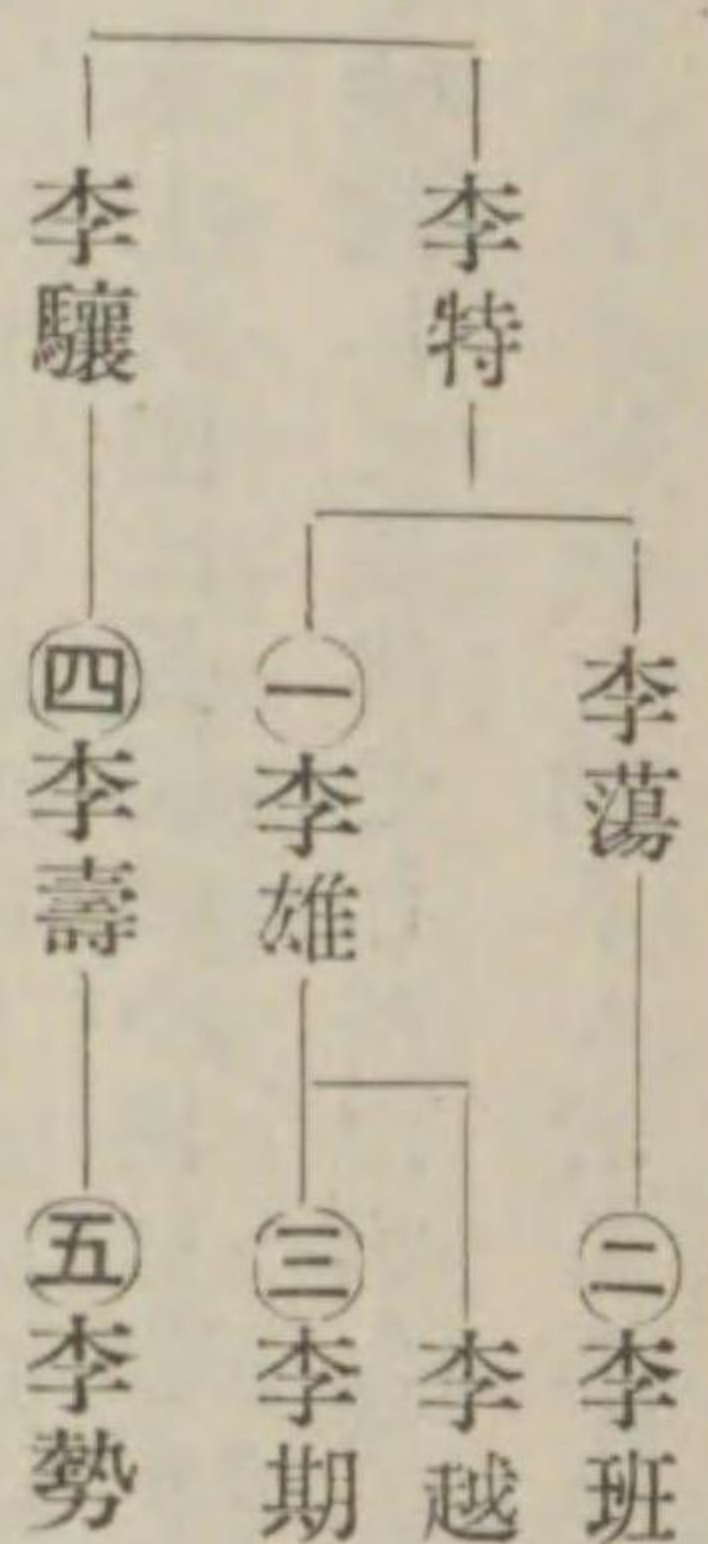
成漢 初め晋の亂るゝや、巴西(四川省保寧府)の氏會に李特といふ者があり、蜀に入つて自ら大將軍益州(今の四川の西南境及び貴州の大半)の牧と稱したが、會刺史羅尙の爲めに殺され、弟流が代つて其の衆を領し、勢復た盛となつた。流死んで特の子雄が之に代はり、羅尙を走らせて、成都を取り、皇紀九百六十四年(惠帝の永興元年)には自ら成都王となり、尋いで帝と稱し、國を成と號した。雄は是より四川貴州の地を併せ、能く賢を禮し才を用ゐ、學校を興し教化に努めたから、海内擾亂の世なりしにも拘はらず、成は獨西方の別天地として戰塵を免るゝことを得た。已にして雄は、兄の子班を立て、太子と爲し、尋いで死んだ。時に雄の子越といふ者があつて、班を弑して弟期を立てたが、晋の成帝の十三年に至り、其の一族の李壽は、成都を襲ひ、期を殺して自立し、國號を漢と改めた。其の後東晋康帝の建元元年(皇紀一〇三年)に、壽が死んで子勢が嗣ぎ、驕淫にして國事を顧みず、民心が離反したから、東晋の將軍桓温に攻められ、勢は出で降り、成漢は茲に亡びた。李雄の建國より五世四十五年を経た。

成漢亡ぶ

李壽國號を漢と改む

成漢の世系

○成漢の世系



桓温の北伐

度翼

桓温

桓温の北伐 晋は東遷の初から帝權が弱く、内に權臣が跋扈して内訌多く、能く中原回復の大計を建つることが出来なかつたが、康帝の朝に、外戚庾翼が人と爲り慷慨で功名を喜んだから、北方を恢復し、蜀を取るを以て己の任となし、因りて北伐の軍を興し、自ら進んで夏口に至り、征討諸軍を督勵したが、目的を達せずして病んで死んだ。そこで朝廷では桓温を擧げて荊州の刺史とし、翼に代りて諸軍を督せしめた。温は曩に翼に登用せられた者で、人と爲り豪爽で氣慨があり、英略人に過ぎて居つたが、其の心術の忠誠ならざる所があるので、形勝の地に居らしむべからずと論ずる者があつたが、其の膽略と才幹とは、優に諸將を壓するに足るものがあつたから、遂に荆・梁(梁州は今の陝西の南境及び四川の東境)等の軍事を都督して、西北防禦の大命を拜するに至つたものである。斯くて晋の穆帝の二年に、桓温が蜀を討たんとするや、諸將士の中で之を危ぶむ者があつたが、江夏の



相袁喬エンケウが曰く、漢主李勢は驕淫にして國事を恤へず、且つ其の天險を恃んで戰備を修めないから、宜しく精兵萬人を以て之を馳驅したならば、一舉にして之を擒にすることが出来る。蜀の地はもと豊饒で、諸葛武侯が之に據つて以て中國を窺つた所であるから、今にして取らなければ、國家の大利を失ふのみである。温の意即ち決し、袁喬に兵二千を授けて先鋒たらしめて蜀を伐ち、連戰連捷して成都を陥れ、漢主李勢を下して之を建康に送り、李漢は亡びた。是より桓温の威名は大いに振つたので、晉廷は之を憚り、會稽王昱イは、殷浩の盛名あるを以て、之を引いて腹心となし、以て温に抗せしめた。時に温は、中原克復の事を奏したが、久しく報いられず、朝廷が浩にのみ信賴せるのを見て、甚だ喜ばなかつたが、浩が連年北伐して功無きに及び、上疏して之を廢し、免じて庶人と爲したから、是より内外の大權は悉く温に歸した。永和十年東晉穆帝に桓温は大軍を率ゐて北伐し、大に秦兵を藍田今陝西藍田縣に敗り、轉戦して灊上灊は河の名、今の長安の西に在りに至つた。秦主苻健は長安の小城を守り、三輔京兆馮翊扶風の三郡、今の長安同州鳳翔の諸郡皆降つた。温即ち居民を撫諭して安堵せしめたから、民争うて牛酒を携へて迎へ勞し、男女路を夾んで之を觀、耆老或は涙を垂る、者もあり、圖らざりき今日復た官軍を觀んとはと曰うて喜んだ。尋いて温は秦兵と白鹿原原灊水の上に在りに戰つて利を失ひ、加ふるに秦人は早く既に麥を

慕容垂

桓温吳志を著ふ

王坦之  
謝安

收め野を清めて温の軍を迎へたから、温の軍は食に乏しく、遂に關中の民三千餘戸を浚して南に還つた。其の翌年に秦主苻健が死んで子の生が立つたが、狂暴殘虐であつたから、從弟の苻堅が之を殺して自立し、國政を擧げて王猛に委ね、前秦の勢が漸く大となつた。次いで晉の廢帝奕の大和四年に桓温は燕を代つて枋頭河南省濬縣に至つた時、燕主慕容儼ヨウケンが死んで、其の子が位に在つたが、懼れて龍城に奔らんとし、叔父慕容垂ボウケイは自ら之を拒がんとことを請ひ、至る所晉軍を邀へ撃ちて之を破り、温は走り還り、垂の威名は日に盛になつた。温は哀帝の時より大司馬となり、中外の諸軍事を都督したが、陰かに不臣の志を蓄へ、嘗て枕を撫して歎じて曰く、「男子芳を百世に流す能はずんば、亦當に臭を萬年に遺すべし」と。先に功を中原に立て、還つて九錫を受けんとしたが、枋頭の大敗後は威名が頓に挫けたので、參軍郗超シヤウの勸によつて、大威權を確立せんと欲し、太和六年には温自ら入朝して、褚太后に白し、帝奕を廢し會稽王昱イを迎へて位に即かしめた。之を簡文帝といふ。帝即位の後八閱月にして病にかゝり、急に温を召して入り輔けしめんとしたが、温は入朝せなかつた。よりにて温をして、諸葛武侯王丞相の故事に依らしめやうとして、少子輔く可くんば之を輔けよ、若し夫れ不可なれば公請ふ自ら取れと遺詔して帝は崩じ、太子昌明が立つた。是を孝武帝といふ。時に謝安は王坦之タンシと共に侍中となつて盛名



があつた。初め謝安は年少くして重名あり、會稽に寓居して山水文籍を以て自ら娛み、屢々徴されたが皆就かなかつた。是に於て士大夫相謂つて曰く、「安石(謝安の字)」出でずんば蒼生を如何にせん」と。年四十餘の時、桓温の請に依つて征西司馬と爲り、後王坦之と俱に朝廷に仕へた。桓温は簡文の終りに臨みて、已に位を禪るか、然らずんば便ち攝に居らんことを期待したが、皆望む所に副はなかつたので大に憤り、安・坦之の爲す所と疑ひ、心に之を銜んだ。孝武帝の寧康元年に温が入朝した時、帝は安・坦之等に詔して之を新亭に迎へしめた。時に都下洵々として相傳へて曰く、温は將に王(王坦之)・謝(謝安)等を誅して晋の祚を移さんと欲するものであると。既にして温至り、百官は皆道側に拜した。温は大に兵衛を嚴にして朝士を延見したが、此の時坦之は懼れて流汗衣を沾したが、安は從容として席に著き、温に謂つて曰く、「安聞く。諸侯道有れば守四隣に在りと。明公何ぞ壁後に人を置くことを須まぬんや」と。温命じて之を徹し、安と笑話して日を移した。時に郗超は帳中に隠れて其の言を聽かんとしたが、會風が動いて帳が開いたので、安は笑つて曰く、郗生は入幕の賓と謂ふべきであると。當時天子は幼弱であつて、内には權臣が威を振ひ、晋祚は殆ど危かつたが、謝安・王坦之等が心を協せて王室を護つたから、朝廷は因つて安きことを得た。既にして温は疾みて、姑熟に還り、しきりに諷

して九錫を求めたが、安坦之等が故らに事を遷延せしめたので、遂に得るに及ばずして死んだ。

前秦

前秦 前秦はとも氏の會苻健(苻健)の建國した所である。之より先畧陽(郡名、今之甘肅秦安縣の東南)の氏會に蒲洪(蒲洪)といふ者があつた。驍勇にして權畧多く、群氏之に畏服し、漢主隆聰が拜して將軍としたが受けないうで、自ら畧陽公と稱したが、既にして後道の石勒石虎に事へ、虎は洪を以て流民都督と爲し、枋頭(城名、河南濬縣の西南に在り)に居らしめ、後、秦州(今之甘肅南境)に都督せしめた。然るに其の後、後趙主は人の讒を信じて洪の都督を罷めたので、洪は怒りて枋頭に歸り、使を遣して晋に降つたが、會、石閔が後趙を篡つて魏國を建つるに及び、遂に枋頭に據りて自ら三秦王と稱し、姓を苻と改めた。洪が死んで世子健が嗣ぎ、衆を率ゐて長安に入り、自ら秦天王と稱し、趙の苛政を除き尋いで帝と稱した。史に之を前秦といふ。會、東晋の將桓温が大舉して來り攻めたが、秦兵は之を藍田(陝西藍田縣)に邀ひ戦つて敗れ、退いて長安の小城を閉ぢ、自ら守つて敢て降らない。尋いで白鹿原(灊水の上)に大いに晋軍を破つたので、桓温は兵を率ゐて南に還つた。明年健死し、太子生が立つたが、狂悖殘虐で、人心が離反したから、從弟東海王堅が之を弑し、自立して秦天王と爲つた。時に會、或人が王猛を薦めたので、堅を之は一見すると恰も舊友の如く、自ら

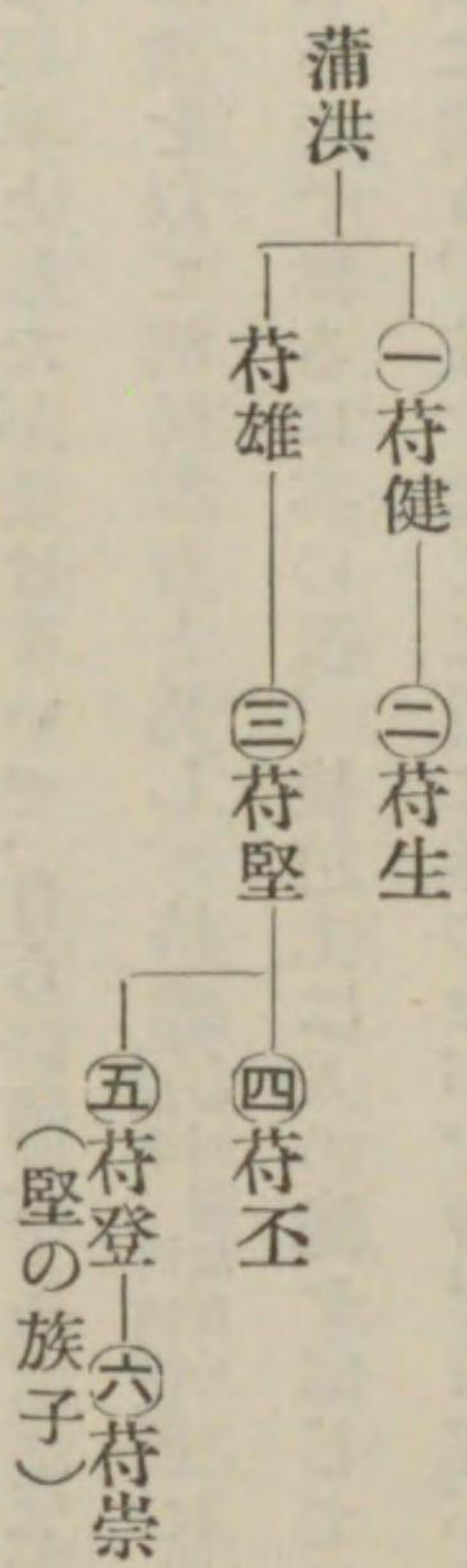
苻健前秦を起す

苻堅



謂ふのに、是れ玄徳が孔明に遇へるが如きものであると、即ち國政を擧げて王猛に委ねた。猛は倜儻にして大志を懷き、堅を輔けて劃策頗る努め、内は異材を擧げ廢職を修め、農桑を課し困窮を恤み、外は外征を起して國威を伸張し、遂に前燕・前涼・代の諸國を平定し、其の領域東は高句麗より、西は于闐ウチンに及び、天下を九分して其の八を有ち、塞外諸國の來朝する者六十餘國の多きに達して富強敵無く、版圖の廣大なることは東晉に數倍するに至つた。

前秦の世系



前秦の江北一統

(一)前燕 前燕は慕容皝の建てた國である。皝の子儁ジュンは弟垂と趙を伐つて薊城薊は縣名今の城を抜き徙つて之に都したが、次いで又冉魏を滅して帝を稱し、山東河南を併略して都を鄴に徙し、勢漸く強大となつた。此の頃儁の子の皝が位に在りて、叔父慕容恪・慕容

前秦の江北一統

(一)前燕

垂等が心を協せて之を輔けたが、晉の太和四年(我紀元一〇二九年)に桓温が大兵を以て燕を伐つて枋頭に至るや、皝は懼れて龍城に奔らんとしたが、垂は自ら請うて之を拒ぎ、大に晉兵を敗つて桓温を走らせたから、之より垂の威名は日に盛になつた。然るに燕の大傅評が忌んで之を殺さんとしたから垂は秦に出奔した。是に於て秦の王猛は諸主を督して燕を伐つて大に之を敗り、長驅して鄴を圍み、秦王苻堅も繼いで至り、遂に燕王皝を執へて歸り、封じて新興侯とした。かくて前燕は魔よりこゝに至るまで、四世、五十年で滅びた。時に東晉廢帝の太和五年(皇紀一〇三〇年)である。

(二)前涼

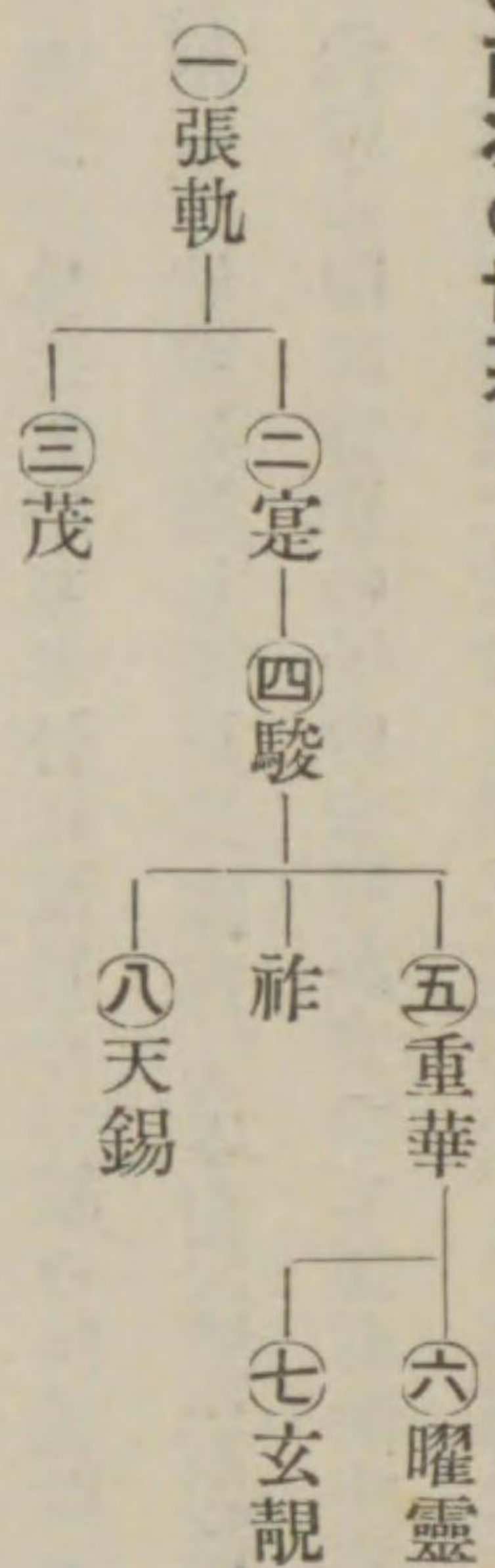
(二)前涼 前涼は張重華の建つる所。初め西晉惠帝の時に、張軌は涼州(今の甘肅蘭州から安西州に至る)の刺史と爲り、姑藏(肅涼州今の甘肅西寧府)に據つて威を振ひ、西平(郡名今の甘肅西寧府)公に封ぜられた。軌の子茂は趙主劉曜に降り、涼王に封ぜられたが、茂が卒して兄の子駿が嗣ぎ、後趙主石勒に事へたが、後之を恥ぢて晉に通じた。駿の子重華は、後趙の滅亡後、遂に獨立して前涼王と稱し、姑臧に都し、東は隴西より西は龜茲鄯善等の諸國を撃ち、勢を西方に振つた。穆帝の時に重華の子の玄靚が立つて藩を秦主苻生に稱したが、叔父錫が玄靚を弑して之に代り、酒色に耽つて國政を顧みず、國が大に亂れたから、秦王堅が之を伐ち、天錫は面縛して出で降り、前涼はこゝに亡びた。時に東晉武帝の大元元年(皇紀一〇三六年)で、張



軌より八世七十餘年にして亡びた。

前涼の世系

○前涼の世系

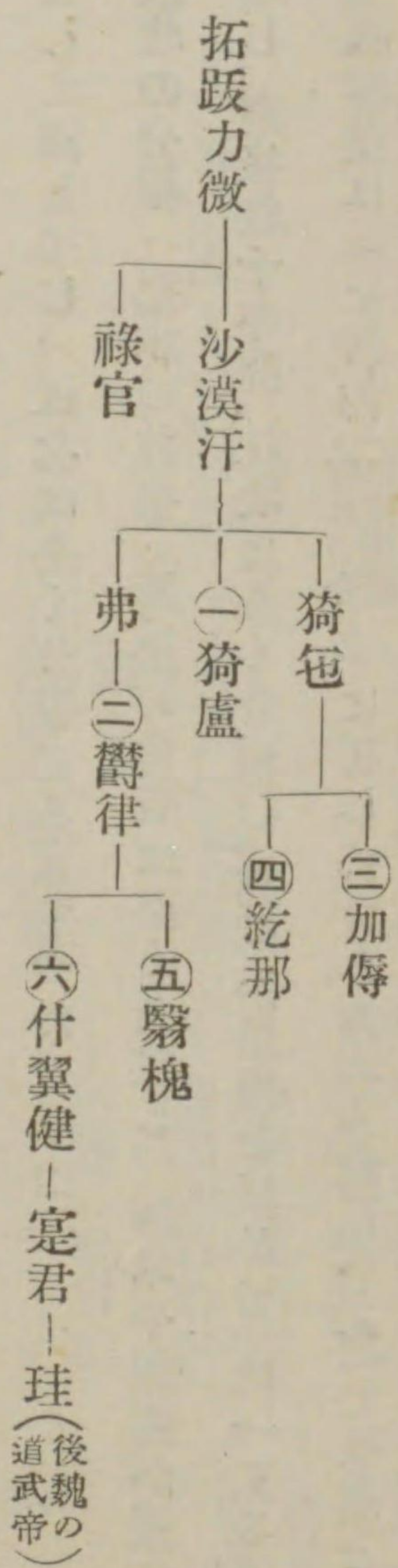


(三)代

(三)代 西晉惠帝の時、拓跋力微可汗の子祿官可汗は、國を分つて三部と爲し、一は上谷(郡名、州に屬す、今の河北宣化府)の北に居り、自ら之を統べ、一は代郡(今の宣化府蔚州及山西大同府東境)の北に居り、兄の子猗苞をして之を統べしめ、一は盛樂に居り、猗苞の弟猗盧をして之を統べしめた。其の後祿官猗苞が死するに及んで、猗盧が三部を總攝し、拓跋氏は愈々盛になつた。愍帝の頃に至つては猗盧の勢益々強く、王と爲つて代、常山(冀州に屬す、今の河北正定府)二郡を領したが、猗盧は其の子に弑せられて國大に亂れ、東晉成帝の頃に、猗盧の從孫什翼健シヨウヨウケンが王と爲つた。什翼健は雄武にして智畧有り、能く祖業を修め、百官を制し、號令は明白、政治清簡であつたから、國勢益々盛に、其の領地東は今の朝鮮の北境より、西は今の中央亞細亞の浩罕の地に及び、衆數十萬を有した。然るに庶長子寔君は亂を起して諸弟を殺し、併せて父什翼健をも弑し、國內大に亂れたから、秦軍は雲中に攻め入り、寔君を執へ誅

代の世系

○代の世系



して代を滅した。實に猗盧より六世七十餘年である。

前秦の衰運

○前秦の衰運

前秦の苻堅が、王猛を以て丞相と爲すや、猛は剛明清肅、賞罰必當り、國富み兵強く、秦國は大に治まり、海内に敵無きに至つた。既にして猛が疾むたので、堅は親ら猛の第に臨み、疾を視て後事を訪うた。猛が曰く「晉は江南に僻處して居るが、然も正朔相承け上下相和して居るから、臣歿するの後も、願はくは晉を以て圖と爲してはならぬ。鮮卑、西羌は我の仇敵であるから、宜しく之を除いて以て社稷を安んずるがよい」と、言ひ終りて死んだ。蓋、鮮卑とは前燕(慕容氏)を指し、西羌とは後秦(姚氏)を指すのである。堅聽いて嗚呼天は吾をして六合を平定せしむるを欲せざるかと曰うて哭した。かくて堅は、既に燕を滅し蜀を取り、涼・代を従へ、東夷・西域の朝貢するもの六十餘國、版圖の廣大なることは晉に數倍するに至つたので、意益々驕り、遂には王

王猛の遺言



猛の遺言を軽んじ、大舉して晉を攻めんことを議した。或人が、晉に長江の險あるを説いたが、堅曰く「以吾之衆投鞭於江足斷其流」と侮り、遂に大軍を發して南に向ひ、水陸齊しく進んだ。時に晉は南渡の後、王敦・蘇峻の叛亂があつて北征の暇は無く、桓温が蜀を討つて成國を滅したが、一度び中原に向つて枋頭に敗れてからは、遂に江東に偏安して孝武の世に及んだ。且つ晉は、常に秦の寇を以て憂となし、詔して良將の北方を鎮禦するに足るべき者を求めた時に、謝安は兄の子玄を以て詔に應じたが、今や苻堅の大軍が襲來するに及んで、謝安は弟謝石を以て征討大都督とし、謝玄を前鋒都督として、衆八萬を督して大に之を肥水(安徽省壽水の東に在り)に敗り、秦兵崩潰し、堅も亦流矢に中り、纔に身を以て長安に遁れ歸つた。是より堅の威は頓に衰へ、鮮卑・匈奴・氐・羌の諸族が相前後して國を起し、江北は全く分裂するに至つた。

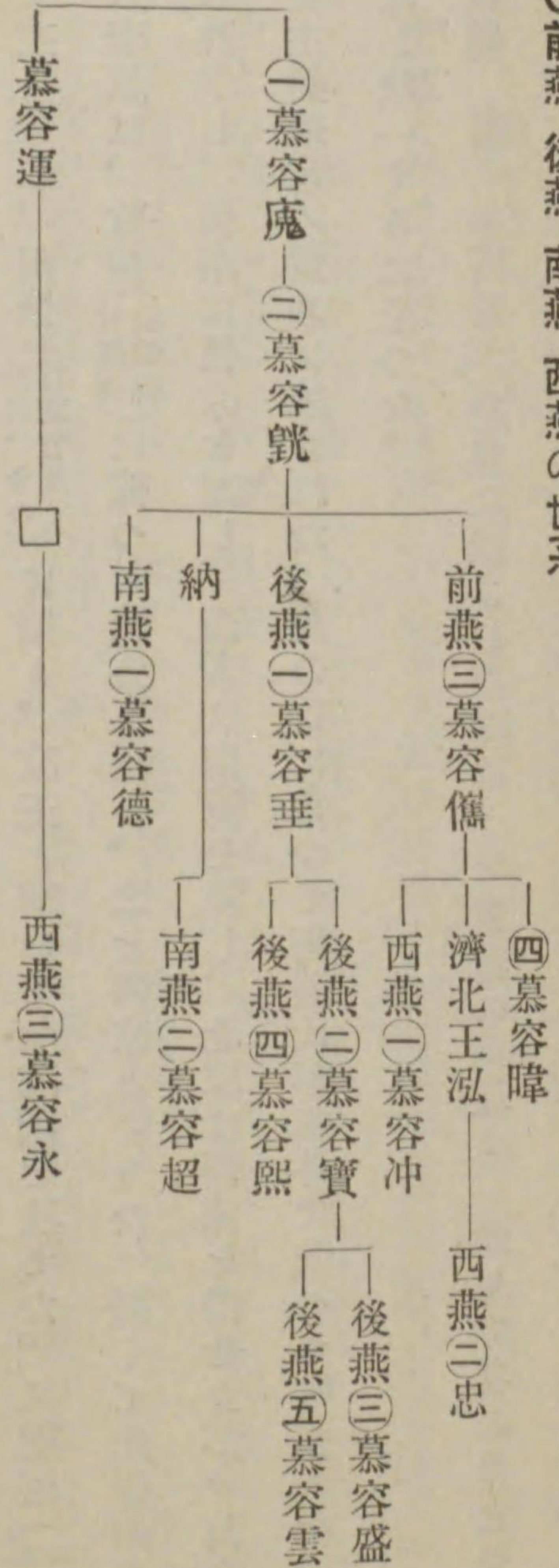
肥水の戦  
江北の分裂

後燕  
後秦  
西燕

江北の分裂 肥水の敗後、苻堅の勢威は全く失墜し、鮮卑や西羌が疊に乗じて所在に興起し、爾後數十年間、江北は全く分裂し、群胡が紛擾を極めて、統一する所が無かつた。即ち慕容垂は兵を河内(郡名、今の河南懷慶)に起して自ら燕王と稱し、之を後燕といひ、姚萇は兵を北地(郡名、今の陝西耀州)に起して自ら秦王と稱し、之を後秦といふた。又慕容冲は故の燕王慕容暉の弟であるが、兵を平陽に起し、進んで長安に入り帝と稱した。之を西燕といふ。

前燕後燕南燕西燕の世系

○前燕、後燕、南燕、西燕の世系



然るに西燕は、爾後殺戮相つぎ、世子は皆其の下に殺されたが、慕容永(其の祖父は慕容廆の弟)の時河東(郡名、今の山西、今解州及び蒲州)王となり、長子(縣名、今山西、臨安府に屬す)に據りて帝と稱した。然るに慕容垂は、兵を出して長子を圍んで永を殺し、西燕は亡びた。是より先き、前秦王苻堅は、肥水の敗後、西燕主慕容冲の爲に長安を逐はれたが、後秦王姚萇に殺され、其の長子丕は、西燕王永に攻められて敗走し、東晉の邊將の爲めに殺された。丕の族子南安王登は、南安(甘肅省鞏昌)に自立し、是より屢々後秦と戦ひ、互に勝敗があつたが、後秦主萇が殂して、太子興立ち、前秦主登を撃つて之を殺した。そこで登の子崇は、湟中(今の甘肅西寧)に奔つて帝と稱したが、西秦王乞伏乾歸の爲に殺され、前秦は遂に亡びた。時に東晉武帝の太元十九



後涼

西秦

南涼

北涼

西涼

後魏

年(皇紀一〇) (五二年)であつて、苻健の建國より六世四十四年に及んだ。斯く前秦西燕が相次いで亡びたので、後燕・後秦は苻秦の故地を中分して江北に據り、こゝに東晉と相並んで鼎足の勢を成した。時に氐會に呂光といふ者があり、初め前秦に仕へ、龜茲・焉耆等の西域を撫寧し、恩威甚だ著はれたが、後還つて涼州に據り、涼天王と稱し、姑臧(甘肅省武威縣)に都して後涼國を建てた。又鮮卑の乞伏國仁は隴右(甘肅省蘭州及鞏昌)に起つたが、國仁が卒して、弟乾歸が立つて秦王と稱し、之を西秦といふた。又鮮卑の秃髮烏孤は、西平(甘肅省西寧)に起つて武威(甘肅省涼州、今の)王と稱したが、烏孤が卒して弟利鹿孤が立つて河西王と稱し、卒して弟の倭檀が立ち、更に涼王と稱した。是を南涼といふ。又匈奴の沮渠蒙遜(ソキョモウソン)は段業を推して主と爲し、張掖(甘肅省甘肅州、今の)に據り、涼王と稱して北涼國を建てた。又隴西(甘肅省、今の)の人李暠は、敦煌(甘肅省敦煌縣)に據つて涼公と稱し、之を西涼といふた。斯くて此等の諸國は互に攻争し、後秦は後涼を滅し、西秦は南涼を降し、北涼は西涼を併せたが、西秦は遂に夏主赫連定の爲めに滅された。此の時に當つて拓跋氏が塞外に起つて勢強大に、遂に江北を統一するに至つた。

後魏 曩に拓跋氏が苻堅に滅された時に、什翼犍(シヨウヨクケン)の孫珪(ケイ)は、幼年で其の母と共に匈奴の劉庫仁に依つたが、會、庫仁は其の部下に殺され、弟願眷が代り、尋いで庫仁の子

後魏の道武帝  
南燕・北燕

顯は願眷を殺して自立し、又拓跋珪をも殺さんとしたので、珪は賀蘭部に奔つて其の舅に依り、諸部の大人に推されて代王となり、盛樂(山西省歸化城の南)に都して國號を魏と改め、連りに後燕を伐つて遂に之を滅し、尋いで都を平城(山西省大同の東)に遷して宗廟社稷を建て、帝位に即いた。之を魏の道武帝といふ。帝は即位の始め、遠祖可汗毛以下二十八人を追尊して皆帝とした。時に東晉安帝の隆安二年、史に之を後魏と謂ひ、以て曹魏と區別する。斯くして後燕は既に亡びたが、其の一族慕容徳は、滑臺(河南省滑縣)に據つて南燕國を建て、又後燕の故將馮跋は龍城(內蒙古土默特)に據つて北燕國を建て、共に魏に従はない。又後秦王姚興は、劉勃勃に命じて朔方を鎮せしめたが、勃勃は事を以て姚興を怨み、秦に叛いて統萬城(故城は陝西懷遠縣の西に在り)に據り、姓を赫連と改め、自ら大夏天王と稱した。道武帝は晩年方士の説に惑ひ、寒食散藥を服して躁怒常無く、屢、人を手刃したが、後賀夫人を譴責して之を殺さんとし、遂に夫人の子紹の爲に弑せられたので、長子嗣は紹を誅して即位した。之を太宗明元帝といふ。

東晉の滅亡

東晉の滅亡 肥水の役後は、江北が分裂した爲め、東晉は一時少康を得たが、武帝は肥水の戦捷以來、意漸く驕つて治を勵まず、弟會稽王道子に政を委ねて少しも顧みなかつたので、道子は頗る權を專にした。帝は頗る酒を嗜み、流連するのみであつたが、時に長星



桓玄の亂

が現はれたので、帝は杯を舉げて祝して曰く、「長星、汝に一盃の酒を勸む、豈世に萬年の天子有らんや」と。帝はもと張貴人を寵したが、年三十に近かつたので、一日帝之に戯れて、汝も年を以てすれば亦當さに廢せらるべきであると曰うたので、貴人は遂に婢をして帝を弑せしめた。在位二十四年。太子立ち之を安帝といふ。帝性不慧であつて、寒暑飢飽を辨えず、會稽王の子元顯が政を擅にし、生殺意の儘にし、人心頗る騒動した。會、妖賊孫恩といふものが海島より出で、亂を作したので、劉牢之・劉裕等の力に依つて之を平げたが、次いで桓玄の亂が起つた。桓玄は桓温の子であるが、常に其の才を負み雄豪を以て自ら任じた。嘗て義興(郡名、今の江蘇宜興縣)に守たりし時に鬱々として志を得ず、「父爲九州伯子爲五湖長」と官を棄て、國に歸つた。尋いで荆江等の八州の都督となつたが、遂に兵を舉げて反し、建康に入り、元顯・道子父子を殺し、玄自ら相國楚王となり、九錫を加へ、安帝に迫りて位を禪らしめた。會、彭城(縣名、今の江蘇徐州)の人劉裕といふものがあつて、勇健にして大志があり、嘗て海賊孫恩の亂を平けて功を立てたが、是に於て玄を討じて大に之を破つたから、玄は出で奔つて江陵(縣名、今の荊州)に死し、安帝が位に復した。時に南燕王の慕容超が、晉の邊疆を侵したから、劉裕は北伐して、超を執へ建康に送つて之を殺し、南燕は亡びた。會、盧循が裕の北伐の虛に乗じて兵を起し、江を下りて京

南燕亡ぶ

後秦亡ぶ

邑に逼つたから、裕は急に還つて之を討平し、更に別將を遣して蜀を平らげ、自ら諸軍を督して後秦を討つた。後秦は王姚興の時に、後涼を降し南涼・西涼の諸國も、亦皆朝貢したが、此の時興は既に歿し、子泓が立つたが、裕は攻めて洛陽を抜き、潼關(陝西華陰縣)を破り、遂に長安に入つたから、泓は出で降り後秦は亡びた。斯くて劉裕の勢は中外を傾け、相國宋公と爲り、遂に司馬氏を驅逐して晉祚を移さんと欲し、人をして安帝を弑せしめ、其の弟恭帝を立て、自ら爵を進めて王と爲り、遂に晉の禪を受けた。之を宋の高祖武帝と爲す。時に皇紀一〇八〇年である。斯くて東晉は、元帝の即位よりこゝに至る迄、十一帝百〇三年、西晉武帝より愍帝まで、四世を加へて凡べて十五帝百五十六年にして、司馬氏の世は滅びた。

宋の高祖武帝

晉亡ぶ

五胡十六國

五胡十六國 西晉の末に八王の亂があつて、王室の藩屏の壞れたのに乘じ、塞外種族の江北に相攻争すること百三十餘年、其の間に興亡した列國は、二趙(前趙・後趙)・四燕(前燕・後燕・南燕・北燕)・三秦(前秦・後秦・西秦)・五涼(前涼・後涼・南涼・北涼・西涼)・成・夏・の十六國に及び、人種を以て言へば匈奴・羯・鮮卑・氐・羌・の五種に亘つた。故に之を五胡十六國と稱するのである。

五胡十六國

○五胡十六國 兩漢の時には漢族の勢威が最中で、進んで西域地方までも經營したが、三國の時に至りては、復た外に及ぶことが出來ず、西晉惠帝の八王の亂後、夷狄が間に乘じて中原の地に入つて



參考 東洋歴史

國を建て、晉室は逃れて南に遷つた。之を東晉の世といふ。東晉十一帝百四年の間は、支那の北部は紛亂争奪の巷となり、諸國の興亡が實に頻發を極めた。此等の諸國を人種によりて表示すれば左の如くである。七人種の中、匈奴・羯・鮮卑・氐・羌を五胡といふが實は土耳其族、蒙古種、圖別特種の三人種である。又之に苗越種の巴蠻を加へて六夷ともいふ。又十八國の中、西燕は國が小で早く滅びたから列國に加へない。後魏の拓跋氏は後に支那を統一して僭偽の中に入れないから、以て此の二國を除いて他の二趙(前趙・後趙)四燕(前燕・後燕・南燕・北燕)、三秦(前秦・後秦・西秦)、五涼(前涼・後涼・南涼・北涼・西涼)、成、夏を十六國といふのである。

族名	人種名	國號	始祖	國都	興	亡	滅したる國
土耳其族	匈奴	(一)漢(前趙)	劉淵	初、平陽(山西省) 後、長安(陝西)	三〇四	三八	後趙
		(二)北涼	沮渠蒙遜	張掖(甘肅省)	三九七	四三九	後魏
		(三)夏	劉勃勃	統萬(陝西省)	四〇七	四三一	後魏
		(四)後趙	石勒	襄國(順德)	三三九	三五二	前燕
	羯(匈奴の一種)						
		前燕	慕容皝	鄴(河北省)	三三七	三七〇	前秦
		後燕	慕容垂	中山(河北省)	三八四	四〇九	北燕

○劉淵

匈奴は漢以來中國に臣屬し、入りて塞内に居住したが、其の先世に嘗て漢の婿となりしこ

第十九章 五胡及び東漢

漢族	圖別特族		蒙古族	鮮卑
	羌	氐		
北燕	後秦	成(漢)	西燕	代(後魏)
西涼	前秦	後涼	南燕	慕容冲
前涼	後秦	成(漢)	慕容德	慕容皝
馮跋	姚萇	李雄	乞伏國仁	拓跋珪
李暠	呂光	李雄	秃髮烏孤	盛樂(歸化城)
張軌	姚萇	李雄	西平(甘肅省)	宛川(甘肅省)
李暠	姚萇	李雄	西平(甘肅省)	宛川(甘肅省)
龍城(默特部)	長安(陝西省)	成都(四川省)	盛樂(歸化城)	盛樂(歸化城)
燉煌(長安州)	長安(陝西省)	成都(四川省)	盛樂(歸化城)	盛樂(歸化城)
姑藏(涼州)	長安(陝西省)	成都(四川省)	盛樂(歸化城)	盛樂(歸化城)
三三九	三三四	三〇四	三三九	三三九
三三六	四一七	三〇四	三三六	三三六
三三七	四一七	三〇四	三三六	三三六
四〇〇	四一七	三〇四	三三六	三三六
四〇二	四一七	三〇四	三三六	三三六
四〇九	四一七	三〇四	三三六	三三六
後魏	東晉	東晉	後秦	後秦
北燕	東晉	東晉	後秦	後秦
北涼	東晉	東晉	後秦	後秦
後魏	東晉	東晉	後秦	後秦



とあるを以て、遂に姓劉氏を冒した。劉淵は冒頓十九世の孫で、左國城（今の山西省永寧縣の東北に在り）に生れた。淵幼より俊敏で博く經史を習ひ、長ずるに及んで容貌魁偉膂力人に過ぎた。初め左部の帥と爲り、既にして北部都尉となつた。淵は常に財を輕んじ施與を好んだから、五部の豪傑及び幽、冀（幽州は今の河北省北境及び遼寧省。冀州は今の河北の中部及び山東の北境）二州の名儒は多く之に歸した。次いで五部大都督となりて其の軍事を監し、永興元年（皇紀九六四年）大單于の號を得、左國城に居つた。群臣に謂つて曰く、吾は漢氏の甥で、約して兄弟となつたもの故、兄亡びて弟紹ぐも亦可ならずやと、乃ち漢王と稱し、劉禪（蜀漢の後主）を追諡して孝懷皇帝といふた。永嘉二年（皇紀九六七年）自ら皇帝となり、同四年に歿した。

○劉聰 淵の子。驍勇人に絶し、博く經史に涉り善く文を屬した。淵が歿して子の和が漢祚を嗣ぐや、聰は之を殺して自立した。永嘉五年（皇紀九七一年）聰は洛陽を陥れて西晉の孝懷帝を擒にし、之を平陽に遷し、次いで又孝愍帝を長安に攻めて降を乞はしめ、大に威を北方に振つたが、東晉の大興三年（皇紀九八〇年）に歿した。

○劉曜 淵の族子である。幼にして孤となつて淵に養はれたが、亦頗る文武の才があつた。永興元年（皇紀九六四年）に淵が自ら漢王を稱するに及んで、曜を建武將軍とした、次いで中山王に封ぜられた。建興四年（皇紀九七六年）長安を陥れて西晉を亡し、大興元年（皇紀九七八年）赤壁に自立し、都を長安に徙して、國號を趙と改め、咸和四年（九八九年）石勒の爲めに殺されて國亡びた。

石勒

○石勒

後趙主第一世。匈奴の別種羯より出た。上黨武鄉（今の山西省沁州）の人。漢主劉淵の將となり屢功を立てた。後に趙主劉曜と隙あり、曜を殺して自ら趙王となり、咸和五年（皇紀九八〇年）帝を稱し國を後趙と號し、越えて八年歿した。勒は幼より文學を好み、陣中に在つても、常に儒生をして史書を讀ましめ、之を聽いて以て古帝王の政の善惡を論評した。勒は嘗て徐光に向つて朕は古來の帝王に比すれば何等の主に當るかと思ねた時、光は陛下神武（チウリヤク）畧漢高に過ぐと答へたので、勒笑つて曰はく、人豈自ら知らざらんや、卿が言は甚だ過ぎて居る。若し高祖に遇はば、當に北面して之に事へんのみ、朕は當に韓彭と肩を比すべきか、若し光武（劉秀を指す）に遇はば、當に馬を並べて中原を馳驅すべきだが、未だ鹿の誰が手に死するを知らぬ。大丈夫事を行ふに、當に磊々落落として日月の皎然たるが如くなるべしだ。終に曹孟德、司馬仲達が人の孤兒寡婦を欺き、狐媚して以て天下を取るには效はないと。かくて晉の成帝の咸和八年（皇紀九九三年）に歿した。

○慕容皝 前燕主第二世である。字は元貞。雍の第二子。身の長七尺八寸あり、雄毅にして權畧が多かつた。皝西は段氏を摧き、南は趙王虎の兵を卻け、東は高句麗を伐ち、北は宇文氏を滅し、扶餘を襲うて其の王を虜にする等、功業頗る多かつた。在位十五年にして咸康三年（皇紀九九七年）に卒した。

○慕容垂 後燕王主第一世。字は叔仁。前燕主皝の第五子である。身長七尺四寸、手を垂るれば膝を下つた。皝は甚だ之を愛して、世子と爲さんとしたが、群臣の諫めによつて己めた。けれども猶



寵遇が世子儁に踰えたので儁は頗る不平であつた。後功を以て吳王に封ぜられたが、事を以て遁れて秦に歸した。秦王苻堅は固より圖燕の志があつたが、垂を憚りて敢て發せなかつたが、垂の至るを聞いて大いに喜び、卿と共に天下を定むべしといふた。然るに堅が臣王猛は、垂が雄圖を抱けるを悪んで、堅に勧めて之を除かんとして曰く、垂が父子は譬へば龍虎の如く、之を馴らすべきでない。若し借すに風雲を以てしたならば、將に制すべからざるに至るだらうから、宜しく早く之を除くがよいと。然るに堅は聽かず。太元八年(皇紀一〇四三年)苻堅が肥水の戰に敗北するや、翌年垂は自ら燕王と稱し、同十一年皇帝と稱した。之を後燕といふのである。十九年西燕を亡し、在位十三年、年七十一にして歿した。

苻健

○苻健

字は建業。氏苻苻洪の子である。雄果にして弓馬に長じ、常に施與を好み善く人に事へた。

永和六年(皇紀一〇一〇年)父に嗣いで其の衆を統べ、翌年自立して天王大單于の位に即き、國を大秦(即ち前秦)と號し、皇始と改元した。二年單于の號を太子に授けて自ら皇帝と稱し、在位五年、年四十九にして歿した。

苻堅

○苻堅

字は永固。秀子東海敬武王苻雄の子である。堅父の後を繼ぎ東海王となつた。時に前秦主苻健が卒して其子生立ち、暴虐にして殺を好み、人心が離亂したから、外平元年(皇紀一〇一七年)に之を弑して自立し、王猛を擧げ任ずるに國事を以てした。是に於て人材を登用し、廢職を修め、農桑を奨まし、困窮を愷恤し、秦の民は大に悦んだ。建元六年王猛をして燕を討たしめて之を滅し、

王猛

○王猛

字は景略。北海郡の人である。少年の時より學を好み、能く兵書を読んだ。氣度宏遠、華山(今の河南省洛陽縣)に隠れて佐世の念を懷いて居つたが、會々東晉の桓温が秦を討つに當りて、猛は褐を被りて之に謁し、虱を捫りて當世の務を談じ、傍若無人の態度であつたので、温が之を異とし、共に伴ひ還らんとしたが、猛は従はなかつた。會々苻堅が自立するに及び、或人が猛を堅に勧めた。堅猛を招き一見舊の如く、自ら謂らく、恰も玄徳の孔明に遇ふが如しと。因りて一歲に五度も官を遷して大に之を優遇し信任した。猛大に異材を擧げ廢職を修め、農桑を課し困窮を恤み等したので、秦民は大に悦んだ。幾もなく相に拜し、日に益親幸せられ、功を以て清河侯に封ぜられた。會々猛は疾に寢したので、上疏して曰く、「伏して惟みるに、陛下威八方に震ひ、光六合を破る、夫れ善く作るもの必しも善く成らず、始を善くするは終を善くするに如かず。是を以て古先哲王之を慎む、祈るらくは、陛下蹤を前聖に追はゞ天下幸甚ならん」と。堅之を覽て悲慟し、親臨して疾を問うた。猛曰く晉は江左に僻處して居るが、然も正朔相承けて居る。臣歿するの後願はくは晉を以て圖と爲す勿れと言終りて卒した。年三十六。堅は後、其の言を用ゐずして肥水の大敗を招いた。



○謝安シヤアン 字は安石。少い時から重名があつたので、朝命屢逼つたけれども官に就かないので、士大夫謂つて曰く、「安石出でずんば蒼生を如何にせん」と。年四十餘にして、始めて命に應じて司馬となつた。桓温深く之を重んじ、尋いで吳興の太守に叙せられたが、去つて後、人皆之を思慕した。更に侍中に拜し、吏部尙書に遷つた。會、秦主苻堅入りて寇し、京師は爲めに震駭した。時に安は方さに客と棋を圍んだが、適々姪玄等が堅を破つたとの勝報が至つたが、觀終りて喜色も無く、棋すること故の如かつたので、客之を問うたが、徐ろに答へて曰く、小兒輩が既に賊を破つたと。遂に罷めて歸り、戸限を過ぎて心甚喜び屐齒の折るゝを知らなかつたといふ。其の情を矯め物情を鎮すること類ね此の如きであつた。晩年會稽王道子と隙を生じて官を去り、太元十年(皇紀一〇四五年)に歿した。

○肥水ヒスイの戦 東晉の孝武帝の時に、謝安は武勇を以て聞えて居つたが、時に秦王苻堅は燕を滅し蜀を取り、涼代を平定し、版圖の廣いことは晉國に數倍し、東夷西域六十二國が皆朝貢したので、堅は意益驕り、遂に大舉して東晉を討たんと議した。或人が晉には長江の險が有るからと謂つて諫めたが、堅が曰く吾が衆を以てせば鞭を江に投ずるも其の流を斷つに足ると豪語して許かない。時に中外皆諫めたが、惟だ慕容垂と姚萇とが之に親征を勧めた。かくて晉の大元八年(皇紀一〇四三年)堅は戎卒六十餘萬、騎二十七萬を以て長安を發し、水陸齊しく進んだ。是に於て晉は謝安の弟謝石を征討大都督となし、謝玄を前鋒都督とし、衆八萬を以て之を拒いだ。秦兵は肥水(今の安徽省壽

州の東に在る河水)に逼つて陣したが、謝玄は人をして謂はしめて曰く、請ふ陣を移して少しく退き、我が軍をして河を渡るを得せしめ以て勝敗を決しやうと。堅は晉軍の半ば河を渡つた時に、急に討つて之を燈めやうと考へ、即ち之を許し、兵を麾いて卻かしめた。秦兵は一たび卻き始むるや、復た容易に止めきれない。時に晉の間者は秦軍の後陣に在つて、大に呼んで曰く、秦兵敗れたりと。是に於て秦軍は潰亂してまた奈何ともすべからず。玄等水を渡りて追撃頗急であつたから秦兵は總崩れとなり、風聲鶴唳も皆以て晉兵の至るとなし、堅も亦流矢に當り、僅に身を以て免れ還つた。是より前秦の領土は忽ち土崩瓦解し、江北の形勢は一變し、秦の勢大に衰へ、遂に亡ぶるに至つた。

○姚萇ヨウチャウ 羌酋姚弋仲の子である。秦主苻堅に従つたが、肥水の戦に大敗してから、萇は兵を渭北に起して秦王(後秦)と稱し、後、帝を稱した。次いで苻堅を五將山に破りて之を殺し、太元十八年(皇紀一〇五三年)を以て歿した。之を後秦の太祖武昭帝となす。

### 第二十章 東方諸國高句麗・百濟・新羅の古史

後三韓(或は三國)の建國 漢の武帝が朝鮮の地を郡縣として後、幾ばくも無くして、新羅・高句麗・百濟の三國が並び起つた。而して其の起つたのは、新羅が最も先きで、高句麗・百濟が之に次いだ。



新羅  
朴赫居世

新羅は本と辰韓の地である。初め秦漢朝鮮の遺民等が、東海の濱の山谷に分居して六部を爲つたが、朴赫居世といふ者が、皇紀六百四年に、六部の人々に推されて、居西干(居西干は方言にして即ち王の意)と爲り、國を徐羅伐と稱し、金城(今の慶尙道慶州)に都した。王は能く國內を巡撫し、農桑を奨勵したから、百姓は安堵し、國が能く治まつた。赫居世薨じて、子南解王が立ち、長女を以て昔脱解に妻はした。既にして南解が病篤きに及んで、子儒理及び女婿昔脱解に遺命して曰く、我が死後は、朴・昔の二姓が、年長を以て位を嗣げと。薨ずるに及んで、儒理は脱解の徳望あるを以て之に譲つたが、脱解は聽かぬので、儒理が位に即いた。儒理は終りに臨み群臣に謂つて曰く、脱解は位輔臣に在つて、屢、功績を著した。朕が二子は其の才到底及ばないし、且つ先君の命もあるから、吾死するの後は、大位に即かしめよと。儒理は能く窮民を賑恤し、官制を定め、隣國來歸する者が衆かつた。薨じて脱解が位に即き、九年(皇紀七〇五年)國號を雞林と改めた。是より數世、新羅は賢君相繼ぎ、心を政治に用ゐたから、國本が益鞏固になつた。

高句驪

朱蒙(鄒牟)

高句驪 朴赫居世が立つて新羅王と爲つた後二十一年(皇紀六二四年)に、高句驪の始祖朱蒙(鄒牟)が立つた。高句驪は即ち古朝鮮の地である。是より先き、漢の玄菟郡(今の興寧地方)の北に扶餘といふ諸種(新羅古)の國があつた。其王金蛙の子、朱蒙は頗る材能があつて、兄弟の

百濟

嫉視する所と爲つたから、其の禍を避けて東南に走り、玄菟郡治なる高句驪縣の東、佟佳江の上流地方(今の平安道咸川府。或は鴨綠江の上流に在りともいふ)に國を建て、高句驪と稱し、後略して高驪といふに至つた。朱蒙の子瑠璃王は、鮮卑(内蒙古科爾沁南境)を降し、梁貊(其の地未詳、蓋し平安道に在るべしといふ)を併せ、勢盛であつた。後漢の頃、高句驪人は屢、玄菟の地を侵して、公孫康(公孫度の子)に破られたが、其の後晉の衰亂に乗じて、樂浪帶方の二郡を併せたから、高句驪の領地は、韓種の諸國(馬韓・弁韓・辰韓等の三韓七十餘國をいふ)と地を接するに至つた。

百濟 高朱蒙に後妻の子が二人あつて、長を沸流といひ、次を温祚といふた。既にして朱蒙は其の子類利(朱蒙が北扶餘に在りし時の子)を立て、太子と爲すに及び、二子は共に南行して、沸流は彌鄒忽(京畿道仁川府)に居り、温祚は慰禮城(忠清道稷山縣)に居つたが、幾ばくも無くして沸流は死し、其の臣民は皆慰禮に歸し、勢益盛になつたので、乃ち國を百濟と號し、扶餘を以て姓とした。其の位に即いたのは、皇紀六百四十三年で、高句驪に後ること二十年である。然るに樂浪靺鞨等が、屢、百濟の境域を擾したから、乃ち南下して、地を漢水の南に卜し、慰禮の民戸を遷し、漢山(今の京畿道廣州府)に築いて之に都し、國內を巡撫して農耕を勸め、頗る心を民政に用ゐた。次いで二十七年、馬韓王の微弱なるに乗じて之を亡ぼした。此の頃、古の三韓(馬韓・弁韓・辰韓)の故地は、概ね新羅百濟に屬し、朝鮮の故地は、概ね高



驪に屬し、長白山以南の地は、分れて三國と爲つて鼎立の姿を爲した。依りて又之を三韓といひ、史家は前の三韓と區別して、後三韓又は三國ともいうて居る。

任那

任那（今の高州） 又此等後三韓の他に、弁韓の地に加羅（今の金海府）・安羅（今の咸安郡）・古寧（今の咸昌縣）・星山（今の星州）・大加倮（今の高靈縣）・小加倮（今の固城縣）等の小國があつて、我國では總べて之を任那といふて居る。我が崇神天皇の朝に、使を遣はして連りに新羅よりの侵略を訴へ我が援兵を請うたことがある。

後三韓の盛衰

後三韓の盛衰

新羅では、第九世の伐林が立つて聰明であつたから、世人は之を聖といた。尋いで奈解・助賁を経て沾解に至り、薨じて嗣無く、國人即ち助賁の女婿金味鄒を立てたので、是より王統は久しく金氏に歸した。百濟は、第五世肖古王より以後は、或は新羅を侵し、或は靺鞨を襲ひ等して、しきりに其の威を張らんとしたが、責稽王（八世）は貂兵に害せられ、汾西王（九世）は樂浪太守の刺客に殺され、近肖古王（十二世）の頃に至りても、國は常に安靜でなかつた。高句驪では、第十八世の故國川王は、處士乙巴素を擧げて國相と爲し、諸大臣宗族の嫉親を顧みず、國政を之に委ね、又民の窮するを見て、或は衣食を給し、或は賑貸の法を立て、毎年三月より七月に至り、官穀を出し、戶口の多少に應じて民に賑貸し、冬月に至りて之を還さしむる等、勵精して治を圖つたから、

頗る英明の聞えがあつた。一世を経て東川王（十一代）に至り、魏と戦つて大に敗れ、城を

平壤に築いて都を移した。其の後數傳して美川王（十五代）の子、故國原王（十六代）の時（東晉成帝頃）に、遼東に據つた燕王慕容皝の爲めに、丸都（高麗の國都、故址は平安道寧遠郡の南劍山に在り）を壞られて國內城

（今の奉天府懷仁縣の東、鴨綠江の上流）に遷り、是より意を西方に絶ち、専ら地を南方に廣めんと欲して、百濟を侵した。時に百濟では、第十二代の近肖古王が位に在つたが、精兵を出して高句驪

軍を邀へ撃ち、故國原王は戰敗れ、流矢に當つて薨じた。近肖古王は、勢に乗じて都を

北漢山（今の京城の北なる三角山）に遷して高句驪に對抗したから、是より同祖の二國は累世の仇となつた。既にして高句驪の廣開土王（第九代）は、躬ら水師を帥ゐて百濟の諸城を攻め、百濟

の阿花王（第十代）は、國內の兵馬を徵發して之を防がんとしたが、民多く苦んで新羅に出奔して意を果し得なかつた。葢鹵王（第十代）に至つて使を魏に遣はし、其の師を出して高

句驪を伐たんことを乞うたが、魏は従はない。是に於て高句驪の長壽王（第十代）は、自ら兵を帥ゐて百濟を攻め、攻圍七日にして遂に其の城を抜き、王を捕へて之を殺した。此

の時百濟は殆ど滅びんとしたが、我が雄略天皇の救護に由つて、僅に國祚を保つことを得た。斯かる間に、新羅は漸く近隣を併吞すると共に、又頗る心を内治に用ゐたから、文化の進歩は遙に他の二國の上に出たが、會、我が九州の熊襲と通じ、密かに之を後援



して、我が朝廷に叛かしめたので、神功皇后は親ら兵を率ゐて之を征伐し、新羅王奈勿は、貢を約して和を許された。時に百濟王近肖古は、高句驪の報復を恐れたから、直に使を遣はして我國に朝貢し、我が保護を求めて永く屬國と爲つた。論語千字文を應神天皇に奉り、我が文學の基を開いたのは、近肖古王の子近貴須王である。

### 第廿一章 大月氏。佛教の東流。

大月氏と佛教 大月氏はもと天山南路の地に居つたものであるが、曩に匈奴に逐はれ、葱嶺を踰えて西に遷り、縛芻河(今アム河)の流域に國を建て、南大夏を撃つて臣服せしめ、勢が漸く盛となつた。然るに前漢の末に至つて五部に分れたが、貴霜部長の丘就卻が、他の四部を併せ、西は安息國を破り、南はカブール(今の阿富汗)を取り、勢益々盛になつた。其の子閻膏珍は、罽賓を討滅して北西印度を併せ、其の版圖は、北印度より中央亞細亞を経て葱嶺以東に及んだ。是より先き、中印度の摩揭陀國にては、皇紀四百八十三年に、毛利耶王朝が滅びて、後南方より起れる案度羅王朝に併せられ、婆羅門教は再勢を得たから、佛教は漸く勢を中印度に失ひ、佛教徒の北印度に徙る者が多く、大月氏は佛教の中心となつた。

迦膩色迦王 迦膩色迦王は、閻膏珍の子であつて、皇紀七百三十八年(後漢章帝建初三年。但し帝即位の年に異説多し)大月氏國に君臨し、プルシヤアラ(今のバシヤラル)に都し、大に勢威を中央亞細亞に振つ

た。初め大月氏は、多く波斯の拜火教を信奉したが、迦膩色迦王に至り、佛教の高僧馬鳴(マウ)を伴ひ歸り、之より深く佛教を信じて其の興隆を圖り、都城の附近に百丈の高塔を建て、大夏其の他に殘存せる希臘人等を用ゐて、堂塔の建築、佛像の彫刻等をなさしめたから、工藝美術等が大に發達した。王は又皇紀七百四十年に、五百の高僧を罽賓に集めて第四の結集を爲した。曩に阿育王の時の結集には、摩揭陀の方言を用ゐて經文を書いたが、此の結集は、婆羅門學者の受用したサンスクリト(梵語)を以てし、世友(セウ)を上座として、馬鳴が之を助け、新歩派の學説をも採つたから、此れよりは、舊説を打破して高遠なる理論を説く者が多く出づるに至つた。此の時南印度の佛教徒は結集に参加せず、舊説を守つて居つたから、佛教はこれより南北兩派に分れ、北派の佛教は馬鳴、龍樹等の高僧が之を鼓吹し、大乘佛教の教義を立て、大月氏を中心として安息、康居等に弘まつた。此に對して、南方派は獅子國(錫蘭)を中心として緬甸・暹羅・爪哇等に傳播し、之を小乗佛教とうた。

佛教の東流 佛教の支那に入つたのは、後漢の明帝の時であるが、其の徴は既に西漢



の時に萌<sup>キザ</sup>して居つた。即ち武帝の時に、霍去病が匈奴を征して渾邪王を降し、金人を獲て還つて武帝に獻じ、武帝は之を甘泉宮に列したといふことがある。金人とは蓋佛像のことである。武帝は、又張騫を遣はして、之を求めしめたが、其の流通は未だ盛でなかつた。哀帝の時に、月氏の使者が佛經を口授したが、漢人は未だ之を信ぜなかつた。下つて後漢の明帝の治世は、恰も大月氏迦膩色迦王の時に當り、佛敎最盛の世であつたから、于闐・疏勒・龜茲等東西交通の要路に當る諸國は自然に之を奉ずるに至つたから、支那に傳はるのは自然の勢である。此の時に當つて帝は乃ち蔡愔<sup>サイイン</sup>等を西方に遣はして佛敎を求めしめたが、愔等は大月氏に至り、多くの佛像經論を得、又沙門迦葉摩騰<sup>カセツマツ</sup>・竺法蘭<sup>チクハラン</sup>の二高僧を伴うて歸國した。時に皇紀七百廿七年であつた。帝は大に喜び、二僧を迎へて鴻臚寺に舍せしめた。鴻臚寺とは蓋外賓を遇するの官舎である。初め二僧の發するに臨んで、途白馬に經文を負はせて伴ひ來たが、白馬は洛陽に至つて死んだが、屍は尙壞れなかつたので之を寺中に葬り、名を改めて白馬寺と曰ひ、永く僧舎と爲した。二僧は是より此の寺に在つて譯經に従事し、摩騰は四十二章經を譯し、法蘭は佛本行等の經を譯した。是れ實に支那に於ける譯經の濫觴であつて、是より西域の僧侶の支那に來つて譯經傳敎に従ふ者が漸しく多く、漢人の之を信奉する者も益々多きを加ふるに至つた。

白馬寺

斯く佛敎は大月氏より支那に入り、後漢の末より魏・晉を経て南北朝隋唐の頃に至つて全盛を極めた。而して其の頃、佛敎は、亞細亞の大半に廣まつて居つたから、支那に來た高僧の中には、大月氏印度の外より來た者も多かつた。例へば安世高<sup>アンセイカウ</sup>は安息の王子であり、康孟詳<sup>カンモウシヤウ</sup>は康居の人、鳩摩羅什<sup>カウモラジツ</sup>は龜茲の人なるが如き類である。斯くて佛敎は、後漢の明帝の時を以て、大月氏を経て支那に傳來したが、東晉の武帝は、之を百濟に弘布し、百濟の聖明王は、我欽明天皇の十三年<sup>皇紀一二二二年(西紀五五二年)</sup>に之を我國に傳へた。これ實に佛陀の涅槃後一〇三六年の事である。

### 第二十二章 南北朝の對立

南北朝

南北朝 宋の武帝劉裕は、皇紀一〇八〇年<sup>(西紀四二〇年)</sup>に帝位に即き建康<sup>(江蘇省南京)</sup>に都し、概ね江南の地を領有したが、後魏も亦太武帝<sup>後魏第三世</sup>の時に江北諸國を統一したから(皇紀一〇九九年)茲に支那は分れて南・北兩大國が對立の形勢をなすに至つた。此れより隋の統一に至るまで、凡そ百五十年間は、史に之を南北朝時代と稱し、江南には漢族が國を建てて南朝といひ、江北には異種族が勢力を振つて北朝というた。南朝は宋より齊・梁・陳の四代が、相繼いで江南に據り、北朝は後魏が後に至つて分れて東魏・西魏とな



り、東魏は之を北齊に傳へ、西魏は之を北周に傳へた。然るに會、隋が起つて北周及び陳を亡ぼし、遂に南北を統一し、支那は再び漢人の天子を頂くに至つた。由來南北朝時代は、二大國又は三大國の對抗であるから、晋末の五胡紛擾の如き混雜には陥らなかつたが、篡弒廢立が相踵いで行はれ、弒逆の多きことは古の春秋時代にも譲らない。南朝二十四君の中で終を善くせる者は十君、北朝二十六君、の中で、終を全うせる者も亦僅に十君に過ぎず、南朝の宋の順帝の如きは「願はくば後身世々天子の家に生るゝ勿れ」と歎かれたといふ程である。されば人道の頽廢は眞に驚くべき程で、後世の史を讀む者をして、誠に不快の感に堪えざらしむるものがある。之を圖表すれば左の通りである。

朝	南 朝				代 の 名	帝 の 數	弒せられし者	廢せられし者	全 さい 者
	宋	齊	梁	陳					
北 朝					後魏	一五	一〇		
周		北齊				六	二	一	
						五			三
						四		二	
						七	四		一
						八	四		三
						五	三		一
						四			三
						三			五
						二			三
						一			二
						五			三
						六			五
						五			二
						四			一
						三			三
						二			二
						一			一
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			三
						四			二
						三			一
						二			三
						一			二
						五			



是に於て魏帝太武は自ら將として之を救ひ、衆百萬と號し、鞞鼓の聲が天地に震つた。宋軍は懼れ退き、魏兵は益々追撃して大に之を破つた。既にして太武は兵を率ゐて南下し、民戸を掠め邑屋を焚き、南袞徐豫青冀の六州は、過ぐる所皆赤地となり、殺掠勝げて數ふべからざるに至り、國人も亦大に之を咎めたが、明年中常侍宗愛の爲めに弑せられた。在位二十八年、年四十五。帝は雄斷威武、群雄を掃蕩し、遂に宋と天下を二分した。

○後魏の世系

什翼健—世子(獻明帝)寔—①太祖武帝珪—②太宗明元帝嗣—③世祖太武帝燾—

—景穆太子晃—④高宗文成帝濬—⑤顯祖獻文帝弘—

⑦世宗宣武帝恪—⑧肅宗孝明帝詡—

—西—⑨廢帝欽—

—京兆王愉—西—⑩文帝寶炬—

—西—⑪恭帝、周宋公、廓

—范陽文獻王曄—清河文宣王亶—東—⑫孝靜帝

—彭城武宣王勰—⑬敬宗孝莊帝子攸

—廣陵惠王羽—⑭節閔帝恭

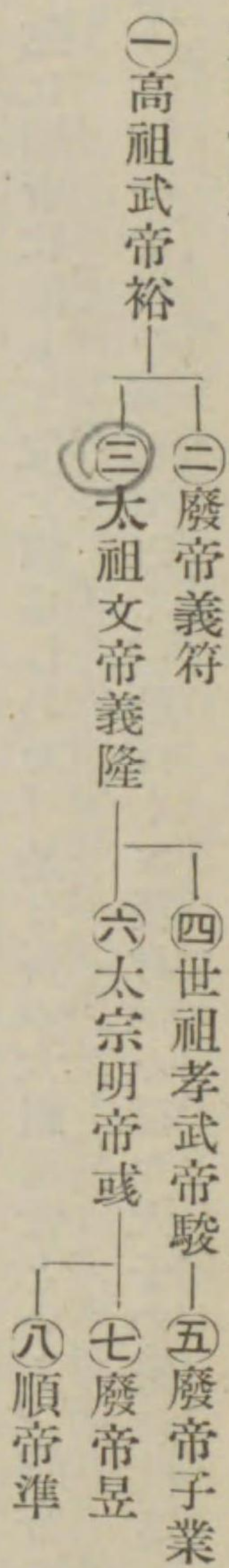
宋の盛衰 宋の武帝は在帝三年で崩じ、廢帝義符を経て文帝が位を嗣いだ。帝の世の

二十餘年間は稍小康を得たが、魏を征して大敗し、江北の地を失ふに及んで國政が大に衰へた。會、太子邵は過失多く、數々帝に詰責せられたから、遂に帝を廢して自立した。そこで邵の弟駿が兵を擧げて邵を討ち、宋人に擁せられて位に即いた。之を世祖孝武帝といひ、邵は戰敗れて誅せられた。孝武は在位十一年で崩じ、太子子業が立ち、骨肉を疎忌し、恣に不道を行つたから、弑せられて太宋明帝が立つた。帝も亦孝武の子十餘人を殺したが、會、疾に寝ね、太子の幼弱なるを以て、深く諸弟を忌みて盡く之を殺し、獨り休範は凡庸であつたので、免れて司空と爲り、褚淵・袁粲・沉攸之等と並び用ゐられたが、淵は蕭道成を薦めて右衛將軍と爲し、共に樞機を掌つた。明帝が崩じて太子昱立ち、年十歳であつた。此の時休範は兵を擧げて反し、建康に逼つたが、蕭道成が之を斬つて亂は平いだ。帝昱は驕恣であつて殺を嗜み、一日人を殺さなければ心が慘然として樂まなかつたので、中外惶懼した。そこで道成は遂に昱を弑して、昱の弟準を立てた。是を順帝となす。既にして道成は相國齊公と爲り、九錫を加へ爵を進めて王と爲り、遂に順帝に迫りて位を禪らしめた。是を齊の太祖高帝といふ。順帝は位を齊に禪るに當り、泣いて指を弾じて曰く、「願はくは後身世々復た天子の家に生るゝ勿れ」と。齊人之を殺し其の族を滅した。かくて宋は凡そ八帝六十年にして亡びた。



宋の世系

○宋の世系



齊の變遷

齊の變遷

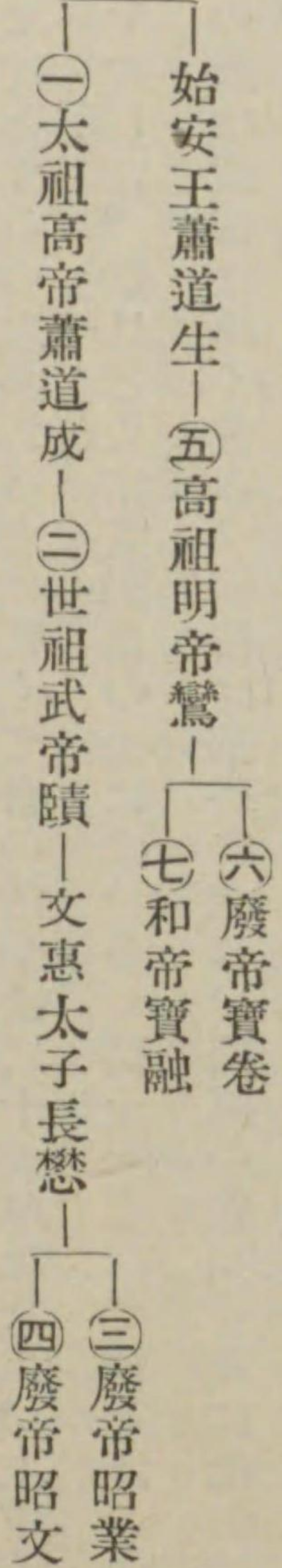
齊の太祖高帝は、在位四年で崩じ、武帝が立つて在位十一年で崩じた。ついで大孫昭業が立つて狂昏であつたが、在位一年で弑せられ、弟昭文(廢帝)を経て明帝に至つた。明帝は高帝の兄の子である。即位の後、高武の子孫が己に善くないので悉く之を族誅し、殆ど遺類なからしめ、以て宗室の安全を圖つたが、在位四年で崩じ、太子寶卷が立つた。寶卷は昏淫兇恣、頗る嬖倖を親信し、屢、大臣を殺し、殘虐甚しかつたから、大尉陳顯達が先づ兵を擧げ、建康を襲つて敗死し、次いで將軍崔慧景も亦叛いて建康に逼つた。よつて豫州(今の安豫州)の刺史蕭懿は兵を將ゐて慧景を平らげ、功を以て尙書令と爲つた。懿の弟衍は英達で、器畧が有り、時に雍州(今の北襄陽)の刺史であつたが、齊の國運の日に非なるを觀て、密かに驍勇を招聚して武備を修め、以て時機の到るを待つたが、今や齊國の將に亂れんとするのを知り、兄懿に勸めて大に爲す所有らんとしたが、懿は用ゐることが出来ず、却つて寶卷の爲めに死を賜はつたから、衍は遂に意を決し、兵を率ゐて東下し、寶卷の弟寶融を奉じて江陵に至り、立て、帝とした。之を和帝といふ。帝は衍を以て諸軍

齊亡ぶ

梁の高祖武帝

齊の世系

○齊の世系



後魏の極盛

後魏の極盛

後魏の太武帝は勇略の資を以て、江北を統一し、柔然を擊破し、高句麗を入貢せしめ、鄴善・龜茲・焉耆等を威服し、又屢、宋軍を擊破し、遂に宋をして江北恢復の念を絶たしむるに至り、大に國威を輝かしたが、晩年に至つて其の下に弑せられ、嫡孫文成帝を経て其の子獻文帝が立つた。帝は聰睿夙成剛毅果斷であつたが、黃老佛陀の學を好み、常に遁世の心があつた。時に嫡母馮太后は猜忍多智であつたから、獻文は之を畏れ、位を太子宏に譲り、自ら太上皇帝と稱した。宏は生れて五歳是を高祖孝文帝といふ。帝は幼少であつたので、太上が仍ほ政を聽いたが、會事を以て太后の嬖幸する所



孝文帝

の李奕といふ者を誅したので、太后は怒つて太上を鳩殺し、朝に臨んで制を稱した。後魏はもと狄夷より起つたから、専ら刑殺を以て政を爲し、歴代刑罰濫酷を極めたが、太武は崔浩に命じて律令を更定し、中書に詔して經義を以て疑獄を決せしめ、獻文も亦刑獄を慎み、次いで孝文が政を親らするに及び、専ら文治を尙び、威刑に任せなかつたから、刑戮は稍減するに至つた。孝文は性至孝恭儉で學を好み、能く馮太后の志に順つたが、后が崩じて後は、親ら政事に精勤して日夕倦まず、戸籍を制し禮樂を定め、常に國俗の陋を惡み、都を洛陽に遷し、胡服胡語を禁じ、深く中國の文化を慕ひ、以て三代の隆盛に比せんとするの志があつた。斯くて帝の治平は二十九年に及び、上下蔚然として太平の風をなした。然れども宗室勳舊の士には、多く舊土を慕ひて反を謀る者もあり、加之南遷の後は武備は漸く弛み、風俗は華奢に流れ、國運の衰頹も實に此の時に始つた。

後魏の分裂

後魏の分裂 魏にては孝文帝崩じ(魏の太和二十三年我紀元千五百五十九年)て其の子宣武帝が嗣いだ、宗室を疏忌し、嬖臣が權を擅にしたから、國政は漸く亂れた。帝が崩じて子孝明帝が立つて六歳であつたから、母胡氏が太后となつて制を稱した。時に將軍張彝の子仲瑀は上書して武人を排抑したから、羽林(天上に在る大將軍の星轉じて近衛兵の事)虎賁(帝王護衛の周の官名轉じて勇猛なる軍隊)等約千人が相率ゐて尙書省に至りて詬罵し、彝父子を捕へ毆打して火中に投じ、浪藉を極めた。然るに太

高歡

后は其の元凶八人を斬り、餘は大赦して問ふ所が無かつた。時に懷朔鎮(内蒙古烏喇特旗の東北に在り)の函使(手紙を持ち來る使者)に高歡といふ者があつた、常に任俠を以て郷黨に長となつたが、會、洛陽に至りて張彝の死を見、家に還りて財を傾け客に結んで曰く、宿衛が相率ゐて大臣の邸を焚いても、朝廷は畏れて問ふ所が無い。此の如くんば國事は知るべきで、財物豈に守るに足らうやと。當時胡太后が朝に臨み、寵臣が事を以て、綱紀は頽敗し、盜賊は諸所に蜂起した。帝また漸く長じ、太后の爲す所を見て甚だ喜ばず、母子の嫌隙は日に深くなつたが、太后は遂に帝を毒殺して益々威權を擅にした。時に秀容(故城は山西朔州の北境に在り)の會長に爾朱榮といふ者があつた。曩に賊を討じて功を立て、六州(并、肆、汾、唐、恒、雲、皆今の山西省に在り)の大都督と爲り、兵を擁して晉陽に在つたが、高歡は榮に歡むるに、兵を擧げて君側を清むるを以てしたから、榮は即ち大擧して河陽(縣名、今の河南孟縣)に至り、孝莊帝を擁立し、胡太后を捕へて河に投じ、王公以下二千餘人を殺して晉陽に還り、自ら大丞相と爲つた。會、梁兵が此の内亂に乗じて洛陽に侵入し、莊帝は河内に出奔したから、榮は兵を以て梁兵を破り、莊帝は再び洛陽に歸り、榮に天柱大將軍を加へた。然るに榮は、擁立の功を恃んで不臣の志を蓄へたから、帝は之を惡み、榮の入朝を待つて親ら之を刺殺した。是に於て榮の從弟世隆は、榮の弟兆と共に洛陽に入り、莊帝を執へて晉陽に還り、之を弑し

榮爾朱



て孝文帝の姪閔帝を立てた。時に高歡は、北邊の六鎮(武川、撫冥、懷朔、懷荒、柔玄)を統べて長城外に在つたが、此の機に乗じて兵を起して鄴に據り、爾朱氏を撃つて之を破り、洛陽に入りて節閔帝を廢し、更に孝武帝を立て、自ら大丞相と爲り、府を晉陽に建て、之に居つた。時に鮮卑の族に宇文泰といふ者があり、關西二十州の都督賀拔岳の部下に屬して夏州(今の陝西榆林及び内蒙古鄂爾多斯の地)に鎮したが、岳が秦州の刺史の爲めに殺さるゝに及び、兵を擧げて秦州の刺史を誅し、悉く秦隴の地を定めたから、孝武は即ち泰を以て關西の大都督とした。時に高歡の勢は朝廷を傾けたから、孝武帝は之を畏れて密かに之を討たんことを謀り、書を下して其の罪惡を數へ、宇文泰をして來り迎へしめた。是に於て高歡は兵を擁して洛陽に向ひ、帝は長安に奔りて泰に依り、泰を拜して大丞相と爲した。歡は帝を追つて室關を取り、華陰に至つたが及ばないで、兵を還して洛陽に至つて孝靜帝を立てた。是に於て後魏は道武帝より十代百四十九年で東西に分裂するに至つた。時に皇紀千九百九十四年で、史に之を東魏・西魏といふのである。然れども其の實は高歡・宇文泰二氏の割據であつて、魏室は只其の空名を存するに過ぎなかつた。

梁の治亂

梁の治亂 梁の武帝蕭衍は、孝慈恭儉、且つ博學能文であつた。常に政務に努め、身を持することが頗る儉で、且つ篤く佛法を信じ、屢、身を佛寺に捨て、自ら三寶の奴と

稱し、又刑法を簡にして、優假甚だ過ぎたから、姦吏は權を擅にし、牧守は多く百姓を侵害した。されば在位四十八年の間、江南久しく無事であつたが、武備は廢弛し、偶、侯景の亂が起るに及んでは、舉朝震駭して爲す所を知らず、帝景は佯られて之と盟ひ、遂に景の制する所と爲り、憂憤疾を成して崩じた。子簡文帝が嗣いだが、ただ制を景に受くるのみ、在位二年で景は之を廢し、次いで弑し、遂に自ら漢帝と稱した。時に西魏は巴蜀を畧し、東魏は江淮を取り、梁の領域は日に蹙つた。是の時武帝の子湘東王繹は江陵に、其の弟邵陵王綸は江夏(郡名、今の湖北武昌)に、武帝の孫岳陽王詧は襄陽に據りて、互に相攻伐し、梁國は大に亂れた。會、始興(郡名、今の廣東韶州)の大守陳霸先といふ者が、兵を起て侯景を討ち、繹も又王僧辨をして景を伐たしめたから、二將は力を合はせて景を攻め、景は篡立數月にして敗れ、東走して海に入らんと欲し、其の部下に殺された。繹はよりて江陵に即位した。之を世祖孝文帝といふ。既にして西魏の宇文泰は、于謹を遣して梁を討ち、江陵を陥れたから、元帝は古今の圖書十四萬卷を焼き、寶劍を以て柱を撃ち之を折り、歎じて曰く、文武の道は今夜盡いたと。乃ち出で降り、尋いで殺された。西魏は即ち詧を立てて梁帝とした。是を中宗宣帝といひ、臣を魏に稱した。史家は之を後梁といふ。時に王僧辨、陳霸先は、元帝の子蕭方智を奉じ立てたが、會、北齊の文宣帝は蕭淵明を立て、

陳霸先

後梁

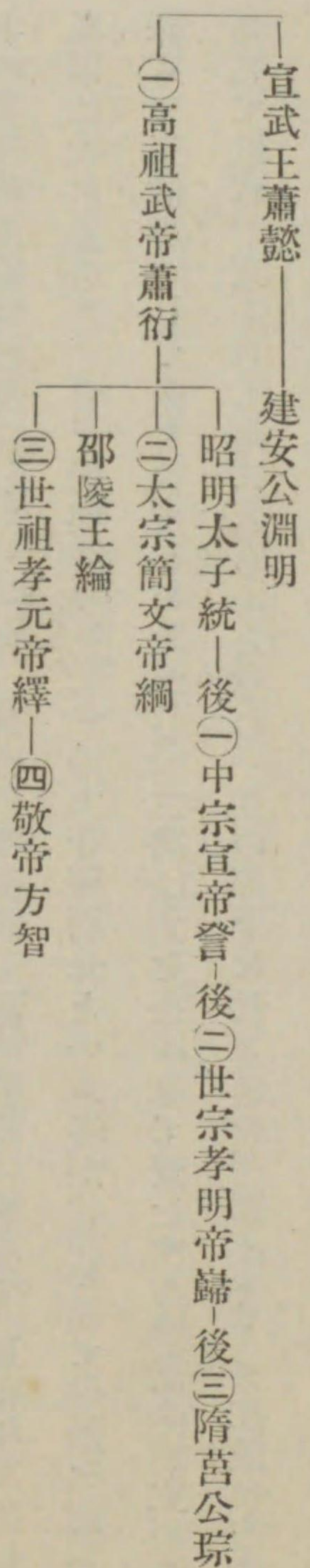


陳の高祖武帝  
梁亡ぶ

梁王としたから、王僧辨は之を迎へ、奉じて建康に歸り、方智を以て太子と爲した。是に於て霸先は怒つて僧辨を殺し、淵明を廢して方智を立てた。是を敬帝といふ。霸先は丞相と爲り、尋いで相國陳公と爲り、遂に位を篡つて國を陳と號した。是を陳の高祖武帝といふ。かくて、梁は凡四世五十六年にして亡びた。

梁の世系

○梁の世系



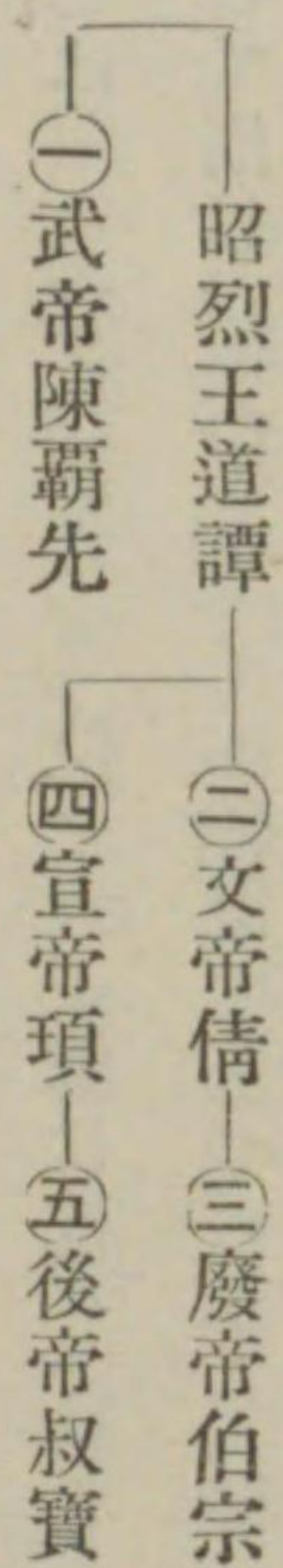
陳 陳は武帝陳霸先の建國せるもの。始め梁の簡文帝立つや、其の臣侯景は權を專にし、連りに廢立を謀つたので、霸先は王僧辨等と兵を起して景を討つて功を立てた。次いで元帝を経て敬帝の時に、霸先は擁立の功を以て相國陳公と爲り、遂に國を篡つて陳國と號した。之が高祖武帝である。武帝は在位二年で崩じ兄の子文帝立ち、在位七年で崩じ、太子伯宗が立つた。宗伯は在位二年で叔父安成王が之を廢して自立した。之を宣帝となす。宣帝は在位十四年で崩じ、太子叔寶が立ち、佚遊に耽り、政刑は紊亂し、文武解體したので、隋の文帝は開皇八年詔を下して五十萬の兵を發して八道より進ましめ

陳

陳亡ぶ

た。叔寶は之を聞いて、王氣此に在り、彼れ何するものと曰ひ、又尙書孔範は長江は天險であるから、虜軍豈渡るを得んや、若し渡らば臣の太尉公は期して待つべきであると侮つた。蓋範は、常に自ら文武の才能は舉朝已れに及ぶ者無しと自負せるを以て、敢て大言せるのである。翌年隋軍江を濟り沿江の諸軍は風を望んで盡く走り、建康は忽ち陥り、叔寶は自ら井に投じ、陳は亡びた。陳は帝を稱すること五世、凡そ三十二年。斯くて晉の元帝が南渡してから、江東相承くること五代(東晉、宋、齊、梁、陳)、二百七十三年で北朝に弁せられ、漢土は復た一に歸した。

○陳の世系



北齊  
東魏亡ぶ

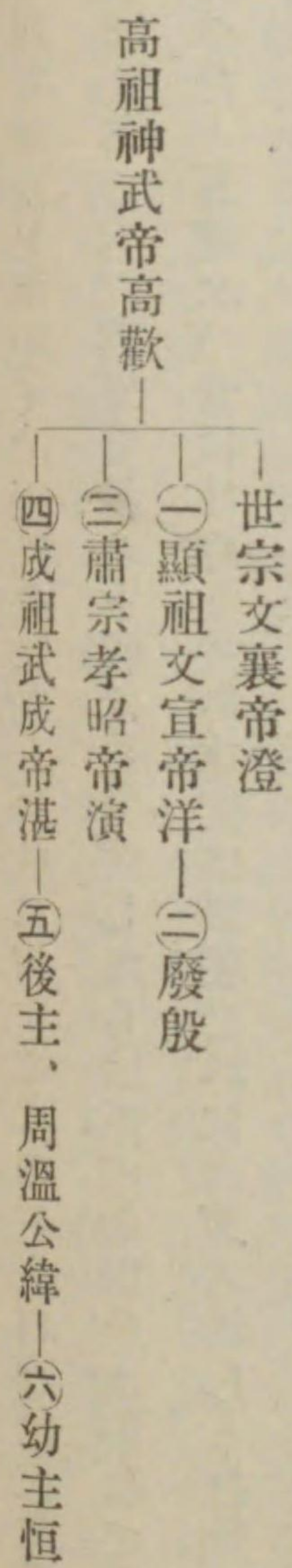
北齊 北齊は東魏の高歡の子、洋の建國せしところである。初め高歡が死んで、世子澄が大將軍と爲りて政を執り、陰かに禪を受けんことを謀つたが、其の部下に殺され、弟洋は自ら丞相齊王と爲り、靜帝に逼つて位を禪らしめ、尋いで之を殺した。是に於て東魏は亡び、洋は齊帝と稱した。是を顯祖文宣帝といふ。史には之を北齊と謂ひ、以て蕭齊と別つのである。かくて東魏は僅に一代十七年で亡びた。宣帝は即位の初め政に



勵んだから一時内外肅然としたが、後漸く功に矜り、酒を嗜むこと甚しく、淫泆狂暴の行が多く、醉ふ毎に手づから人を殺して以て戯樂となし、諸王大臣の罪無くして殺さるる者が多く、又魏の宗室二十五家を夷滅し、七百餘人を收めて盡く之を殺し、屍を漳水に投ぜしめた。既にして文宣帝崩じ太子殷が立つたが、間もなく叔父常王山演が殷を廢して自立し、高昭帝となつた。孝昭崩じ弟湛が立ち、是を武成帝といふ。武成は淫虐なることは、文宣に譲らず、位を太子緯に傳へ、自ら太上皇帝と稱し、尙大政を執つたが、既にして崩じ、緯が立ちて亦昏亂であつたから、嬖倖が事を用ゐ、齊の國政は愈々紊れた。時に陳の宣帝は將を遣はして齊を撃ち、沿淮諸軍を取つたが、周の武帝も齊國が亂ると聞いて、自ら將として東伐し、平陽を取り晉陽を陥れ、遂に齊の都鄴を圍んだ。是に於て齊帝高緯は位を太子恒に傳へて出奔したが、後捕へられ、其の一族と共に弑せられた。かくて齊は六世二十八年にして亡んだ。

北齊の世系

○北齊の世系



北周

北周 初め鮮卑の宇文部の後胤宇文泰は、魏の孝莊帝に事へたが、帝は其の才を愛して統軍と爲した。次いで孝武帝の時に夏州の鎮と爲り、悉く秦隴を定め、功を以て關西の大都督と爲つた。時に高歡は、六鎮を統べて大丞相と爲り、府を晉陽に建て、頗る勢を振つたから、孝武は之を畏れ、晉陽を伐たんとして却つて歡に追はれ、長安に奔つて泰に依つた。歡は因りて孝靜帝を立て、魏は東西に分裂した。既にして孝武帝は、長安に居ること半歳にして、又泰と隙を生じ、醜に遇うて崩じ泰は文帝を立て、尋いで、又之を廢して恭帝を立てた。泰は、儒を崇び古を好み、名臣蘇綽を擧げて之に國政を委ね、自ら大師となりて政權を執つたから、文帝・恭帝は徒らに虚位を擁するのみであつた。既にして泰は、師を出して梁を撃ち、元帝を降し、梁王詡を江陵に立て、國を後梁と稱して西魏の節度を受けしめた。泰は太師大家宰と爲りて卒し、世子覺が職を襲ぎ、周公に封ぜられた。時に年十五であつたから、從兄宇文護の輔を得、遂に恭帝の禪を受け、國を周と號した。魏は道武帝より是に至る迄十四世、凡そ百五十九年、西魏の孝武帝より四世二十四年にして滅びた。時に皇紀千二百十七年である。既にして周王覺は護の專權を惡み、密かに之を除かんことを謀つたから、護は廢して之を弑し、同族明帝を立てたが、帝は明敏にして識量があつたから、護は又之を廢して高祖武帝を立てた。武帝は深沈

周と號す

魏亡ぶ

高祖武帝



北齊を滅す

で遠識があつた。晋公護が太祖の顧託を受けて政を乗ること十有六年に及び、諸子や僚屬が威福を擅にし、貪殘恣横なるを知つたから、帝は深く自ら晦カウまして關預する所が無かつたが、遂に謀を用ひて護を殺し、初めて政を親らした。帝は儒學を重じ、道佛二教を禁じ、諸淫祠を毀ち、政治嚴明であつたから、世稱して賢主とした。時に北齊が亂れたから、武帝は自ら將として鄴を圍み、齊帝高緯を捕へ殺して北齊を滅ぼした。武帝在位十七年にして崩じ、太子贊立ち、是を宣帝といふ。楊堅の女を立て、皇后と爲し、堅を大司馬とした。宣帝は淫戯度無く、立ちて未だ一年ならざるに、位を太子闡センに傳へた。是を靜帝と爲す。帝は幼冲であるから、堅が自ら大丞相と爲り、相國隋王に進み、尋いで禪を受けた。周は凡そ五世二十五年にして亡び、隋王帝と稱し、是を高祖文帝といふ。

北周亡ぶ  
隋の高祖文帝  
北周の世系

○北周の世系

- 孝閔帝覺
- 世宗明帝毓
- 太祖文帝泰
- 高祖武帝邕
- 宣帝贊
- 靜帝闡

劉裕

○劉裕 宋の第一世。字は德輿、彭城(縣名、沛郡治、今の江蘇徐州)の人。東晉孝安帝の時劉牢之の參軍となつた。嘗て賊數千人に遇つて之と戦ひ、從者は皆死んだが、裕は獨り長刀を奮つて之を驅り、衆兵乗じて大に之を破つた事があるが、是に由りて名を知られた。是より晉の將相たること

二十餘年、桓玄を誅し、南燕後秦を滅し、義熙十四年(皇紀一〇七八年)に宋公と爲り九錫を加へた。次いで人をして安帝を縊らしめ、恭帝を迎立したが、元熙元年(皇紀一〇七九年)に爵を進めて王と爲り、明年建康に至りて禪を受けた。之を宋の高祖武帝と爲す。かくて晉は十五帝、百五十六年にして亡びた。

拓跋珪

○拓跋珪

(道武帝)魏第一世。代主什翼犍シヨウヨクケンの孫である。珪は初め代の劉庫仁に依つたが、庫仁は人に殺され、其の子の顯が立つて珪を殺さんとしたから、珪は奔つて賀蘭部に赴き、其の舅に依つた。然るに諸部の大人が珪を推して代王としたから、よりて遷つて盛樂(今の山西省歸化城の南)に居り、國號を改めて魏と稱し、師を燕主慕容垂に請ひ、劉顯を討ちて之を走らせ、又北に向つて柔然を討つた。柔然は世々代に服したが、代が亡びて當時は河西の劉衛辰に屬したので、衛辰は即ち兵九萬を發して珪を攻めたが、大敗して走死し、其の子勃勃(後の赫連勃勃)は逃れて後秦に奔つた。慕容垂は、魏が強大となつて燕に逼らんことを憂ひ、太子寶を遣はし之を撃つて大敗した。垂殂して寶が立つや、珪は大舉して燕を撃つて中山を圍んだので寶は出で、龍城に奔つた。是に於て垂の弟范陽王德は、滑臺(城名、河南滑縣に在り)に據りて燕王と稱した。之を南燕といふ。魏王珪は已に燕に勝ち、都を平城(今の山西省平陽)に遷し、宗廟社稷を建て帝位に即いた。之を魏の太祖道武帝といふ。時に晉の隆安二年(魏の天興元年、皇紀一〇五八年)である。史には之を後魏といつて三國の曹魏と別つのである。道武は立つて宮室を營み、官制律令を定め、大に政治に勵んだが、方士



の説に惑ひ、寒食散を服し、藥の爲めに病を發し、躁怒常無く、屢人を手刃し、又内行も修まらずして、遂に其の子清河(郡名、今の山東東昌)王紹に弑せられた。道子齊王嗣、紹を誅して立ち、是を太宗明元帝と爲す。

崔浩

○崔浩 字は伯淵。武城(今の山東省武城縣)の人。經術に精しく、老莊及び佛法を排斥した。魏の明元帝の時より仕へ、太武帝の時司空となつた。宋の元嘉六年(皇紀一〇八九年)には功を以て撫軍大將軍となつた。帝嘗て浩を屬國の渠師に示して曰く、此の人は纖弱であつて弓を引くことも出来ないが、胸中の懐く所は乃ち兵甲に過ぎて居る。朕の武功は皆此の人の教ふる所であると。後命を受けて律令を更定し國史を修めた。浩は又帝に奏して、僧侶を誅し佛像經論を毀たしめた。浩は太武帝の信任が厚きに及んで朝權を恣にし、其の國史を修むるや、先世の事を書して皆實を詳にし、其の文を石に刻して之を衢路に立て、以て直筆を彰はしたが、北人が之を見て憤恚して、浩は國惡を暴揚すと讃したから、太武帝は大に怒り、元嘉二十七年(皇紀一一一〇年)遂に浩を誅して其の族を夷した。

王導

○王導 字は茂弘。大中大夫王覽の孫である。少くして風鑒があり、識量清遠であつた。東晉の元帝の琅琊王たりし時、帝に勸めて克己勵節せしめたに因りて情好日に厚く、朝野皆倚仗し、號して仲父と稱した。帝嘗て導に謂つて曰く、卿は吾が蕭何であると。未だ幾ばくもなくして驃騎大將軍に拜せられ、群從子弟が皆顯要に布列した。時に導の從兄王敦は鎮東大將軍となり、功を恃んで驕

蕭道成

恣であつたが、帝は畏れて之を惡み、劉隗刁協等を引いて腹心となし、王氏の權を抑損したから敦は遂に反して兵を武昌(今の武昌)に擧げた。そこで導は宗族を率ゐ、每旦臺(城名、南京城の西北に在り)に詣りて罪を待つたが、帝召して導を見るに、導稽首して曰く、亂臣賊子は何れの代にか盡きることは無いが、けれども今日近く臣が族に出でんとは意はなかつたと。帝其の手を執つて曰く、茂弘方に卿に寄するに百里の命を以てすと、即ち前鋒大都督とした。次いで元帝崩じ、太子が立つた。之を肅宗明帝となす。時に敦は位を篡はんと謀つたから、明帝は導を大都督に拜して敦を討たしめた。會、敦病篤く次いで死んだので、有司が奏して王氏は當に名を除くべしと曰ふたが、帝曰く、司徒導は大義を以て親を滅したから將さに百世之を宥さんとして悉く問ふ所が無かつた。明帝は在位三年にして崩じ太子衍立ち、之を顯宗成帝と爲す。王導中書令となり、咸康四年丞相となり翌年歿した。(皇紀九九九年)。導簡素寡慾、倉に積儲無く、衣は帛を重ねず、元・明・成の三帝を輔佐して將相となつた。晉の中興せるは導の功が蓋多きに居るといはれた。歿するに及びて文獻と謚した。

○蕭道成 (太祖高皇帝)齊第一世。字は紹伯。蘭陵(今の山東省嶧縣)の人。漢の相國蕭何の後と稱す。博學にして文を善くした。宋の明帝の時、召されて黃門侍郎となつたが、内に入るを欲せず、人をして魏の邊境を侵さしめ、以て魏の入寇を招き、因つて命ぜられて淮陰に鎮した。常に豪傑を收養し、賓客頗る盛であつた。已にして南兗州の刺史となり、右衛將軍となり、顧命の大臣と共に機事を掌つた。明帝崩じ、後廢帝立ち、驕恣にして殺を嗜み、中外憂惶したので、道成は即ち哀



粲・褚淵等と廢立を謀り粲は可なかつたが淵は之を賛けたから、道成は遂に帝を弑し、順帝を立てた。粲即ち道成を誅せんと謀つたが、褚淵が其の謀を道成に告げたから、道成乃ち粲父子を石頭城に殺した。そこで百姓共が之を哀んで曰く、「憐む可し石頭城。寧ろ袁粲が死を爲すとも、褚淵が生を作さず」と。沉攸之チンキウシも亦兵を江陵に擧げ、道成を討ち軍潰れ走りて縊死した。道成相國齊公と爲り、九錫を加へ、尋いで爵を進めて王と爲つた。順帝は在位二年で位を齊に禪つたが、泣いて指を弾じて曰く、願はくは後身世世復た天王の家に生るゝ勿れと。齊人之を殺して其の族を亡した。かくて宋は八帝六十年にして亡んだ。(皇紀一三三九年)道成帝を稱し國を齊と號した。之を太祖高帝とす。在位四年にして崩じ、太子願立つ之を世祖武帝となす。

○蕭衍ヤウエン

(高祖武帝)梁第一世。蘭陵の人、齊の疏族である。母、張氏、菖蒲花を生ずるを見(傍人は皆見ず)て之を呑み、已にして衍を生んだ。衍は英達であつて文學があり、雍州(今の湖北襄陽府)の刺史と爲り、襄陽に鎮した。齊の將さに亂れんとするを知り、密に武備を修め驍勇を招聚し、遂に兵を起して東下し、進んで建康を圍み、自ら相國梁公と爲り、九錫を加へ、尋いで爵を進めて王と爲つた。そこで齊の和帝は位を梁に讓つた。在位僅に一年。梁人が之を殺した。齊は凡七帝、二十四年で亡びた。時に天監元年(皇紀一六二年)であつた。梁の武帝は孝慈恭儉、博學能文、よく政務に勤め、早起して事を視た。身に布衣を着け、一冠三年、深く佛法を崇拜し、長齋魚肉を斷ち、日に一食に止め、惟だ菜羹麩飯のみで、屢身を佛寺に捨て、自ら三寶の奴と稱した。又

蕭衍

刑法を疎簡にし優假甚だ過ぎたから、姦吏權を恣にして法を弄び、牧守多く百姓を侵漁した。在位四十八年江南久しく事無く、武備は却つて廢弛した。會、魏の侯景が伴つて和を求め、之を信じ、之と同盟し、景を大丞相と爲したが、却つて景に制せられ、飲膳も裁損せらるゝに至り憂憤病を成して崩するに至つた。

侯景の亂

○侯景の亂

梁の四十六年(皇紀一〇二七年)東魏の高歡が病篤く、世子澄に謂つて曰く、侯景は飛揚跋扈の志を有つて居り、汝の能く駕御する所でないが、只之に敵するに足る者は慕容紹宗のみである。時に景は河南を鎮する事十餘年、素より澄を輕んじたから、今や歡の卒するに及んで、景乃ち河南十三州を擧げて東魏に背いて梁に附いた。時に梁にては、曩に東魏と和して邊疆無事であつたから、群臣敢て其の叛臣を納るゝを欲せなかつたが、武帝は嬖臣朱昱の勧めに従つて之を納れ、景を封じて河南王と爲し、別に兄の子蕭淵明を將とし、諸軍を督して東魏を討たしめた。高澄乃ち慕容紹宗を遣はし、拒戦して大に梁軍を破り、淵明を擒にし、遂に景を討つた。景南走し梁の壽陽を取りて之に據つたから、梁は、よりにて景を南豫州の牧とした。既にして高澄は梁と和して景を離間したから、景は遂に梁に叛き、兵を引いて江を渡り建康を襲うた。梁の武帝は、深く佛法を信じ、自ら三寶の奴と稱し、刑辟頗る簡疎であつたから、在位四十八年、江南久しく無事にして、上下豪華を競ひ武事全く弛廢したから、景が臺城に逼るに及んで、公私震駭して爲す所を知らず。諸王の援軍が外より至つたが、皆景軍に敗られて如何ともすることが出来ない。既にして景は伴つて和を



求めたから、武帝之を信じ、人を遣はして景と盟ひ、以て大丞相とした。景乃ち攻めて臺城を陥れ、兵士等縦まゝに入りて乘輿服御宮人を掠めて餘す所無く、帝も亦景の爲めに制せられ、飲膳に至るまで減抑せられ、遂に憂憤疾を成して崩じ、太子簡文帝が立つた。是より先、景の臺城に逼るや、梁の宗族は並び起つて景を討たんとし、湘東王繹は江陵に、邵陵王綸は江夏に、岳陽王譽は襄陽に兵を擧げたが、而かも骨肉相和せず。譽は繹に攻められて西魏に援を求め、綸も齊に奔つたが、後また魏兵に殺された。斯かる間に、侯景は簡文帝を廢して之を殺し、豫章王棟を立て、已にしてまた之を廢し、遂に自ら漢帝と稱した。時に始興の太守陳霸先が、兵を起して景を討じ、進んで江州を取つたから、繹乃ち以て刺史となし、又王僧辨を遣はし、陳霸先と共に兵を率ゐて景を討たしめた。景篡立すること數月であつたが、遂に僧辨、霸先の爲めに敗られ、東走して海に入らんとしたが、其の部下に殺され、其の屍は建康に送られた。僧辨乃ち其の首を江陵に、其の手を齊に送り、屍を市に暴したが、士民争ひ取りて之を食ひ、骨を並せて皆食ひ盡したといふ。

孝元皇帝

○孝元皇帝 梁第三世。魏の宇文泰が兵を遣はして梁を撃ち江陵に入らしめた時、元帝は古今の圖書十四萬卷を焚き、寶劍を以て柱を撃ち之を折つて歎じて曰く、文武の道今夜盡きたりと、乃ち出て降つた。或人書を焚くは何の意かと問ふに、帝曰はく、書萬卷を讀むも猶今日有りと、尋いで殺された。

陳霸先

○陳霸先 (高祖武帝) 陳第一世。姓は陳、名は霸先、吳興の人。梁の武帝の時に廣州の參軍に任

ぜられ、功を以て將軍と爲り、尋いで交州の司馬、西江の都護、高要の太守と爲り、屢寇亂を平らげた。侯景が叛して自ら帝を稱した時、霸先は始興(郡名。湘州に屬す。今の廣市韶州)の太守であつたが、先づ兵を興して景を討じ、王僧辨と力を合せて景を誅した。紹泰元年に霸先は又僧辨を殺し、元帝を廢して敬帝を立てた。霸先丞相と爲り、尋いで相國陳公と爲り、遂に位を篡ひ、陳帝と稱した。かくて梁は四世五十六年にして亡びた。時に皇紀一二一七年である。

孝文皇帝

○孝文皇帝 北魏の大武帝崩じ、文成獻文の二世を経て、孝文帝が即位した(宋の泰始七年。皇紀

一一三一年)。帝は性至孝、馮太后に事へ能く其の志に順うたが後の崩するや、帝は哀悼禮に過ぎ及んだが、大臣が固く諫むるに因りて乃ち止むことを得た。けれども帝は初めより少しも憾む所が無かつた。又宦者が帝を後に譖する者があつて、后帝を杖つこと數十なるも、帝は默然として之を受けた。后崩するに及びて帝は復た追問せなかつた。帝恭儉學を好み、政治に勤めて日夕倦まず、禮樂を定め、文教を興し、民田を均し、戶籍を制し、老を明堂に養ひ、親ら藉田に耕し、凡、先王の禮制、儒書に述ぶる所は行はざるなく、世其の太平の風あるを稱した。帝又國俗の陋を惡み、都を遷して舊風を改めんと欲し、洛陽を營みて此所に遷り、胡服、胡語を禁じ、宗族近臣の漢の名族と結婚することを獎勵した。蓋、帝は文學に秀で、深く中國の風俗を慕ひ、文治を興して以て三代の隆盛に比せんと欲し、北偏の地に僻處するを欲しなかつたに因るのである。然れども南遷の後



高歡

武事漸く弛み、華奢風をなし、國勢が次第に衰運に向ふに至つた。

○高歡カウカン (神武皇帝)字は賀六渾。渤海の人である。初め魏に事へて懷朔鎮ウヰツウ(内蒙古烏刺忒旗の東北に在り)の函使となつた。歡は先世より北邊に徙り、遂に鮮卑の俗を習ひ、沈深にして大志有り、侯景等と友とし善く、常に任俠を以て郷里に雄となつた。會、胡太后が朝に臨み、内嬖事を用ひ、政刑は縱弛し、盜賊は蜂起するして、封疆が日に蹙つた。時に秀谷ウヰツウ(故城。山西朔縣の北境に在り)の酋長爾朱榮は六州の大都督であつたが、高歡は榮に見えて、兵を擧げて君側を清むるを勧めたので、梁の大連二年に榮は即ち兵を擧げて河陽(縣名。河内郡に屬す。今の河南孟縣)に至り、孝莊帝を立て、王公以下二千餘人を殺して晉陽に還つた。そこで莊帝は榮に天柱大將軍を加へたが、時に榮は不臣の志を蓄へたから、帝は陰に之を誅せんと謀り、榮の入朝した時、帝手づから之を刺し殺した。榮の從弟世隆は、又莊帝を弑し、高歡をして六鎮を統べしめ、節閔帝を立てた。歡はよつて兵を起し一鄴に據り、爾朱氏を撃つて之を破り、洛に入り孝武帝を立て、歡自ら大丞相と爲り、府を晉陽に建て、之に居つた。帝は歡を畏れ晉陽を伐たんことを謀つたが、歡が先づ兵を擁して來たから帝は長安に奔つた。そこで歡は帝を追つたが及ばなかつたので、即ち孝靜帝を洛陽に立て鄴に遷つた。魏は此れより分れて東西二國と爲つた。斯くて東魏の政治は皆歡に決したが、大清元年(皇紀二二〇七年)病歿した。其の子、洋、東魏を篡ひて帝となるに及び、歡を尊んで高祖神武皇帝とした。

宇文泰

○宇文泰ウヰンタイ

(太祖文皇帝)姓は宇文名は泰。鮮卑の宇文部の後裔であるので姓を宇文というた。初め秀容(今の山西朔平府)の酋長爾朱榮に擧げられて統軍となつた。魏の孝武帝の時に、夏州(今の陝西榆林及蒙古鄂爾多斯の地)の地が邊を蒙つて重要なを以て、宇文泰をして之を鎮せしめた。泰悉く秦隴を定め、功を以て關西大都督となつた。時に孝武帝は高歡を恐れ、之を伐たんと謀り、却つて歡に追はれ、長安に奔りて泰に依り、泰を拜して大丞相とした。是に於て歡は別に孝靜帝を立て、魏は之より分れて東西の二國となつた。孝武帝は長安に居ること二年にして泰と隙を生じたので、泰は之を弑して文帝を立てた。文帝崩じ、泰は更に太子欽(廢帝)を立て、自ら都督中外諸軍事を加へたが、帝が泰を誅せんとする志の有るを知り、之を廢して恭帝を立てた。泰常に儒を崇び古を好み、嘗て名臣蘇綽ソツツツを擧げて尙書としたが、綽は性忠儉で民を濟スふを以て己が任となし、泰も心を推して之に任じたから、改良制定する所頗多かつた。即ち戶籍計帳の法を制し、又六條の詔書(一)に曰く心を清くす。二に曰く教化を敦くす。三に曰く地利を盡す。四に曰く賢良を推す。五に曰く獄訟を恤む。六に曰く賦役を均うす。を爲り、百官有司をして之を習誦せしめた。又新制三十六條を頒ち、刺史守令をして之に依らしめたから、民は皆之を便とした。既にして綽が死んだが、泰群公と歩して葬を送り、酒を酌いて言ふて曰く、爾吾が心を知り、吾も爾の心を知り、與に共に天下を定めた。然るに今は遽ユヰカに吾を捨て、去ると、聲を擧げて慟哭し、扨の手より落つるを覺えなかつた。斯くて恭帝の三年(皇紀二二一六年)に泰は太師大冢宰と爲り、是歲卒した。世子覺が



職を襲ぎて周公に封ぜられ、禪を受けて帝位に即くに及び、秦を追尊して太祖文皇帝となした。魏帝を封じて宋公と爲し、尋いで之を殺した。魏は道武の帝を稱してより是に至るまで、凡そ十四世、百五十九年にして亡びた。

蘇綽

○蘇綽

武功(今の陝西省乾縣)の人。西魏の宇文泰に擧げられて尙書と爲つた。綽性忠儉にして民を濟ふを以て己が任と爲し、泰は心を推して之に任じた。始めて戶籍計帳の法を定めたが、後人多く之を遵用して居る。又六條の詔書を作り百官をして之を習誦せしめ、新制三十六條を頒ち刺史守令をして之に依らしめ、百姓も亦之を便とした。晋代より文章が頗る浮華となつたので、泰は其の弊を改めんと欲し、綽に命じて周書の體に仿ひて大誥(上より下にさとし告ぐることを作り群臣に宣示したから、これより詔誥は多く此の體に依つた。宇文泰は始め蘇綽を知らなかつたが、其の王佐の才あるを聞き、用ひて著作郎に任じたが、博學にして言ふ所が皆其の要に中つたから、是より寵遇日に篤かつた。綽は常に賢を薦め能を抜き、庶政を綱紀するに努めたが、嘗て曰く、國を治むるの道は、當に人を愛すること慈父の如く、人を訓ふることを嚴師の如くなるべしと。毎に公卿と議論し晝より夜に達し、事巨細と無く知らざるはなかつた。併し遂に勞を積みて病を成し梁の中大同元年(皇紀一二〇六年)に歿した。

第廿三章 漢・魏・晋・南北朝の儒學文藝宗教

儒學

儒學 曩に秦の始皇が、一度火坑の暴政を行つてから詩書は殆ど散佚し、學者は變じて説客と爲り、復た意を儒學文藝に寄する者は無く、文教は一時全く地を拂ふに至つた。漢の高祖が天下を一統するに及んで、博士叔孫通の説を用ひ、魯の諸生を徴して共に朝儀を起さしめたり、又陸賈に命じて、書十二篇新語を著して、古今の成敗得失を論ぜしめたりした。是に於て儒學は再び其の萌芽を發したが、尋いで惠帝の時に俠書の禁を解いて、頗る意を文教の復興に努めたが、黄老申韓等の道家・刑名・法家等の雜説が盛になつただけで、儒學は未だ起らなかつた。文帝景帝に至りて、大に治平に意を注ぎ、儒學の絶えたのを興すの意があつたが、武帝に至つては、丞相衛綰の議に依つて、申韓蘇張の言を治めて國政を亂す者を罷め、董仲舒の策を用ひて、大義名分を明かにし、忠孝仁義を唱へ、王道によつて天下を治むるを理想とせる儒教を宗とし、五經博士を置き、對策考課一に儒學に通ずる者を採用し、又獻書の途を開き、寫書官を置いて散亡せる書を天下に求めた。此の頃河間王劉德及び淮南王劉安等は、亦大いに書を民間に求めて、學者を優遇し保護を加へたから、董仲舒、公孫弘等を始め、學者が輩出して儒學は漸く勃興し、遂に儒教は漢の國教の如くなり、後世政治道德の標準と爲るに至つた。けれども、漢と周とは相距ることが頗る遠く、加之言語文字も全く相異なつたから、古書の文義を

儒學漸く勃興す



解することが容易でないので學者は、専ら力を字句の解釋に注いだから、世に之を訓話の學と曰うた。又斯く古書が讀み難いので、當時の學者は、一人で數部の經に通ずる者は無く、皆一經を以て専門の業とした。又古語の意味は、其の意味を傳へた先輩の説に従ふより他に爲すべき方法が無いから、其の頃の學者は、皆師の説を其の儘己れの弟子に傳ふるのみで、苟も創意工夫の解釋はなく、各家法を設けて六經を教授した。譬へば詩經には齊魯韓毛の四家があり、四家は各、其の師の説を傳へて、其の間互に協議もせず、攻撃もせずして、並び立つたのである。成帝が立つて又儒學を重んじ、普く遺書を天下に求め、劉向劉歆父子に命じ、經・傳・諸子・詩賦等を校訂し、其の篇目を條し、指意を撮録し、七略(輯略、六藝略、諸子略、詩賦略、數術略、方伎略)を作らしめた。王莽の亂に秘府の書籍が概ね、燒盡したが、後漢の光武が天下を統一するに及んで、素より儒學を好んだから、既に中原を平けると、首として大學を起し、五經博士を置き、大に古典を講究し、禮樂を修明し、時には、公卿を引いて儒書を講論し、或は經籍の散佚せるものを拾集し、班固に命じて校訂せしむる等、大に儒學の興隆に努めたから、是に於て名儒が輩出し、河南の鄭衆、扶風(今の陝西長安の西及び鳳翔縣)の陸賈等は皆古學を治め、最も毛詩、周官、左氏春秋等に明らかに、扶風(今の陝西長安の西及び鳳翔縣)の馬融は詩・書・易・三禮・論語・孝經等に註解し、弟子が甚だ多かつた。北海(國名、青州に屬す。今

(山東青州の東境)の鄭玄は篤學にして諸經を究め、其の註釋せる毛詩・禮記・儀禮・周禮の如きは、後世迄も尊重せられた。玄は初め以爲ふのに、山東には師とすべき者が無いと、遂に西の方關に入り、融に従つて疑義を質したが、其の辭して歸るに及んで、融は歎じて「鄭生今去る、吾道東せり」と、いうて之を惜んだ。玄は能く衆家の學を兼ね、註釋詳密に、兩漢の儒學を大成した。任城(國名、今の山東濟寧)の何休は公羊學を好み、河南の服虔(フケン)も、亦左氏、傳解を作つた。魏の曹氏は學を好み、大學の制を設け等して之を獎勵したから、王肅・王弼・何晏等の學者が輩出した。肅は能く賈(賈陸)馬(馬融)の學を爲して鄭説を好まず、諸説を異同して盡く諸經に註し、聖證論を著して鄭玄を譏つた。世に鄭王と並び稱せられた。王弼は易註を作り、何晏は論語集解を作つたが、二人共に老莊を好み、經を解釋するに頗る其の意を雜へた。是より一般の學者は、概ね清談に耽り、専ら儒學を修むる者は甚だ尠く、遂に所謂六朝文學として華麗纖巧の詩文を競ふに至つた。晉の時に杜預(トコ)が出で、身は將帥の任に居り、武功一世に著はれたが、既に吳を平らげてよりは、思を經籍に専らにし、左傳集解を作つた。又南渡の後に至りて范甯が穀梁集解を作つた。東晉の元帝と梁の武帝とは、共に儒學の振興を圖つたが、大勢如何ともする能はず、徒に詞藻を尙んで、經學は盛なるに至らなかつた。之に反して北朝は専ら鄭玄の學を用ゐ、殊に



王通

後魏の道武帝は、大學を興し、博士を置き、獻文・孝文の二帝も亦儒學を奨勵したから、北朝は名儒を出すこと稍多く、徐遵明（今河南）は元魏の時に於て、博く諸經に通じ、熊安生は最も禮に通じ、諸經に註疏を作つた。隋の文帝の末年に龍門（今山西）の人生通は、闕に詣りて太平十二策を獲じたが、帝は遂に用ゐることが出来なかつたので、罷め歸りて河汾の間に教授したが、弟子の遠方より至る者が甚だ衆かつた。通は人に誨ゆるに、世儒の訓話を事とするに倣はないで、自ら一家の言を爲したが、亦實に儒中の偉なる者である。東晉より後は、南北によりて其の好尚を異にした。即ち江左に於ては、書は則ち孔傳、易は王弼の註、三禮は鄭註若くは王肅註、春秋は左傳杜註、論語は何晏註を採り、河洛に於ては書・易・三禮・論語。皆鄭氏を主とし、春秋三傳は則ち服虔・何休・范甯を用ゐる。唯だ詩は則ち南北俱に鄭箋に遵うた。之を要するに、周末に於てさしも盛であつた儒學も、一度秦火の禍に遇うて殆ど廢滅したが、漢の武帝東漢の光武帝の奨勵により、漸く復興の氣運に向つたけれども、黨錮の禍、清談の流行は再び其の發達を妨げ、南朝に及んでは、遂に儒學の跡を絶ち、所謂纖麗無氣力なる六朝文學の流行を見るに至つた。然れども北朝に於ては、學者は此の風潮に侵蝕せられず、諸帝も亦皆儒學を好み、大に之を奨勵したから、能く之を後世に傳へ以て隋唐に及んだ。

文藝  
周末の盛

秦の李斯  
前漢の賈誼

司馬遷  
司馬相如

六朝文學  
「漢書」

文藝 支那古代の文章は語は短くて意が長く、誦すべき者が多い、周末に至りては文辭始めて盛に、孔・孟を始めとして老・莊・左氏・孫氏・韓非・屈原等が、各、特徴を以て皆其の妙を盡さざるは莫かつた。秦に在つては始皇の古碑によりて其の一斑を知ることが出来るが、未だ盛なりとはいはれぬ。會、李斯の如き能文の士を出したけれども、其の他は則ち聞ゆるものが無い。前漢に至つては作者が甚が多く、文帝の世には賈誼が出て漢代文章の魁を爲し、其の治安策の如きは、論理正確筆力遒勁、眞に漢代第一と稱せられた。武帝は自ら文學を勸奨し、俊材の士を遇したから、一代の文運が燦然として勃興し、司馬遷、司馬相如、董仲舒、劉向、揚雄、東方朔、枚皐等の諸名家が輩出した。中にも賈誼の論策に於ける、司馬遷の史記に於ける、司馬相如の辭賦に於ける、眞に超世の才で、世に漢文の三絶と稱せられて居る。董仲舒は論說を善くし、劉向、揚雄に至つては文氣濶く弱く、競うて侈麗を尙ぶの風を免れないが、亦一代の傑作たるを失はない。之を要するに、前漢は先秦を距ることが遠くないから、其の文學も亦其餘風を傳へて質實勇渾なるものがあつた。東漢より魏晉南朝を経て隋に至る間は、文章は徒らに華麗纖弱に流れて、巧に駢儷を作り、所謂六朝（吳・東晉・宋・齊・梁・陳）文學なるものを現出するに至つた。東漢の班固は、紀傳の體によりて「漢書」を著した。其の文は司馬遷



建安の七子

には及ばないが、後世奉じて史書の典型として居る。魏の武帝(操)は文學を好み、兵馬倥偬の間に在りて、能く槩を横へて詩を賦した。其の子文帝(曹)も亦藻思があり、文帝の弟陳思王植は、才藻英發筆を落せば文を成すの概があつた。王粲・劉楨・陳琳・應瑒・阮瑀・徐幹の六友と共に所謂建安(時の年號)の七子と稱せられ當時の文壇に其の名を擅にした。諸葛亮は、蜀の丞相として、力を文藝に用ふるの士ではないが、其の出師(前後二篇)の表は簡嚴精切であつて、全篇に誠忠の氣が溢れ、鬼神を泣かしむるものがあり、眞に一世の名文である。晉代に於ても文學の士が少くなかつたが、中にも阮籍・嵇康・陶潛(淵明)を其の重なるものとする。陶潛は嘗て彭澤(今の江西九江府湖江縣)の令となつた時に、會郡督郵の巡察に際して、應さに束帶して之に見えよといふ命を聞いて、慨然として歎じて曰く、「我豈能く五斗米の爲めに、腰を折りて郷里の小人に向はんや」と、即日印綬を解いて去り、歸去來の辭を賦して其の志を遂げた。潛の曾祖の陶侃は、嘗て晉の宰相であつたので、潛は身を後代に届するを恥ぢて、是よりは復た肯へて仕官をせず、其の妻と共に耕し、觴詠自ら娛んだ。世に之を靖節先生と呼んだ。潛は又詩を能くし、其の風冲淡雅遠にして自然の域に近く、謝靈運と並べて稱せられた。靈運の詩は工麗で淵明に比すれば稍遜色があつた。梁の武帝は、博學にして文を能くし、著書が數百卷ある。其の子昭明太子、

陶潛

「文選」

簡文帝及び孝元帝は皆學を好み、文藻に富み、中にも昭明太子は「文選」六十卷を撰んだ。梁朝には文士が多い中で、沈約、庾信の二氏が最著はれた。約は詩文に長じ、又嘗て語音に平上去入の別あることを悟り、四聲譜を著して其の意を發表したので、音韻の學がこれより興つた。信の文は綺艶であつて音韻を以て相婉附し、句は四六を用ゐて對を作し、後進の士が競うて相模倣するに至つた。梁の元帝は庾信を遣はして西魏に聘せしめたが、信は遂に長安に留り、魏及び後周に仕へた。周の明帝武帝は皆文藝を好み、信を遇すること殊に篤かつたので、これより信の文體は又北朝にも行はるゝに至つた。之を要するに六朝の文學は漢代詞賦流行の後を承け、文章は華美艷麗に流れ、所謂四六駢麗(對句なり)の體を爲し、氣韻が甚だ高からず、纖弱卑俗に陥つたが、詩は高尚典雅であつて、風神に富める者が多く、五言詩に於て特に然りとする。

史學 此の時代には歴史の著述が頗る多く、何れも漢代の史記や漢書に倣へるものであつた。中にも今尙存して正史と稱せらるゝものは、晉の陳壽の「三國志」(魏四紀廿六列傳、蜀十五列傳、吳廿六十五卷)、宋の范曄の「後漢書」(十紀、十志、八十列傳、全百廿卷)、梁の沈約の「宋書」(十本紀、三十志、六十列傳、全百卷)、蕭子顯の「南齊書」(八紀、十一志、四十列傳、全五十九卷)、北齊魏收の「魏書」(十二紀、十志、九十列傳、全百十四卷)等である。中にも「三國志」は叙事簡明、文章純潔で、當時の通弊であつた艷麗輕浮の態に陥らず、實に史記

史學

「三國志」



漢書に次ぐの良史と稱せられて居る。其の他司馬彪の「續漢書」、華嶠の「後漢書」、袁宏の「後漢紀」、孫盛の「魏春秋」、王隱の「蜀記」、張勃の「語錄」、習鑿齒の「漢晉春秋」等があつたが、其の多くは亡びて傳はらない。

書畫

王羲之

顧愷之

書畫 書畫も亦此の時代に至つて漸く發達した。書法の大家としては、晉に王羲之、王獻之父子がある。羲之は能く各書體に精通し、其の技神に入り、後世より呼んで書道の神と稱せられた。其の他宋の蕭思詒、齊の王僧虔、王融、梁の蕭子雲、陳の僧智永、隋の僧智果等が最も著はれたが、何れも王羲之には及ばぬ。繪畫には晉の顧愷之の寫實に於ける、宋の陸探微の佛畫古聖賢等の人物に於ける、梁の張僧繇の人物山水に於ける、何れも一家を成して一世を驚歎せしむるものであつた。

佛教

佛教 佛教は東漢の明帝の時に、西域より始めて支那に入つてから、西域の僧侶の漢に來て譯教傳道に従ふ者が多く、魏・晉以來漢人の之を奉ずる者が漸く多きに至つた。三國の時、魏の曹植(操の子)が好んで佛經を讀み、吳の大帝も亦僧侶を尊敬したから、佛敎は是れより吳魏に行はるゝに至つた。晉の初に、敦煌(郡名。今の甘肅安西)の僧の法護(ダルクマツ)といふ者が、西域を遍歴して多くの梵經を蒐集し、長安に歸つて翻譯したから、佛教は益々流行した。此の頃印度の僧の佛圖澄(フツトウ)といふ者が洛陽に來て、後趙主石勒・石虎に尊信せ

鳩摩羅什

法顯

「佛國記」

られ、大和尚と號せられ、或は軍國の事を諮詢せられなどして、頗る優遇せられた。其の弟子の衛道安は、舊譯諸經の文義が頗る通じ難いので、効苦研鑽すること十餘年で、悉く疑義を解き、訛誤を正した。時に秦王苻堅は襄陽に克ち、會安を獲て大いに喜び、崇ぶに師禮を以て之を厚遇しに、龜茲(西域の國名。今の新疆庫車の地)の僧鳩摩羅什(モロフツ)も亦聰明淵博を以て聞えたが、安は其の名を傳へ、堅に勧めて之を招致せしめやうとした。鳩摩羅什も亦安の風采を慕ひ、遂に敬して之を東方の聖人といつたが、會苻堅は呂光を遣はして西征せしめ、龜茲城を破り、羅什を伴つて俱に還つたが、後秦主姚興が秦を滅し、羅什を迎へて長安に歸り、尊寵極め盡した。羅什も亦能く秦言に通じ、舊經の誤譯が多くて、其の原本(梵本)の眞意を傳へて居ないのを覽て、群僧と共に新に經論を譯すること九十八部、四百二十五卷に及んだ。是に於て姚興は大に塔寺を營み、公卿以下佛を奉ずる者が頗る多く、僧徒の秦京に集る者が五千餘人に及んだ。されば北方僧侶の、自ら進んで印度西域に遊學するものが漸く多く、中にも法顯は、東晉安帝の隆安三年(皇紀一〇五九年。仁德帝の朝)に長安を發し、陸路葱嶺を越えて印度に入り、三十餘國を歴遊し、大に經律を求め、師子國(今の錫蘭島)に渡り、商船に乗りて東歸し、途に漂ふて青州(今の山東の東境)に著し、歸國の後「佛國記」を著した。當時は交通の機關が固より不完全であり、道路も頗る嶮難であつたか



梁の武帝

菩提達磨

後魏の太武帝

ら、旅行の僧侶は多く途に斃れた。顯の往く時の如き、十餘人の僧を伴はつたが、還るに及んでは、顯惟だ一人のみとなつた。けれども、當時の佛徒は、信向の志が頗る篤く、法を求むるに勇敢であつたから、敢へて艱險を顧みず、西僧の來つて布教する者も益々多く、佛教は漸く盛になつた。南北朝に至つて、宋の文帝は頗る佛を崇んだが、印度以東の佛教國は、頻りに使を遣はして朝貢し、帝の功德を頌した。梁の武帝は、最も佛法に心酔し、自ら三寶の奴と稱するに至つたが、帝始め慧約に師事して其の戒を受け、太子王公以下亦戒を受くる者が五萬人に達した。尋いで南印度の僧の菩提達磨は航して廣州に至つたから、武帝召見して曰く、朕多く寺を造り經を寫したが、何の功德か有るか。達磨曰く並に功德は無い。元來此の如きの功德は、世に於て求むべきではないと。帝は固より其の意を悟り得なかつたので、達磨は、去りて魏に入り、嵩山の小林寺に止り、直視人心見姓成佛の説を唱へ、面壁九年にして没した。之を支那禪宗の第一祖とする。北朝にては、後魏の太武帝が、深く道教を信じ、寺塔・佛像・經論を焚き、僧尼を迫害し、頗る佛教を排斥したが、帝の死後に獻文帝が立つて、佛教の禁を解き、孝文帝は、七度佛教興隆の詔を發し、宣武帝の時には、西僧の支那に來る者が三千人に及び、當時胡太后の建立した永寧寺の僧房は、千間、塔の高さ六十餘丈に達したといふ。次いで孝

北周の武帝

明帝が嗣立し、崇佛の念が厚かつたから、西僧の來る者が頗る多く、佛寺の數は三萬を超えたといふ。此の時又宋雲、惠生等の高僧が、北印度に赴き、經論百七十餘部を得て歸り、佛教は益々盛となつた。然るに、其の後北周の武帝が立つて儒學を重んじ、詔して道・佛二教を禁じ、悉く經像を毀ち、道士、僧侶をして並に還俗せしめたが、隋の文帝に至りて復た之を信奉し、詔して民の出家を許し、又經像を營造せしめたから、民間に佛書の多きことは、經書の數十倍にも達したといふ。以て如何に其の盛なりしかが知られる。尋いで煬帝が立ち、僧智顛に智者大師の號を賜ひ、爲めに國清寺を建てた。之を要するに、佛教は三國より東晉南北朝を経て、多くの帝王の歸依尊信を得たので、益々隆盛に赴き、唐代に至りて、遂に極盛に達するに至つた。

朝鮮に於ける佛

朝鮮に於ける佛教 朝鮮にては、高麗の小獸林王(第十世)の二年(皇紀一〇三二年、東晉簡文帝咸安二年)に、前秦王苻堅は、使を遣はして僧順道及び佛像佛經を送つたが、是れが朝鮮半島に佛教の傳來した初めである。五年小獸林王は、肖門寺伊弗蘭寺を創建し、次の故國壤王(第八世)は、佛を崇び福を求めしむるの令を下し、其の後惠亮・惠灌等の名僧が輩出したのを見れば、佛法の盛に行はれたことが知られる。百濟にては、枕流王(第十世)の元年(皇紀一〇四四年、東晉孝武帝太元九年)に、印度僧摩羅難陀が晉より入朝したから、王は宮内に迎へて禮敬し、翌年



佛寺を漢山に創建して僧侶を度した。即ち佛法は此の時から始つた。其の後聖王(第廿五代)は、使を梁に遣はして涅槃經義を求め、又金銅佛像、幡蓋、經論等を我が國に獻じ、其の功德を禮讚して曰く、「此の法は諸法の中にて、最も殊勝にして、能く無量無邊の福德果報を生ず」と。其の子威徳王(第廿六世)も、亦しきりに經像禪師を我が國に送り、法王(第廿八世)が立つに及んで、殺生を禁じ、寺を建て、僧を度する等、盛に之を奨勵したから、佛教は益々盛になつた。又新羅に於ては、訥祇(第廿九世)の時(皇紀一〇八五年、南朝宋文帝元嘉二年)、高麗の僧墨胡子といふ者が來て、初めて佛教を傳へたが、眞興王(第廿四世)の初世に高麗を撃ち、法師惠亮を得て歸り、亮を僧統として百座の講會、及び八關の法(佛氏八關の戒に曰く、淫佚。不<sub>レ</sub>忘語。不<sub>レ</sub>飲酒。不<sub>レ</sub>坐高床。不<sub>レ</sub>著香華。不<sub>レ</sub>自樂<sub>二</sub>觀<sub>一</sub>)を設けさせ、或は僧を遣はして陳隋に入つて法を求めしめ、或は僧尼を得度し、又廣く佛利を興して民をして之を信奉することを勧め、其の晩年には、親ら髪を削り僧衣を着けて法雲と號し、王妃も亦尼となりて永興寺に住した。されば上の好む所下皆之に倣ひ、佛教の盛なることは日に甚しきに至つた。斯くて三韓に皆佛教が有り、半島の地に盛に行はれたが、其の後新羅の文武王(第廿三世)は百濟を滅し(皇紀一三二三年、天智天皇朝、唐高宗の朝)、次いで高麗を平らげ(皇紀一三二八年、同)、半島を統一するに及び、大に佛教を興隆し、其の後王建が出て新羅を滅し(皇紀一五九七年、上皇紀一五九七年)て高麗朝を

起すに及び、又佛教を保護したが、下つて皇紀二〇五二年(南北朝合一の年)に李成桂が出て、李氏朝鮮朝を始むるに及び、儒教を尊んで佛教を排斥したから、是より佛教は漸く衰ふるに至つた。

道教

**道教** 道教は秦・漢時代の方士・仙人の徒が、老莊の學に基づいて、これに神仙の説を附會し、遂に一宗教としたものである。其の起源は詳でないが、神仙の談は、既に戰國の時に徧つた。所謂方士・仙人の徒が輩出して、秦の始皇が方士の説を信じて神仙を求め、仙藥を鍊求せしめんとしたことがある。漢の武帝も亦方士を好み、長生・不死の説を信じたことは、史上に名高い事實である。けれども、此等方士の説は、もと道家とは全く相關せぬことである。老子は虚靜を主とし、莊・列二氏は神人を説いたが寓言に過ぎない。然るに方士の徒は、強解して遂に老子を推して天仙の長と爲した。東漢順帝の時に、沛(今の安徽宿州)の人張陵といふ者が、鶴鳴山(四川成都崇慶州の西北に在り)に登つて、秘録を老君より得たと稱し、符水・禁咒を以て病を治するの法を行ひ、以て愚民を惑はし、従つて學ぶ者には五斗米を納めしめたから、時人は之を米道といひ、其の教を傳ふる人を道士といふた。陵の子張修、孫張魯が相次いで其の術を傳へ、歷代世に重んぜられた。魏・晉・南朝に於ては、佛教の流行に伴ひ、道教も亦漸く盛に、當時の君子は清談を事とし、

張陵

米道



「抱朴子」

一般人は符祝禱祠等を喜んだから、道教は益々隆盛に赴き、佛教と相馳驅するに至つた。東晋の初、葛洪といふ者が、羅浮山（廣東博羅縣の西北に在り）に上つて仙術を得たと稱し、「抱朴子」といふ書を著して、道教の教理を説いて世に發表した。梁の武帝の時に、陶弘景といふ者が、道業を修めて眞誥を作つたが、武帝は大に之を遇し、士民の道を受くる者が多かつた。後魏の道武帝は、仙人博士を任じ、仙藥を煮煉し、之を服用して疾を得、次いで明元帝が立つた。會、崇山の道士寇謙之といふ者が、自ら宣言して、我は老君の降るに遇ひ、服氣輕身の術と、科誡書とを授けられ、之によりて道教を清整せよとの命を受け、又神人李譜文（老君の玄孫）より、錄圖眞經を授けられたと稱した。太武が即位するや、其の臣崔浩の勧めにより、寇謙之を尊信し、天師道場を起し、親ら駕を備へて符籙を受けたから、是より道教が大に行はれ、符咒、金丹、玉漿の法等が競ひ起つた。是より毎帝即位毎に、必符籙を受くるを以て故事とした。周の武帝は道士衛元嵩を信じ、佛教を廢せんとし、僧侶の反抗を招き、遂に道佛二教を併せ罷めた。

### 第廿四章 隋の興亡

楊帝の驕奢

楊帝の驕奢

隋の文帝楊堅は開皇元年（皇紀一二）に北周の禪を受けて帝位に上り、次いで

で開皇八年に更に陳を滅して茲に天下を一統した。帝は性嚴峻で自ら奉ずることは頗儉薄に、常に心を民治に用ゐて百姓を愛養したから、天下能く治まり、在位二十一年の間、初め民戸は四百萬に満たなかつたが、末年には九百萬に及んだといふ。然れども、もと詐術を以て國を得たものであるから、猜忌苛察で妄りに人の讒言を信じ、功臣故舊も能く其の身を全うする者が無く、子弟宗族に至るまで、互に相仇敵の如くであつた。初め帝は太子勇をして諸政を參決せしめたが、勇は性直情徑行で矯飾する所が無く、服用奢侈を極めたから、帝は見て悦ばず、獨孤皇后も亦深く之を惡んだ。然るに勇の弟晉王廣は、之を知りて深く自ら修飾し、帝及び皇后の意を迎へ、常に左右に媚び、又密かに權臣楊素に結んで、之をして勇を譖せしめたから、后は遂に帝に勸めて勇を廢して庶人と爲し、廣を以て太子とした。隋の十六年に、文帝が疾篤きに及んで、太子廣をして入りて殿中に居らしめたが、時に廣は豫め帝の崩後の事を慮つて、書を作つて後事を楊素に問うた。そこで素は事狀を明記して報答したのを、宮人が誤りて帝の許に送つたから、帝は覽て大に悲つた。會、帝の寵する所の陳夫人（陳の宣帝の女）が且に出て更衣（厠に往くこと）せんとして廣に逼られ、之を拒いで纔に免るゝことを得たが、帝は其の神色の異狀のあるを怪んで故を問うと、夫人は泣然として太子の無禮を訴へた。そこで帝は悲り床を抵つ



土木を起す  
煬帝の豪華

(一) 都城宮殿の造營

て曰く、畜生何ぞ大事を托するに足らんや、獨孤は我を誤つたと。將さに故の太子勇を召さんとしたから、楊素が之を聞いて、廣に白して人をして入つて帝を弑せしめ、廣が即ち即位した。是を煬帝といふ。煬帝は更に人を遣はして勇を殺し、後其の八子をも殺した。此の時弟漢王諒は兵を擧げて反したが、帝楊素をして之を討たしめ、諒を虜にし歸つて之を殺した。斯くて煬帝は、天下憚る者無きに至つたから、盛に土木を起し豪華を極めた。其の主なるものを擧ぐれば、

(一) 都城宮殿の造營と遊樂 煬帝は即位の翌大業元年(皇紀一二一六五年)に、洛陽を造營して東都と爲した。此の時使用した使丁は實に二百萬人に達した。又別に顯仁宮(河南宜陽縣の東南に在り)を作り、江南の奇材異石を發し、海内の嘉木異草珍禽奇獸を求めて苑囿に實たさしめた。又洛西に西苑(洛陽城の西に在り)を作つたが、廣さ數里、其の内に海を爲つて三神山を起し、臺觀殿閣は山上に羅絡し、北には渠を造り榮紆して海に注ぎ、渠に沿うて十六院を作り、皆夫人を以て之を主らしめ、華麗を窮極した。而して宮樹凋落すれば則ち綵を剪り花葉を爲り之を綴つた。沼内にも亦剪綵(裁ち切れ)を以て荷・菱・芡・茨を爲り、色が渝れば則ち之を易へた。斯くて好んで月夜を以て宮女數千騎を從へて西苑に遊び、清夜遊の曲を作りて馬上に之を奏せしめた。

(二) 運河の開鑿

(二) 運河の開鑿 帝は又、民餘萬を發して永濟渠(今衛河と)を開き、西苑より穀洛水を引いて河に達し、河を引いて汴に入れ、汴を引いて泗に入れ以て淮に達し、丁男が補給し得ずして遂に婦人を役するに至つた。又江南河(今浙西)を穿ち、京口より餘杭(今の浙)に至る間、離宮四十餘箇所を置き、充たすに美女を以てし、江南に於て龍舟雜船數萬艘を造らしめ、官吏の督役が急なるが爲に役丁の死する者が頗る多かつた。

(三) 萬里長城の増築

(三) 萬里の長城の増築 帝は又晉陽・汾陽の二宮(晉陽宮は山西太原縣の北、汾陽宮は山西樂縣の北)を造營し、大行山を切り開いて馳道を并州まで通じ、又東は紫河(歸化城の西北)に至り、西は榆林(内蒙古鄂爾多斯の左翼)に至る間に萬里の長城を増築した。

(四) 巡幸

(四) 巡幸 帝或は東京に幸し、或は江都に遊び、或は長城を巡り、或は西河右に抵り等して巡遊に虚歲無かつた。其の江都に至るや、金玉を以て飾つた龍舟に御し、後宮諸王公主百官を數千の雜船に乗せ、水手八萬餘人を用ゐ、別に衛兵の乗る船も數千艘もあり、舳艫相接すること二百餘里に及び、陸には騎兵が列を成して御舟に従ひ、過ぐる所の州縣の民をして水陸の珍味を以て飲食を献せしめた。

煬帝の外征

煬帝の外征 かく帝は豪華を好み、土木巡幸の爲めに虚歲が無かつたが、又頻りに兵を發して遠征を試みた。大業元年(皇紀一二一六五年)に兵を出して南の方林邑(安南の南境、即後の占婆)を討ち、



國都を陥れて其の王を奔らせ、次いで赤土(馬來半島の中部東岸)を征して入貢せしめ、又琉球を招致せしめたが、應ぜなかつたから之を征し、其の王を斬り、其の民を虜にした。大業三年には、帝親ら北巡して榆林に次し、東突厥を來朝せしめ、又吐谷渾(トコクン)、高昌等を入貢せしめ、大業五年には、又親ら河右を巡りて燕支山に至つたが、此の時高昌等西域二十七國の君長等が奉迎して謁見したから、帝は其の兵威を示し、西海(青海の西)・河源(青海の南)・鄯善(甘肅省敦煌縣の西)・且末(敦煌縣の西南)等の郡を置き、西域の道路を通じて大に國威を西南に張つた。

隋の高句麗征伐

隋の高句麗征伐

(一)文帝の征伐

(一)文帝の征伐 南北朝の頃に、高句麗は常に北朝に朝貢し、百濟、新羅は多く南朝に通貢したが、隋の天下を統一するに及んで、高句麗の嬰陽王は、隋の己を伐たんことを恐れ、文帝の十八年に、靺鞨の兵を率ゐて遼西に入寇したから、文帝は大に怒り、水陸三十萬の兵を以て高句麗を伐たしめたが、會、水害に遇うて輜重が繼がず、加ふるに疾疫に侵されて、却つて敗れ還つた。

(二)煬帝の征伐

(二)煬帝の征伐

(二)煬帝の征伐 煬帝は嘗て突厥の啓民可汗の帳に幸し、高句麗の使者を見て之に勅し、還つて嬰陽王元に告げ入朝せしめんとしたが、遂に至らなかつたから、大に怒り、之を征伐して威を海東に輝かさんと欲し、大業七年(皇紀一七一年)詔を下して親ら高麗を征

し、國內の兵を發して涿郡に會した。先づ河南淮南江南に敕して戎車五萬乘を造らしめ、又南北の民夫を發し、江淮以南の民夫及び船を發して、黎陽(今の河南南漳縣)洛口(今の河南登封縣の東)諸倉の米を運び、舳艫相次ぐこと二百里。斯くて準備が成つたから、八年涿郡を發した。兵凡そ一百十三萬、首尾百餘里、帝親ら遼河を渡り、遼東城(故城は遼陽の北に在り)を攻めたが、城は固くして拔けない。諸軍は進んで鴨綠江を渡り、水軍は平壤を攻めたが、伏兵に陥つて大敗し、陸軍は清川江に敗れ、諸軍共潰亂して引き還つた。九年再び兵を徵し、遼東を親征して亦敗れた。十年帝復た高麗を征し、懷遠鎮(河北省朝陽縣の西に在り)に次した時、高麗王元は使を遣はして降を乞うたから、帝は西京に還り、元を徵して入朝せしめたが、元竟に至らなかつたので、帝はまた之を伐たんとしたが、會、叛亂が四方に起つたからこれを中止した。

隋國分崩

隋國分崩

隋國分崩 煬帝は妄りに土木を起し、巡遊に耽り、又屢、外征の師を出して、民の困弊を顧みなかつたから、百姓は困窮し、民心が夙に離畔したが、今や三度高句麗を征して勝つことが出来なかつたから、天下の士民が一時に起つて之に反抗し、豪傑は此の機に乗じて諸方に競ひ起り、小業二十年ばかりで天下は復た麻の如くに亂れた。即ち李密は河南に起りて魏公と稱し、洛口城を修めて之に據り、河南の諸郡を略取した。又鄴陽



(今の江蘇州)の賊帥林士弘は、楚帝と稱して江南に據り、東海(今の江蘇州)の李子通は海陵(今の江蘇州)に、章邱(今の山東省)の杜伏威は歷陽(今の安徽省)に據つて各其の威を振つた。又河北の地は最盜多く、竇建德は最大で、長樂王と稱して樂壽(今の河北省)に據り、馬邑(今の山西省)の校尉劉武周、及び朔方(今の陝西省)の郎將梁師都は、各其の地に據りて兵を擧げて帝と稱し、金城(今の甘肅省)の校尉薛舉は、隴西に據つて西秦の霸王と稱し、次いで秦帝と稱した。又武威の司馬李軌は、河西に據つて涼王と稱し、後帝と稱した。後梁の宣帝の曾孫蕭銑は、巴陵(今の湖南省)に據つて梁王と稱し、後帝と稱し、皆天下掌握の機を窺つた。

隋の滅亡

李淵

隋の滅亡 隋國が分崩し、群雄蜂起せる中にも、嶄然其の頭角を抽んでたものは、李淵・李世民父子である。淵は晉の西涼公高(今のカフ)の七世の孫であるが、煬帝に事へて嘗て弘化の留守と爲り、衆を御することが寛大であつたから、人々が多く之に附いた。會、四方の賊が起るに及び、山西河東の撫慰大使と爲り、尋いで太原の留守に任ぜられて功を立てた。淵の次子世民は、聰明勇決にして識量人に過ぎたが、隋室が政を失ひ、天下が亂るのを見て、陰に世を濟(ス)ひ民を安んずるの志を立てた。時に晉陽の令劉文靜が世民に謂つて曰く、今主上南巡し群盜蜂起して居る。此の時に當つて眞主が出て、驅駕して之を用ゐたならば、天下を取ることは掌を反すが如きものである。今や太原の百姓は十萬

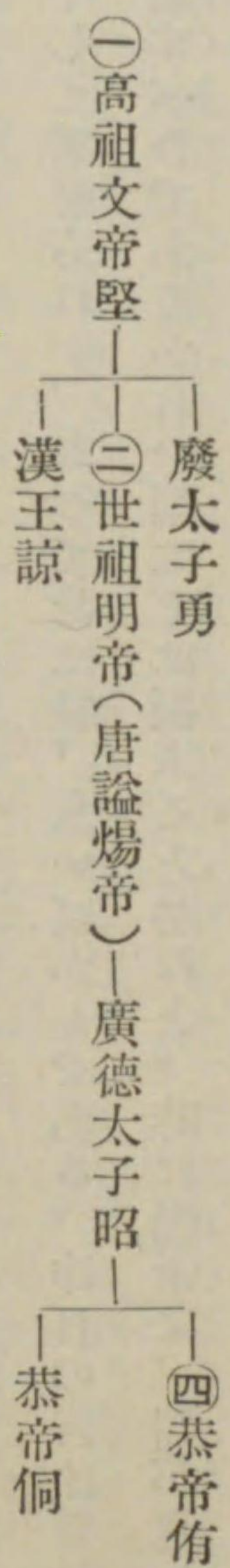
李世民

程有り、尊公の將ゆる所の兵も復た數萬あるから、此を以て虚に乗じて關に入り、天下に號令したならば、半年ならずして帝業が成るだらうと。世民笑つて曰く、君の言は正に我が意に合つて居ると。時に淵が兵は突厥を拒いで利が無かつたので、淵は罪を獲んことを恐れたが、世民が間に乘じて淵に説き、民心に従ひ義兵を起し、以て帝業を成さむことを以てしたが、淵は未だ決心せぬ。そこで明日復た説いて曰く、人皆李氏が當に圖織に應ずといふので、李金才は故無くして族滅せられた。大人能く賊を滅しても、功高くして賞せられず、却つて身は益、危いばかりである。昨日の言は當に禍を轉じて福と爲すべきであるから、願はくは疑ふこと勿れと。時に煬帝は、淵が寇を禦ぐことの出來ないので、使者を遣はして執へて江都に詣らしめむとした。よつて世民は復た説いて曰く、事は既に迫つたから、宜しく早く計を定むべきである。且つ晉は士馬精強で蓄積も亦巨萬あるから、公若し鼓行して西し、撫して之を有(カ)せば、囊中の物を探るが如きのみであると。是に於て淵の意漸く決し、乃ち遠近に令して兵を募り、且つ使を突厥に遣はして其の援を借り、兵を進めて臨汾(今の山西省)・絳郡(今の山西省)を取り、河を濟(ス)つて西した。關中の吏民群盜争うて之に歸し、遂に長安を圍むこと旬日にして之を抜き、代王侑を擁立して恭帝と爲し、遙に煬帝を尊んで太上皇と爲し、淵自ら大丞相唐王と爲り、大業十



四年に禪を侑に受けて帝と稱した。是を唐の高祖神堯皇帝となす。煬帝江都に至り、荒淫甚しく酒卮は口を離れず、中原の紛亂を聞いて北に歸るの心が無い。因つて關中の人で歸郷を思ふ者が陰かに相謀り、宇文化及を主とし、一夜兵を以て宮中に闖入して帝を縊殺した。隋の東都の留守官等は煬帝の死を聞いて、越王侗を奉じて位に即かしめ、是を恭帝と稱した。帝立ちて一年、王世充が之を廢し尋いで弑した。斯くて隋は、文帝より凡そ四帝三十九年にして滅びた。時に皇紀千二百七十八年である。

○隋の世系



隋の滅亡

隋の世系

楊堅

**楊堅** (高祖文皇帝) 隋の第一世。弘農華陰(今の河南省洛陽)の人。父、忠が魏及び周に仕へ、功を以て隋公に封ぜられ堅は爵を嗣いだ。堅は生れて人と異なり、長ずるに及びて相表奇異であつたので、周人が嘗て其の反相のあるを武帝に告ぐる者があつたが、堅は之を聞いて深く自ら晦ました。堅の女は周の宣帝の后となり、其の生む所の靜帝は立ちて幼冲であつたから、近臣は楊堅の重名あるを以て、遺詔を矯め堅を以て政を輔けしめた。是に於て堅は自ら大丞相と爲り、相國隋王に進み、九錫を加へ、尋いで禪を受け、靜帝を封じて介公とした。かくて周は凡五世二十五年にして亡び、

隋王が帝と稱した。是を高祖文帝といふ。堅は周の政を乗ること僅に九個月で、易々として二百餘州を取つた。周の遺臣が兵を起して回復を企て、諸王も亦帝を殺さんと謀る者があつたが、文帝は能く周の國力を假りて之を殄滅し、遂に宇文氏の族を夷滅し、靜帝も亦害せられた。帝は蘇綽の子威を徵して度支尙書とした。威賦役を減じ務めて輕簡に従うた。帝又有司に命じて周の法を修正し、魏晉以下の律を采つて之を折衷し、笞杖徒流死の五刑を制し、後世多く之を遵用した。又官制を改めて、吏・民・禮・兵・刑・工の六部尙書を置いた。六部の稱は此れより始まつた。帝は性嚴峻にして自ら奉ずること儉薄に、よく百姓を愛養した。けれども詐術を以て國を得たものであるから、猜忌苛察にして功臣故舊の其の身を全うする者無く、後には子弟に至るまでも皆仇敵の如くであつた。初太子勇を廢して庶人となし、廣を以て太子としたが、會、廣の無禮を怒り、故の太子勇を召さんとしたので、廣は之を聞き人をして帝を弑せしめた。

吐谷渾

○吐谷渾

鮮卑の慕容廆の庶兄である。廆の位に即くに及び、渾は事を以て之を恨み、遂に其の衆を率ゐて西に徙り、陰山に傳うて居つた。永嘉年中八王の亂が起るに及び、隴を渡つて洮水の西に據つた。地方數千里即ち今の青海及び四川省は其の故地である。長子吐延嗣ぎ、其の子葉延に至つて始めて國號を吐谷渾と改めた。其の後樹落干に至り、自ら車騎將軍大單于と號し、其の死後弟阿柴に國を授けた。阿柴兵を出して近傍の諸國を併合し漸く強大となつた。其の後、齊の永明十年(皇紀一一五二年)魏に入朝し、次いで又之に寇したが、幾もなくして突厥に破られて漸く衰へた



が、唐の太宗の時（皇紀一二九五年）將軍李靖を遣はして其の地に侵入し、新に可汗を立てた。之より永く唐に隸屬し、其の後漸く衰微した。

### 第廿五章 唐の上太宗の功業。武韋の禍。制度

唐の一統

唐の一統 唐の高祖即位の初は、猶群雄が四方に割據したが、幸に次子世民の聰明にして大志を懐けるあり、部下にも亦名臣良將が雲の如くであつたから、遂に能く討伐の功を奏して、大唐三百年の基礎を定むることを得た。曩に煬帝が江都に弑せられた時に、隋の東都の留守王世充は、洛陽に於て越王侗を奉じて帝となし、宇文化及は、秦王浩（煬帝の姪）を煬殺して許帝と稱し、長樂王竇建德は、河北の諸州を取り、國號を改めて夏と曰つた。既にして王世充は、隋帝侗を廢して自ら鄭帝と稱したから、夏王建德も是を聞いて亦帝制を用ゐるに至つた。其の他涼王李軌は、河西に在つて帝を稱し、秦王薛舉は既に死したが、其の子仁杲（ジカウ）が嗣いで帝と稱し、梁王蕭銑（シャウセン）は江陵に帝を稱し、劉武周、梁師都も亦皆北方に雄視した。（前章参照）唐帝先づ人を遣し、詐りて涼主李軌を襲ひ、執へ歸りて之を殺し、河西は先づ平いだ。會、劉武周は、其の將宋金剛を遣し、唐の河東の諸州を取つたから、唐の武德三年に、世民が撃つて大に之を破り、金剛及び武周は皆走

死した。次いで世民は鄭を撃つたが、鄭主世充は救を夏に求めたので、夏王建德は兵を出して之を救つたから、世民は大に之を破り、建德を斬り世充を赦したが、尋いで人に殺された。次いで又梁主蕭銑が出で降つたから、長安に送つて之を殺した。時に建德の故將の劉黑闥（リウコウタウ）が、兵を起して夏の舊境を復し、漢東王と稱したが、世民は大に之を破り尋いで殺した。此の間に吳王李子通は、梁王沈法興を襲つて之を殺し、其の地を取つて勢が頗る盛であつたが、杜伏威に執へられて唐に送られ、次いで伏威も亦唐に入朝した。時に楚主林士弘は死んで其の衆は解散し、東南の地は全く平定した。尋いで公祐（コウソウ）が反して宋帝と稱したが、翌年討平せられ、江南全く平いだ。是に於て群雄皆亡び、天下始めて定り、惟だ梁師都のみ猶存したが、太宗の世に至つて亡びた。

太宗の即位

太宗の即位 唐の高祖が晉陽に起つたのは、もと皆世民の謀であつたから、高祖は世民に謂つて曰く、事が成つたならば當に汝を太子としやうと。諸將も亦皆世民に請うたが、世民は固辭して受けなかつた。けれども其の兵を用ふることが神の如く、戦うて勝たざるなく、攻むれば取らざる無く、能く帝を輔佐して群雄を裁定したから、高祖は其の功を賞して、特に天策上將の官を置いて、世民を以て之に任じ、位王公の上に在らしめた。世民は、又内に帝を助けて官制を定め、學校を興し、以て唐室創業の基礎を確立

天策上將



した。かくて國內漸く平らかなるに至つたから、世民は文學館を興し、杜如晦、房玄齡、虞世南、褚遂亮、姚思廉、陸德明、孔穎達、李玄道、蔡允恭、薛元敬、顏相時、蘇勗、于志寧、蘇世長、薛收、李守素、盖文達、許敬宗等の所謂十八學士を任命して、本官の外に文學館學士を兼ねしめ、これを三番に分ち、交代して館中に至つて文籍を討論せしめ、或は夜分に至ることもあつた。是より先き、高祖は長子建成を皇太子とし、次子世民を秦王に、季子元吉を齊王に封じたが、太子建成は酒色遊畋を好み、弟元吉は驕侈にして過失多く、獨り世民の功名のみが日に隆になつたから、建成は心中に自ら安んぜず、乃ち弟元吉と謀を協せて世民を除かんと欲した。世民も亦豫め其の謀を察知したが、武德九年に建成、元吉は私に世民を害せんとしたから、杜如晦、房玄齡、長孫無忌、尉遲敬德等は、世民に建成・元吉を殺さむことを勧めた。世民も漸くにして之を肯んじ、密に高祖に奏して、明日兵を玄武門に伏せ、建成、元吉の入朝を窺ひ、急に射て之を殺した。之を玄武門の變といふ。高祖即ち世民を立て、太子と爲し、國事を悉く太子に委ねて處決せしめ、然る後聞奏せしめた。高祖は尋いで自ら太上皇と稱し、詔して位を太子に傳へ、太子即位し貞觀と改元した。是を太宗文武皇帝と爲す。時に皇紀千二百八十七年である。

貞觀の治

太宗既に即位して、杜如晦、房玄齡、魏徵等の名臣を用ひ、大に意を政事に注ぎ、精を勵まして治を圖つた。會、或人が奏して、法を重くし盜を禁せんことを請うたが、帝は曰く、當に奢を去り費を省き、徭を軽くし賦を薄くし、廉吏を專用し、民をして衣食に餘有らしめば、自ら盜を爲さざるに至るだらう、安んぞ重法を用ゆるの必要があらうかと。貞觀元年には關内が大に饑乏、二年には諸道に大に蝗害があり、三年大水があつたが、帝は勤めて之を慰撫したから、民は嘗て怨嗟せなかつた。同四年には大に稔つたので、米價が甚だ賤しく、人々給し家々足り、終歲死刑に處した者が僅に十九人、海内升平に、路遺を拾はず、夜戸を閉さず、商旅野宿すといふ有様であつた。帝は常に自ら驕侈を以て誠となし、先づ宮女三千餘人を放つた。帝嘗て曰く人主は惟だ一心であるが、之を攻むる者は甚だ衆い、即ち或は勇力を以てし、或は辨口を以てし、或は諂諛嗜欲を以てし、輻湊して各、自ら售らんことを求めるから、人主たる者は一度び懈つて其の一を受ければ則ち國は危い。此れ其の誠に難き所以であると。帝又嘗て侍臣に問うて曰く、創業と守成と何れが難いかと。房玄齡が曰く、草昧の初には、群雄が並び起り、力を角して然る後之を臣とするのであるから、創業が難いと。魏徵は曰く、古より帝王は之を艱難に得て、之を安逸に失はぬ者は無いから守成が難いと。帝曰く、玄



太宗の好學

齡は吾と共に天下を取り、百死の中に一生を得たから、創業の難いことを知つて居り、徴は吾と共に天下を安んじ、常に驕奢は富貴に生じ、禍亂は忽に<sup>ユルガセ</sup>する所から生ずるを恐れ、居るから、守成の難いことを知るのである。今や創業の難は去つたから、守成の難は諸公と共に之を慎まうと。太宗は武功を以て天下を得たが、終には文徳を以て治平を致し、儒を崇び學を好み、弘文館を置き、四部<sup>(經史子集)</sup>の書二十餘萬卷を聚め、虞世南、褚遂良、歐陽詢等は本官を以て弘文館學士を兼ね、帝、政を聽くの餘暇に、引いて内殿に入れ、前言往行を論し、政事を談議し、時に或は夜分に至ることもあつた。又三品以上の子弟を以て弘文館の學生に充て、其の能く一經以上に明らかなる者は皆官に補することを得しめ、學舎を増築し、學生を増して三千餘員となしたから、文運が大に勃興し、四方の學者は京師に雲集し、高麗、百濟、新羅、高昌<sup>(西域の國名。今の甘肅鎮西の西境)</sup>、吐蕃<sup>(今の西藏)</sup>等の諸君長も、亦皆其の子弟を國學に入らしめんことを請ひ、講筵に列する者が八千餘人に及んだ。帝は師説が徒らに門多くて、章句繁雜なるを以て、孔穎達に命じて諸儒と五經の疏を定めしめ、之を正義というた。帝は又自ら神采が臣下の畏なる所となつて居るのを知り、常に溫顔を以て群臣に接し、努めて人を導いて諫を入れしめた。魏徵最も善く諫めたが、貞觀十七年に徴が卒した時、帝は嘆じて曰く朕一鏡を失ふと。よつて自ら碑文を

凌烟閣

石に書せしめた。是の歳帝又命じて、長孫無忌、趙郡王孝恭、杜如晦、魏徵、房玄齡、高士廉、尉遲敬德、李靖、蕭瑋、柴紹、侯君集、虞世南、李世勣等二十餘人の功臣の像を凌烟閣に畫かしめ、以て其の功績を表彰した。斯くて太宗は在位二十三年、内は官制を整頓し、文教を興し、外は國威を海外に發揚し、天下が能く治まつたから、後世の治をいふ者は、常に範をこゝに取り、稱して貞觀の治というた。

唐の制度

**唐の制度** 凡そ一國家を爲せる以上は、制度の必要はいふまでもない。況んや國威の盛なる唐代の制度は、後世支那歴代の典範なるのみならず、我が國の大寶令を始め、朝鮮の諸制度の如きも、皆範を之に採つたものである。而して其の制度は、多くは源を隋に發し、更に之を改定し、高祖・太宗・高宗三代を経て殆ど完成せられたものである。

官制

三省・六部  
三師・三公

**官制** 中央政府には上に尙書・中書・門下の三省があつて天下の政務を統べ、其の下に尙書省に屬する吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部の六部があつて行政事務を分擔した。而して別に又三師、三公がある。三師とは太師、太傅、太保をいひ、三公とは太尉、司徒、司空をいふので、共に位が高く、實權は無く、其の人が無ければ則ち缺くを例とし、所謂常設の官ではない。故に中央政府の大政を掌る者は即ち三省と六部とである。中書省は、天子の詔勅の立案宣奉を掌る所であつて、其の長官を中書令といひ、門下省



宰相

は詔勅を審議することを掌り、其の長官を侍中といひ、尙書省は、百官を總領し、又中書の宣奉し、門下の審査して、既に確定せる詔勅を、天下に施行することを掌り、其の長官を尙書令といつた。右の外に秘書省、殿中省、内侍省の三省があるが、前三省の如き重要なものではない。太宗は嘗て尙書令であつたから、其の後臣下の者は避けて敢て其の職に居らなかつたので、左右の僕射が尙書省の長官と爲り、侍中、中書令と共に宰相と稱した。僕射は尙書令の副官(即ち尙書省の次官)であつて、左右の二司がある。六部の長官を尙書といひ、吏部、戸部、禮部は左僕射に屬し、兵部、刑部、工部は右僕射に屬した。吏部は官吏の選叙勳封考課に關することを掌り、長官を尙書といひ、次官を侍郎といふた。戸部は天下の戸口租稅交通國庫の出納等の事を掌る。禮部は天下の禮儀、視察、卜筮、醫藥、道佛に關する事及び諸蕃朝聘の事を掌つた。兵部は天下の軍防兵器驛傳及び武官選叙に關する事を掌つた。刑部は天下の司法及び役隸囚關門の出入を監する等の事を掌り、工部は天下の造營屯田山澤河溝堤池等に關することを掌つた。以上各部に尙書(長官)が一人、侍郎(官次)が二人あり、又各部に四司があつた。之を二十四司というた。斯くて三省の長官たる尙書令、中書令、侍中は各分掌があつたが、宰相の職は統べざる所無く、一省に局すべきでないから、三省の職を合せて、政治堂を門下に設け、以て宰

同中書門下三品

同平章事

道・州・縣

都督府

都護府

相が事を議するの所と爲し、後之を中書に徙した。貞觀中李世勣が、太子詹事(官名)を以て中書門下三品に同ぜられ(中書令侍中に同じきを謂ふ)てから、宰相たる者は皆同中書門下三品の稱を加ふることとなり、又高宗の朝に、侍郎郭待舉等が、同中書門下平章事(中書門下と同じくし事を平章せしむるの意)と爲つてから同平章事の名が茲に起り、遂に宰相の職となつた。以上の他に一臺、九寺、五監、十六衛府等があつて各政務を分掌した。其の職掌は別表の如くである。又東宮の官職には、詹事府、左右春坊、家令寺、僕寺、諸率府等があつた。以上の諸官を京官(或は内官)と稱し、地方官を外官と稱した。地方は太宗の貞觀元年に、山河の形勢によりて國內を關内、河東、河南、河北、山南、隴右、淮南、江南、劔南、嶺南の十道に分ち、道の下に州があり、州の下に縣があり、縣に令を置き、州に刺史を置いて其の管内の民治を掌らしめ、道毎に巡察使を置いて其の治績を監察せしめた。其の他數州に都督府を置き、都督を任じて其の民政を掌らしめ、又邊陲の地には都護府を置き、都護を任じて諸蕃の慰撫に當らしめた。後世の節度使は蓋都督都護より出たものである。



唐の中央政治官制			
三省	長官	分掌事務	尙書令副
中書省	中書令	天子の詔勅を宣奉す	吏部 (官吏の進退を掌る)
尙書省	尙書令	既に確定したる詔勅を天下に施行す	戸部 (賦税を掌る)
門下省	侍中	詔勅を審議する事を掌る	禮部 (禮儀を掌る)
			兵部 (軍事を掌る)
			刑部 (刑罰を掌る)
			工部 (土木を掌る)
			右僕射
			左僕射
			六部

六省			
名稱	長官	職	掌
尙書省	令	百官を總領し端揆を儀刑す	
中書省	令	侍從獻替制勅冊命の事	
門下省	侍中	帝命を出納し禮儀を贊相する事	
秘書省	監	經籍圖書の事	
殿中省	監	衣服乘輿の事	
內侍省	內侍	宮内に供奉し制令を宣傳する事	

五監			
名稱	長官	職	掌
國子監	祭酒	學校教育	
少府監	監	百工・巧技等	
將佐監	大匠	土木・工匠等	
軍器監	監	弓箭・甲冑等	
都水監	使者	川澤・津梁等	

一臺	
名稱	長官
御史臺	大夫
職	職
	刑憲の事。糾彈の權有り
	掌

九寺			
名稱	長官	職	掌
大常寺	卿	禮樂・宗廟・祭祀等	
光祿寺	卿	酒醴・膳羞の事	
衛府寺	卿	武器・車馬の事	
宗正寺	卿	皇族及外戚の族籍の事	
太僕寺	卿	廐牧・輿馬の事	
大理寺	卿	折獄・詳刑の事	
鴻臚寺	卿	賓客・凶儀の事	
司農寺	卿	倉儲・委積の事	
太府寺	卿	財貨・藏市の事	

尙書省の六部					
名稱	長官	職	掌		
吏部	尙書	官吏の任免・叙勳・考課等の事			
禮部	尙書	籍班田等の事			
尙書	兵部	禮儀・祭祀・燕饗・貢舉等の事			
刑部	尙書	軍衛及び武選の事			
工部	尙書	律令・刑法・徒隸・鬪禁等の事			

田制・税法 唐の高祖は、齊隋の制に依りて、均田・租・庸・調の法を定めた。即ち丁中(十六歳以上)の男子には、田百畝(唐の制五尺を歩とし、二百四十歩を畝とし、百畝を頃とす)を給し、其の内二十歩を永業とし、其の餘を口分とし、死すれば則ち之を收めた。而して之を收授するには、毎年十月より十二月の間に於てし、賣買、貼賃、典



質することを禁じた。人口に比して土地の廣き所を寛郷とし、少き地方を狭郷といふた。狭郷に於ては田を授くるに半ばを減じ、郷を徙し又貧にして葬を營むことの出來ない者には、永業田を賣ることを許した。狭郷より寛郷に徙る者は、并せて口分田を賣ることを得ししめ、己に賣つた者には復た授けない。土地の賣買は政府の嚴禁する所であつたが、早くから密かに行はれたもの、如く、開元の頃には、富豪の兼併する所となつた者が漸く多く、遂に安史の大亂に及んでは、此の法も全く崩るゝに至つた。税法は租・庸・調を重ねるものとし、其の他雜徭、鹽鐵、商業稅、雜稅等があつた。租は即ち田稅であつて、田百畝より粟(米)二石(約我三斗九升)を納めしめ、調は家稅で、郷土に應じて其の地の產物即ち絹・綾・緞・綿布・麻等を納めしめた。庸は口稅で、丁男は毎歲二十日間公役に就くを要し、若し役に就かざる者は、一日に三尺の割を以て絹を代納せしめ、之を庸布といつた。若し又事あつて役を加ふること十五日に亘れば、其の調を免じ、三十日に及べば租調共に免じた。又水旱蟲霜等の害があつて、其の收穫が十分の四を減ずる時は租を免じ、六を損ずる時は租調を免じ、七を損ずれば課役皆免じた。而して毎年計帳を造り、三年毎に戶籍を作りて勵行したが、世を経るに従つて必しも行はれざるに至り、則天武后の頃より、民の徭役を避けて逃亡する者が漸く多く、法令弛廢して賦斂が定ら

なくなつた。安史の亂後は國用は給せず、苛斂甚しく、百姓は益々殘瘁した。尋いで徳宗の時に兩稅法を行ふに至り、唐初の田法は全く壞れた。

兵制

兵制 唐の初め京師には天子の禁軍あり、地方には府兵ありて之を鎮せしめた。禁軍には南衙北衙の兵あり、南衙の兵は諸衛兵で、北衙の兵は禁兵である。高祖の時には禁兵三萬餘人あつたが、其の後次第に増加し、玄宗の時には左右羽林軍、左右龍武軍、左右神武軍となり、之を北衙六軍と稱した。後又左右神策、左右神威の二軍を増して十軍とした。南衙の諸衛は十六衛より成り、衛兵は府兵より徵集せしものにかゝる。之を衛士と稱し、府の遠近により番を定めて京師に上らしめた。府兵は即ち地方の兵で太宗は後周の制に基づき、天下十道に六百三十四の折衝府を置き、其の内二百六十一は、特に關内道に置き、共に折衝都尉をして之を統領せしめた。而して府に上中下三等の別があり、上府は千二百人、中府は千人、下府は八百人、皆諸衛に隸し、兵合せて六十八萬あつた。隊の編成は十人を火とし、五十人を隊とし、三百人を團とし、而して火に長を置き、隊に正、團に校尉を置いた。府毎に三又は四の團(九百人乃至千二百人)があつて折衝都尉が之を統率した。徵兵の法は丁男二十歳より六十歳の中で其の三分の一を採りて之を府兵とした。府兵は課役を免ぜられ、平時は耕作に従ひ、冬季農閑の時を選び、



出府して訓練を受けた。各府兵の内より毎年交代して京師に上り、衛府の兵士と爲りて皇城を守護するものを衛士というた。然るに高宗以後は其の制が漸く壞れ、玄宗の朝に至つては宿衛に充つる能はざるに至り、京畿の府兵及び白丁十三萬を募りて諸衛に隸屬せしめ、之を曠騎と名づけたが、此の制も忽ち衰へ、諸州の府兵も亦益々壞敗したから、遂には市井無頼の徒を募つて宿衛に充つるに至つた。然れども、此等の徒は、徒らに遊惰に耽りて武技を練習せず、加之當時の宰相李林甫は武將を重んぜなかつたから、世を擧げて武人を輕んずるの風を生じ、軍紀頽廢して、兵士は甲冑を著くるの術さへ知らざるに至つた。故に安史の亂が一度び起るや、賊軍は恰も無人の境を行くが如きものであつた。亂後は兵制が全く壞れ、遂に藩鎮の兵が起つて跋扈を極むるに至つた。

**學制** 唐の學校教育は、五監の一なる國子祭酒(祭酒は長官)が之を總監し、京師に國子學、大學、四門學、律學、書學、算學の六學館を置き、學毎に博士助教を置き、唯だ書・算の二館のみは助教を置かない。又別に門下省に弘文館を置き、東宮に崇文館を置き、皇親外戚及び貴近の子弟を入學せしめた。地方には府學、州學、縣學の設があり。學生は其の大小に従つて定員に差があり。八十人より二十人に至つた。學校の教科は經書を主とし、禮記左傳を大經とし、詩經、周禮、儀禮を中經とし、書經、易經、公羊傳、穀梁傳

學制

を小經とした。六學館は最も樞要なる學府であつて、人材の養成を目的とし、此に入學する學生の身分、定員、出身者の資格等は各異なつて居つた。

學館名	入學生の身分	學生定員	出身者の資格	教官
國子學	文武官三品以上の子孫	三〇〇人	明經・進士の科に應ず	博士、助教
大學	同四・五品の子孫	五〇〇人	同右	同上
四門學	六品・七品の子及び庶人の俊異なる者	一三〇〇人	同右	同上
律學	八品以下の子及び庶人の其の事に通ずる者	五〇人	明法の科に應ず	同上
書學	同右	三〇人	明書の科に應ず	博士
算學	同右	三〇人	明算の科に應ず	同上

法制

刑

**法制** 支那の刑法は、魏晉の時代に、秦漢の律を改修するによりて漸く備はり、隋唐に至りて完成した。唐の法制は隋の刑律を基礎とし、之に儒教經典の旨を參酌して編纂したもので、名例、衛禁、職制、戶婚、厩庫、擅興、賊盜、鬪訟、詐僞、雜律、捕亡、斷獄の十二律と、笞、杖、徒、流、死の五刑とより成つた。笞、杖、徒の三刑は各五等に、流刑は三等に、死刑は絞斬の二等に分れた。



隋 唐 の 五 刑					
刑名	笞刑	杖刑	徒刑	流刑	死刑
一等	十	六十	一年	二千里配 役二年	絞
二等	二十	七十	一年半	二千五百里配 役二年半	斬
三等	三十	八十	二年	三千里配 役三年	
四等	四十	九十	二年半		
五等	五十	百	三年		

又十惡と八議とがある。八議に當る者の犯罪は、別に評議に附して宥恕減刑の規定があるが、十惡は罪の最も重きものであるから、之を犯した者は、假令八議に當る者と雖

も、毫も假借する所は無かつた。又老者(九十歳以上)・幼者(七歳以下)の如きは、死罪を犯すとも其の罪を論ぜず。其の他再犯には加重し、自首は輕減し、二罪俱發は重きに從ひて處斷した。

唐以前の官吏登庸法

唐以前の官吏登庸法 官吏登用の法は、周代に既に定まつたが、當時の任官は、主として德行才識に依り、必しも考試(學科試験)に依つたか否かは明らかでない。戰國の世に秦の孝公は、富國強兵を務めとしたから、任官仕進の途は唯だ敵に勝つことに在つたが、漢初國內の既に平らぐるに及んでは、士を取ることが漸く廣く、或は郡國の薦舉により或は公府の辟召により、或は世胄を以て郎吏と爲る者もあつた。漢の文帝は頗る治を重

んじ、即位の十五年に、天下の諸王侯・公卿・郡守等に詔して、賢良・方正・直言・極諫の士を舉げ、帝親ら之を策問して諸吏と爲した。尋いで武帝の時に至り、董仲舒の策を用ゐ、郡國をして、吏民の學徳共に優れた者を舉げしめ、朝廷之を考試し、其の對策の如何によりて選用することとした。然れども、兩漢共に、其の盛名の天下に聞ゆる者に對しては策問を用ゐず、特に朝廷の辟召によりて官職を授けたから、後漢の末年には、處士にして或は矯飾して名を竊み行を偽るの徒が出づるに至つたから、詔して士を舉ぐるには先づ試むるに職を以てし、然る後選に充つるを得しむる事としたが、郡國の守が相怠つて此の法を奉ぜず、或は託請に因つて濫りに吹聴などして、弊害が頗る多かつたから、順帝(後漢第八世)の時、薦舉の制を改めて、郡國の孝廉を推薦するは年齢四十以上とし、儒生は經學を、文吏は牋奏を考試し、繆舉する者は皆其の罪を正したから、是よりは推選正しく、吏に多く其の人を得るに至つた。魏の文帝(丕)の時、吏部尙書陳群の策に從ひ、州郡に皆中正官を置き、其の州郡内の賢にして識鑑ある者を撰んで之に任じ、之をして所管内の人物を區別し、九等(上上より下下まで)と爲して朝廷に進めしめ、尙書は更に其の狀に據つて登庸して官を授けた。之を九品中正の制というた。晉も亦魏の制に依つたが、其の後中正の任が久しきに及んで、愛憎が從つて生じ、九品の制は漸く弊れ、遂には惟だ閥



族を重んじ、其の賢愚を辨ずる無きに至つた。其の後南北朝の世も、此の法に據り大變  
 更は無かつたが、隋初に至りて始めて罷めた。隋の煬帝は始めて進士科を設け、詩賦及び  
 策を試み、以て士を採ることとした。之を要するに唐以前の官吏登庸法は、周代の制は  
 詳かでないが、兩漢より魏晉に亘つては、或は策問によりて採用したこともあるが、主  
 として人物德行により、或は門閥によりて決定した。南北朝の頃には、徒に門閥に因る  
 の弊風が行はれ、中正の官が却つて不正の行爲多かつたから、隋に至つて大に其の制度  
 に改革を加へた。

唐代の官吏登庸法  
 生徒  
 貢舉  
 制舉

唐代の官吏登庸法 唐代の官吏登庸法は、主として隋の舊制に基いて、更に之を擴張  
 したもので、選舉の方法は、生徒、貢舉、制舉の三種に別れた。即ち京師の八學館（國  
 子學・四門學・律學・書學・算學の六學館と弘文・崇文の二學館）と、地方の府州・縣學より  
 の出身者を生徒といひ、學校の出身に非ずして自ら州縣の考試を経て合格した者を貢舉  
 といふた。生徒、貢舉共に尙書省に至りて試に應じた。考試の科目は秀才・明經・進士・  
 明法・明書・明算の六種で。就中秀才は其の程度が最も高くて、方畧策五道を課し、進  
 士は雜文二篇時務策五道を試みた。その他明經は經學を主とし、明法は律令を、明書は  
 書道を、明算は數學を試みた。試験の期日は毎年十一月とした。此等歲舉（毎年之を行ふ）の他に

別に制舉として、天下非常の才を得んが爲めに、數年に一回之を行ひ、天子が親しく臨み  
 て策問し、文策高き者には特に美官を授けられた。開元以後藝文甚だ盛に、天下の士が  
 相率ゐて舉業を競ひ、舉人は毎歲二三千人に及び、中及第する者は大抵二十分の一、制  
 舉に至つては則ち纔に百人中の一人に過ぎなかつた。此等の科舉に合格せる者の中、更  
 に左の四事に該當する者を以て官吏に任用した。即ち一に曰く身は其の體貌豊偉なるを  
 要し、二に曰く言は其の言詞の辨正を取り、三に曰く書は其の楷法適美なるを取り、四  
 に曰く判は其の文理優長なるを取ると。されば官吏たることは誠に難事であつたといは  
 れる。

日唐の交通

女王卑彌呼

日唐の交通 我が國と支那との交通は其の始は明らかでないが、後漢書に曰く「武帝  
 朝鮮を滅してより使譯漢に通ずる者三十許國」又「建武中元二年、倭國王帥升等生口を獻す」等  
 光武帝賜ふに印綬を以てす」といひ、又「安帝永初元年、倭國王帥升等生口を獻す」等  
 という居る。然れども是は勿論皆我が西邊土豪の私交である。三國志に「女王卑彌呼  
 といふ者、洛陽に至り朝獻す。魏の明帝使を遣はし、封じて親魏倭王と爲し、金印紫綬  
 を假し、賜賚甚厚し」とある。卑彌呼とは蓋我が西邊の女酋であつたらしい。神功皇后  
 の新羅を征せられた時に、漢人の韓地は在つた者が多く我が國に來た。又漢の靈帝の後



裔と稱する阿知使主の我が國に歸化するや、朝廷は使主を吳に遣はして縫工を求めしめたので、吳王工女四人を與ふとある。是れが我が朝使の支那に至つた事の、我が國史に見えたもの、初めである。吳王は即ち晉帝である。仁徳天皇の朝には、彼我の使が互に通交したことが、彼我兩國史に記載してある。雄略天皇の朝に、使を遣はし吳の工女を求め、使者、吳の使及び諸工女を伴ひて共に還ると、國史に記載してあるが、宋書には此の事を記してないのを見れば、朝廷の關せざる所であつたと思はれる。推古天皇の時、聖徳太子が政を攝し、佛教を興隆し、彼の制度文物を輸入せんと欲し、十五年(隋の煬帝大業三年)小野妹子を遣はし、煬帝も亦翌年、使者裴世清等を遣はし、妹子に従ひ來つて書を遣り、且つ我が國風を觀察せしめた。裴世清が還るに及び、復た妹子をして之を送らしめ、學生學僧等多く之に従うて彼の地に留學した。唐が起るに及んで、我が舒明天皇の朝に、犬上御田歙を遣はし往いて聘せしめた。時は恰も唐太宗の貞觀四年に當つて居る。是より唐との使聘相通じ、我が學生學僧の彼の國に留學する者が頗る多く、儒佛の教が盛に行はれ、典禮制度等皆彼を模倣するに至つた。孝徳天皇の朝に吉士長丹を唐に遣はし、學生學僧の從ふ者二百餘人。時に新羅は、高麗・百濟と相攻争したが、唐の高宗は、書を我國に遣り、兵を出して新羅を援けんことを請うたが従はなかつた。文武天皇の朝に粟

田真人を遣はしたが、真人學を好み文を能くしたから、唐人大に之を稱し、則天武后は厚く之を遇して、司膳卿を授けた。元正天皇の朝、多治比縣守等を唐に遣はし、阿部仲磨、吉備眞備等が、留學生と爲つて之に従うた。此の時は、實に唐の極盛時代で、我國も亦其の風化を蒙り、學藝益進み、舊俗日に變じた。其の後聖武・淳仁・光仁の朝に、皆使節を遣はし、平城嵯峨淳和の三朝は、遣唐使無く、仁明の朝に藤原常嗣を遣はした。初め朝廷唐の文物を愛し、頻りに使聘を通じて之が輸入を圖つたが、光仁桓武の朝に至つては、文化既に開け、制度大に整ひ、復た多く彼に需むるを要せざるに至つた。又一方に於て當時は未だ航海造船の術も精しからず、使節の船が屢々覆没し、或は海島に漂著して夷賊に害せられたこともあり、加之、當時唐國は漸く亂れ、陸路も亦頗る危険であつたから、會々宇多天皇の寛平六年(唐昭宗の代)に、參議菅原道眞が遣唐大使に任せられたが、上書して其の利弊を論じたので、朝議は遂に遣唐使を罷めた。是に於て兩國々際交通は永く廢絶したが、僧侶の往いて法を學ぶ者は絶えなかつた。其の後唐滅び宋興るに及んでも、兩國商人の往來は絶えなかつた。

**都護の設立** 都護府の名は、漢の宣帝が西域都護を置いた時に始まつたが、唐に至つては、太宗・高宗英武の資を以て連りに外征の師を興し、其の威令東は韓半島より、



西は天山南北兩路を経て中央亞西亞に及び、南は林邑(南)を過ぎ、北は骨利幹(鐵勒の部、今のエニセイ)に及び、其の版圖の廣大なること前古未だ嘗て見ざる所であつた。唐は是等の領土を統轄するが爲めに、四邊に六都護府を列置した。其の所在地と管轄區域とを列記すれば左の如くである。

六都護府表

都護府の名	所 在 地	所 管 の 區 域
安東都護府	始、平壤(今の平安道平壤府) 後、遼東城(今の遼陽の北)	高句麗百濟の故地 (今の朝鮮の西北部)
單于都護府	雲中(今の山西歸化城の西)	突厥諸部の地(今の内蒙古の地)
安北都護府	回紇(今の外蒙古賽因諾顏部の境内)	鐵勒諸部の地(今の外蒙古の地)
北庭都護府	庭州(今の新疆迪化の東なる濟木薩)	西突厥の地(今の新疆省天山以北より露西亞の七川州までの地)
安西都護府	龜茲(今の新疆庫車廳)	西域諸國(今の新疆省天山以南より露西亞の中亞細亞までの地)
安南都護府	交州(今の東京の河内)	南海諸國(今の佛蘭西領印度支那等)

則天武后

則天武后 太宗崩じて高宗が即位した。太宗の才人(女官)武氏は故の荊州の都督士護の女で、太宗が召して後宮に入れた者であるが、太宗崩じ、才人年二十六であつたが、群

妾と與に尼と爲つた。會、高宗の皇后王氏が蕭淑妃と寵を争ひ、密かに武氏をして髮を蓄へしめ、高宗に勧めて之を納れしめた。斯くて武氏が宮に入るや、后と淑妃とは、共に皆寵を失つた。永徽六年に至り、高宗は后を廢して武氏を以て之に代へんとし、佞臣許敬宗李義符等は之を贊したが、褚遂良は可かなかつた。帝よりて李勣に問うたが、李勣曰く、此れ陛下の家事であるから何ぞ必しも更に外人に問ふに及ばないと。帝遂に武氏を立て、皇后と爲し、遂良はよつて貶せられた。武后は曩に長孫無忌が己を助けなかつたのを怨み、誣ゆるに謀反を以てし、官を削り尋いで之を殺した。既にして高宗は風眩を病み政を視ることが出来ぬので、遂に武后に政治を委ね天后と稱したから、時人は之を二聖と謂うた。初め高宗は賤妾の子忠を太子としたが、是に於て武后は之を廢し、己が所生の子弘を立てた。弘は仁孝にして中外心を屬したが、后の意に忤つたので、后は之を酖し、其の次の賢を立て、又之を廢し、其の次の哲を太子とした。高宗崩じて哲即位し、之を中宗皇帝というたが、立ちて二個月にして太后又廢して其の弟旦を立てた。之が睿宗皇帝である。太后朝に臨み、故の太子賢を殺し、中宗を房州(今の湖北陽の南境)に遷し、遂に唐の宗室貴戚數百人を殺し、自ら璽と名づけ、聖神皇帝と號し、國號を周と曰ひ、睿宗を以て皇嗣と爲し、姓を武氏と賜うた。璽は時に年六十七であつたが、人心



則天大聖皇帝

の服せないのを知り、告密の門を開き、反逆を以て人を誣ひ、大臣の誅滅せらるゝ者數百家に及び、其の殘忍なることは古今に無比であつた。然れども又能く人を用ゐ、賢才も亦競うて之が用を爲した。中にも徐有功・魏元忠・婁師徳・狄仁傑・姚宗・宋璟等は最も顯はれた。後張易之・張昌宗兄弟を嬖し、國政多く二人に出て、二張の勢力は朝野を傾けた。神龍元年に璽は病篤かつたので、張東之等は兵を擧げて中宗を東宮に迎へ、易之兄弟を殺し、中宗位に即き、尊號を上りて則天大聖皇帝と曰うた。嬰制を稱すると七年。唐を易へて周と爲すもの十五年であつたが、此の年崩じた。年八十二。

韋後の亂

韋後の亂 中宗は嘗て太后(則天武后)の爲めに遷されて房州に在つた時、自殺せんとして毎に韋妃に止められたが、中宗與に私に誓つて曰く、幸に他日復た天日を見るを得ば、惟だ卿の欲する所は決して禁禦せぬと。位に復するに及んで、妃は復た皇后と爲つた。よつて帝の朝に臨む毎に、后は必帷幔を垂れて政治を聞くこと、武后の高宗の世に在るが如くであつた。帝の愛女安樂公主は武三思の子に適き、三思是を以て宮禁に入るを得、帝及び皇后に寵せられ、遂に張東之等五人を譖し、遠竄して之を殺した。景龍四年、人上奏して皇后淫亂なりと奏したので、帝之を面詰したが、其の人屈せない。中書令の宗楚客が、制を矯めて之を撲殺したが、帝の意は快々として樂まぬ。是に於て皇

后及び其の黨の者は始めて懼れ、事泄るゝを慮り、安樂公主も亦后の朝に臨んで已を以て皇太女と爲さんことを欲し、乃ち相與に謀りて餅餈中に毒を進めて帝を弑した。在位六年。帝の妹太平公主は遺制を草し皇子重茂を立てた。之を殤帝と爲す。韋后太后と爲り政を攝した。此の時睿宗の子隆基は密かに匡復を謀り、厚く羽林の豪傑に結び、兵を起して韋后及び安樂を斬り、其の黨を並せて皆之を殺し、殤帝を廢し、睿宗を奉じて重祚せしめ、己を立て、太子とした。時に皇紀千三百七十年である。

唐代の十道

○唐代の十道

太宗の時天下を分つて左の十道とした。

- (一) 關内道 略關中の地、今の陝西省の大部分及び甘肅省の東部二十二州を包括す。
- (二) 河南道 黄河の南に當る地で、今の河南・山東の二省及び江蘇・安徽二省の北部、二十八州を包括す。
- (三) 河東道 黄河の東に當る地、殆ど今の山西省の全部、十八州を包括す。
- (四) 河北道 黄河の北に當る地、畧今の河北省の全部、二十三州を包括す。
- (五) 山南道 北嶺山より以南の地、畧今の湖北省の大部分及び四川省の東部、三十三州を包括す。
- (六) 隴右道 隴山以西の地、今の甘肅省の大部に當る。二十州を包括す。
- (七) 淮南道 淮水以南の地、今の江蘇・安徽二省の南部及び湖北・河南二省の一部に當る。十四州を包括す。



八議

○八議

- (一) 議親 太皇太后皇太后總麻以上の親に及ぶ。
- (二) 議故 皇帝と縁故ある者。
- (三) 議賢 賢人君子にして言行が他の法則となる者。
- (四) 議能 國家有用の才能を有する者。
- (五) 議功 國家に功勞ある者。
- (六) 議貴 官職品級の高き者。
- (七) 議勤 文武大官の次に在りて夙夜公職に盡し若くは絶域に使し險難を涉れる。
- (八) 議賓 前代帝王の子孫等。

十惡

○十惡

- (一) 謀反 君父を害せんとする行爲。
- (二) 謀大逆 宗廟山陵及び宮闕を犯す等の類。
- (三) 謀叛本國に背きて外國に投ぜんとし自己の城を以て賊に従ふの類。

李淵

○李淵

(唐高祖神堯皇帝) 唐第一世。字は叔德。隴西成紀(今の甘肅省秦安縣)の人で、晉の西涼公

高七世の孫。其の祖の虎は魏に仕へて功有り、隴西公に封ぜられた。父暉周の世に唐公に封ぜられ、淵は爵を襲い、隋の煬帝淵を弘化の留守となしたが、衆を御すること寛簡であつたから、人多く之に附いた。煬帝は淵の相表が奇異であつて其の名が圖讖に應じたから常に淵を忌み、淵も亦之を畏れ、常に酒を縦にして深く自ら晦ました。會群盜起るに及び、淵を山西河東の撫慰大使と爲し、之を討たしめたが、多く捷を得た。次いで突厥が邊に寇したから、淵命を受けて之を征したが利あらず。煬帝よりて淵が寇を防ぐ能はざるを以て、使者を遣はし執へて江都に詣らしめた。時に淵の次子世民は淵に説いて意を決して計を定めしめたので、淵乃ち兵を募り、又使を突厥に遣はして其の援を借りた。斯くて諸軍を合せて長安を圍み、旬日にして之を抜き、遂に煬帝を尊びて太上



皇となし、恭帝を立て、淵自ら大丞相唐王となり、大業十四年九錫を加へ帝を稱した。之を唐高祖神堯皇帝とし、實に我が推古天皇の二十六年である。此の時に當り竇建德・李軌・劉武周・世充・蕭銑・劉黑闥・沈法興・李子通・林士弘・輔公祐等各地に占據したが、武德七年に至りて悉く之を平定し、遂に天下を一統した。高祖大に内政を改革し、律令を定め、郷學を置き、租・庸・調の税法を制定し、十二軍を置き、三公、六省を定むる等精を勵まして治を圖つた。かくて在位九年にして、位を太子に傳へた。

王世充

○王世充ワウセイヤク 初、隋煬帝に仕へた。帝南巡して江都に在るや、世充は東都に留守となつたが、煬帝が害せらるゝに及んで、東都留守官越王侗を立て、帝とした。帝は王世充等をして朝政を掌らしめた。李密が亂をなすに方り、世充討ちて之を走らせ、次いで帝を廢して自ら鄭帝と稱し、元を建て、開明と號した。既にして廢帝を弑し諡して恭帝と云うた。唐の武德三年秦王李世民が鄭を討つに及び、世充は救を夏の竇建德に請ひて共に唐軍を拒いだが、竇建德は敗れて擒にせられ、世充も唐に降つたが、後長安に於て世民の爲めに殺された。

竇建德

○竇建德トウケントク 漳南(縣名。清河郡に屬す、故城は山東恩縣の西北に在り)の人。隋國分崩するに當りて、大業七年に兵を起して長樂王と稱し、河北諸州を取り、國號を夏と號し、明年許主字文化及を破り、執へて之を殺し、王世充と好を結び、表を隋に奉じた。隋は仍りて夏王に封じた。唐の秦王世民の鄭を撃つや、鄭主王世充が救を夏に求めたから、建德は之を援けて唐軍と戦つたが、敗れて

劉武周

擒となり、唐の武德四年長安に斬られた。  
○劉武周リウブシウ 隋の馬邑(郡名。今の山西朔平大同)郡の校尉であつた。隋末に方り其の郡に據りて反し、突厥に附いて定楊可汗と爲り、遂に自ら帝と稱して樓煩(今の山西靜樂縣及び太原の西北境)・定襄今内蒙古歸化城土默特之地)・雁門(今の山西代)縣諸郡を取り、更に其の將の宋金剛を遣はして、切りに唐の河東の地を侵したから、唐の武德三年に、大に李世民の攻撃を受け、武周・金剛皆走死した。

劉黑闥

○劉黑闥リウコウケツ 夏主竇建德の將である。建寶の唐に亡さるゝや、兵を漳南に起して夏の舊境を復し、自ら漢東王と稱した。次いで世民に破られ、突厥に走りて其の兵を借りて入寇したが、其の將諸葛德威、黑闥を捕へて唐に降つたから、遂に殺された。

房玄齡

○房玄齡ハウエンレイ 字は喬孫。臨淄(今の山東省臨淄縣)の人である。幼より警敏善く文を屬し、書は草隸を兼ねた。唐の世民の渭北を徇ふるや、策を杖いて上謁し、一見舊の如く、遂に府の記室となり征伐に従ふた。世民は常に玄齡をして入りて事を奏せしむるに、高祖曰く、玄齡は吾が兒の爲めに事を陳ぶるに、千里を隔てゝも恰も面談するが如きであると嘆賞した。太宗位に即くや、玄齡と如晦と左右の僕射となつたが、玄齡は事を謀るに、必曰く如晦に非んば決することは出来ぬと、如晦に至るに及んで、卒に玄齡の策を用ゐる。蓋、玄齡は善く謀り、如晦は善く斷ずるもので、二人が心を同うして國に徇へたから、唐の世に賢相を稱する者は必房杜を推した。太宗嘗て侍臣に向つて、創



業と守成と孰れが難いかと問うた時に、玄齡は曰く創業難しと。帝曰く玄齡は吾と共に天下を取り、百死を出で、一生を得た、故に創業の難きを知るのであると。玄齡相位に在ること十五年。貞觀二十二年(皇紀一三〇八年)歿す。年七十。文昭と諡した。

杜如晦

○杜如晦

字は克明。初め房玄齡と共に唐の秦王世民に仕へた。時に秦府の屬僚多く出で、外官に補し、如晦も亦出たので、玄齡大に之を惜み、世民に謂つて曰く、餘人は惜むに足らぬも、杜如晦は王佐の才であるから、大王四方を經營せんと欲せば如晦に非んば不可であると。世民即ち奏して之を留め、帷幄に參謀せしめると、裁決流るゝが如くであつた。太宗即位するに及び玄齡と共に左右僕射となつて六部を總領し、二人心を協せて帝を輔け唐の國威は益揚つた。貞觀四年(皇紀一二九〇年)に歿した。太宗其の後、談如晦の事に及べば必涕泣した。皮日休が七愛の詩に曰く、「吾、愛ニ杜ト與ニ房、貧賤相聯歩、黃閣三十年、清風一萬古」と。

李靖

○李靖

字は藥師。三原(今の陝西長安縣)の人である。姿貌魁偉。嘗て人に語つて曰く、大丈夫功名を以て富貴を取るべし、何ぞ章句の儒となるに至らむと。其の舅韓擒虎嘗て與に兵を論じ、嘆賞して曰く共に孫吳を語るべしと。唐の貞觀四年突厥を撃ち、頡利可汗を陰山に破り、之を擒にして其の國を亡した。同九年吐谷渾を征し、可汗伏允を殺した。後疾を以て官を辭し、貞觀二十三年に歿した。靖、將相に出入し功業甚だ大に、衛國公に封ぜられ景武と諡した。

李世勣(李勣)

○李世勣

(李勣) 字は懋功。本姓は徐氏。曹州(今の山東省曹縣)の人である。唐の太宗より姓李を賜はつた。其の名世民であつたが、太宗の名世民を諱んで單に勣というた。隋末に李密に仕へたが後唐に歸した。太宗の貞觀四年李靖等と突厥を討つて大に之を破り、大酋長は多く李勣に降つた。勣并州の刺史となり止ること十六年、令行はれ禁止み夷民悅服し、世人は號して職を得たとした。太宗勣の功を賞して曰く、良將を得たるは長城を築くに勝れりと。同十五年勣を兵部尚書とし、同十七年太子詹事兼左衛率に轉じ、位を加へて特に同中書門下三品に進めた。同十八年太宗の高麗を親征するや、勣を遼東行軍大總管に任じ、遼東の數城を抜き、功を以て一子を郡公に封ぜられた。同二十年薛延陀を平らげ、同二十二年大常卿同中書門下三品に轉じた。同二十三年太宗將に崩ぜんとするや、太子(高宗)の爲に故らに勣を貶して疊州都督とした。此年太宗崩じ、高宗即位するに及び冊して尙書左僕射に拜し、乾封元年(皇紀一三二六年)遼東大總管となり、總章元年(皇紀一三二九年)高麗を討つて之を亡し、同二年太子太師を加へた。次いで歿した。年七十六。勣將となり謀あり善く斷じ、人と事を議するに善に従ふこと流るゝが如く、戰勝てば則ち功を下に歸し、得る所の金帛は悉く之を將士に散じた、故に人々死を致すを思ひ、向ふ所克捷した。貞武と諡した。

王珪

○王珪

字は叔玠。太原(今の山西省太原)の人。唐太宗に事へて諫議大夫となり、誠を推し忠を納れて獻替する所が多かつた。黃門侍郎に上り侍中に進み、杜如晦、房玄齡、李靖、魏徵等と同じく國政に參與した。上嘗て問ふ。卿は、玄齡以下の數子と何れぞやと。對へて曰く、孜孜として國に奉じ知つて言はざる無き點は臣は房玄齡に及ばぬ。才文武を兼ね、入つては相、出でゝは將たるは



臣李靖に如かず、君の堯舜の如くならざるを耻ぢ、諫諍を以て己が任となすは臣魏徵に如かず、濁を激し、清を揚ぐるに至つては臣は數子に比して亦微長があると。帝深く之を然りとし、時人も亦其の確論に服した。貞觀十一年魏王泰の師となつた時に、帝泰に謂つて曰く、汝珪に事ふることは恰も我に事ふる如くせよといはれた。同十三年卒す。吏部尙書を贈られ、懿と諡した。

魏徵

○魏徵

字は元成(或は玄成)。魏州曲城(今の山西省解縣)の人である。唐の高祖に他へて東宮の官屬となり、屢太子建成に勸めて秦王世民を除かしめんとした。既にして太子却つて世民の爲めに殺さるゝに及び、世民魏徵を召して責むるに兄弟を離間するを以てした。然るに徵は神色自若として居るので、世民因りて之を禮し、用ゐて諫議大夫とした。これよりつとめて諫を奉ること前後數十疏。貞觀十三年に徵上疏して帝の志、貞觀の初に比して漸く終を克くせざる者十條を陳べた所、帝深く獎歎した。帝嘗て侍臣に問ふに、創業と守成と何れか難きかを以てした時、魏徵曰く、古より帝王之を艱難に得て之を安逸に失はざるは莫し、故に守成は難しと。帝曰く魏徵は吾と共に天下を安んず、常に驕奢は富貴に生じ、禍亂は忽にする所に生ずるを恐る、故に守成の難きを知る、然れども創業の難は既に往いた、守成の難は方に諸公と之を慎まうと。貞觀十七年に徵卒した。帝曰く、銅を以て鏡と爲せば衣冠を正すことを得、古を以て鏡と爲せば興替を見ることを得、人を以て鏡と爲さば得失を知るを得る。徵没して朕一鏡を失うたと。自ら碑文を製して石に書し、鄭國公に封じ文帝と諡した。徵は嘗て書隋本紀外傳を著した。

蘇定方

○蘇定方

冀州武邑(今の河北省武邑縣)の人。父邕隋の大業の末年に郷閭を率ゐて賊を討じた時、定方は十餘歳であつたが、勇武絶倫能く父に従つて賊を捕へた。貞觀の初め、李靖に従つて突厥の頡利可汗を攻めし時は、定方が主として之を平らいた。永徽中、行軍大總管となりて突厥の阿史那賀魯を征し、大に之を破り、悉く西陲を定め其の地を州縣とし、功を以て左驍衛大將軍邢園公となつた。其の後又疏勒、葱嶺を征し、百濟を討じ悉く其の地を定めた。左武衛大將軍に拜し乾封二年(皇紀一三二七年)卒す。年七十六。高宗悼惜し幽州都督を贈り莊と諡した。

侯君集

○侯君集

三水(今の陝西省三水縣)の人。唐太宗の時、魏徵、君集を薦めて、宰相の才あり宜しく諸衛の兵馬を專知せしむべきを上奏した。貞觀十二年吐蕃を討ちて功あり。同十四年交河大總管に拜せられ高昌を討つて之を亡し、其の地を西州と爲した。其の後、君集珍寶を私すと劾奏した者があり、詔して獄に投ぜられたが、後中書侍郎岑文本の上書に由りて免るゝことを得た。貞觀十七年に太子廢立の事があつた。初め太子承乾は不才であり、魏王泰は多能にして寵があつたので、潛に嫡を奪ふの志を有した。會々侯君集は承乾の暗劣なるを以て、泰に反を勧めたが、事覺はれて、泰は廢して庶人とせられ、君集も坐して誅せられた。

褚遂良

○褚遂良

字は登善。錢塘(今の浙江省錢塘縣)の人である。博く文史に涉り且つ隸・楷の書を能くした。貞觀中、諫議大夫となり起居註を兼ね、後、黃門侍郎となり朝政に參綜した。太宗崩じ喜宗立つや、顧命を奉じ長孫無忌と共に政を輔け、尋いで尙書右僕射となつた。會、高宗皇后を廢して



徐有功

武氏 則天武后を以て之に代へんとした時に、佞臣許敬宗・李義符は之に贊したが、褚遂良は可かず遂に愛州の刺史に貶せられ、竟に憂を以て卒した。

○徐有功ジョウイウコウ 南海の人。唐武后の時、蒲州の司馬となり、常に仁恕を以て治を爲し、侍御史に遷つた。時に道州刺史李行褒酷吏の陥るゝ所と爲り、有功爲めに固く争ひて坐して罪せられ、後復た免して召された。

魏元忠

○魏元忠グヱンヂウ 宋州の人。大學士と爲る。唐高宗召見して之を目送して曰く、名空しく傳へず、眞宰相なりと。中宗復位して中書令に拜せらる。

婁師徳

○婁師徳ロウシトク 字は宗仁。唐の初め江都尉となつた。師徳、沈厚寛恕能く人を容れた。狄仁傑、未だ相たらざる時、師徳、屢々帝に勸めて遂に相たらしめたが、仁傑は知らずして却つて毎に師徳を毀つた。武后嘗て仁傑に語つて曰く、朕の卿を用ゐるに至つたのは、師徳の推薦に依るものであるといふた。仁傑之を聞き退き軟じて曰く、婁公盛徳我れ容るゝ所となること久しと。師徳將相たること三十年、恭勤誠忠功名を以て終つた。

狄仁傑

○狄仁傑テキジンケツ 字は懷英。太原(今の山西省太原)の人。唐高宗の後武氏に事へて名相の譽があつた。武后權を恣にするに及んで、其の姪武承嗣武三思が皇太子たらんことを求めたから、仁傑從容として武后を諫めて曰く、太宗は櫛風沐雨、親ら鋒鏑を冒し、以て天下を定めて之を子孫に傳へた。先に大帝は二子を以て陛下に托したるに、今乃ち之を他族に移さんとするは、乃ち天意に反くこと無からん

や、況や姑姪と母子と孰か親しき、陛下子を立つれば千秋萬歳の後太廟に配食せられん、然るに姪を立つれば如何、未だ姪が天子となりて姑を太廟に祀る者有るを聞かないと。武后遂に中宗を召し還して太子と爲し、睿宗を相王とした。武后は常に仁傑を信重し、稱して國老といひ、仁傑も亦好みて面折延争し、武后毎に意を屈して之に従つた。嗣聖十七年(皇紀一三六〇年)に仁傑は歿した。仁傑は常によく人材を推薦した。姚崇・桓玄範・敬暉・張柬之等數十人は皆其の薦むる所である。或人天下の桃李悉く公の門に在りと曰うたが、仁傑曰く、賢を薦むるは國の爲であつて私の爲ではないと。其の人と爲りが知られる。

### 第廿六章 唐の中世

開元の治、安史の亂。

開元の隆盛

開元の隆盛 唐にては武・韋二氏の内亂が、前後三十年に及び、國威漸く振はなかつたが、玄宗が位に即くに及び、政を親らし、開元と改元し銳意治を圖り、努めて人材を登用した。時に姚崇は同州に在つたが、帝召して兵部尙書同中書門下三品とした。崇は才氣煥發裁決流るゝが如く、恰も快刀亂麻を斷つの慨を以て、三度兵部尙書を兼ねて相位に上り、邊疆の防備より兵器糧食に至るまで通ぜざる無く、帝の諮詢する毎に應答響に應ずるが如く、同僚敢て一言を加ふる者が無かつた。斯くて崇は政を執ること四年、

姚崇



宋璟<sup>ソウケイ</sup>を勸めて自ら退いた。宋璟は風度高遠で、人其の際を測り知るもの無く、黃門監と爲り、務めて人物を擇び、材に隨つて任を授け、刑賞に私無く、百官が各其の職を得た。抑、崇・璟の相繼いで政を爲すや、崇は善く變に應じて務を成し、璟は善く法を守りて正しきを持し、二人の性格志操は同じくはないが、而かも能く心を協せて帝を輔けたから、賦役は公平で百姓殷富に、學術宗教も亦興隆し、開元廿九年の治は、其の隆昌を貞觀に比するに至つた。されば唐代の賢相は、前には房<sup>(齡)</sup>・杜<sup>(如)</sup>を稱し、後は姚<sup>(崇)</sup>・宋<sup>(璟)</sup>を稱するのである。

## 節度使の設置

唐は太宗の時に府兵の制を設け、地方の要地に配備して之を鎮撫せしめたが、後其の制は敗れて空名に屬した。然るに高宗の末年より、武韋の禍亂が相踵ぎ、國威漸く衰ふるに乘じ、回紇・吐蕃・大食等の外夷が屢、邊疆を侵したから、高宗は吐蕃の北に出づるを禦がんが爲めに涼州<sup>(今の甘肅涼州)</sup>の地に河西の節度使を置いたが、玄宗に至り四邊の要地に十節度使を置き、數州の地を一鎮とし、兵馬の大權を委ねて四方を經略せしめた。是に於て、節度使の管轄する所八百餘州に及び、唐の國威再び塞外に振ふに至つたが、節度使の職たるや、皆兵政の二大權を併用したから、後には藩鎮の權が重きに過ぎ、安史の亂後は、其の跋扈益、甚しく、遂に宦官の禍と共に唐室覆滅の原因を爲すに至つた。左に十節度使の表を掲げん。

に至つた。左に十節度使の表を掲げん。

## 安史の亂

玄宗の天寶元年に、安祿山を以て平盧の節度と爲した。祿山はもと營州

(河北道に屬す。今の内蒙古土默特の地)の雜胡であるが、性傾巧にして善く人に事へ、帝の左右が營州に至れば、

祿山は常に厚く之に賂ひしたから、左右常に之を譽め奏し、帝は益、以て賢なりとし、天寶三年には、更に范陽の節度使を兼ねしめ、同六年には御史大夫を兼ねしむるに至つた。

時に貴妃楊太眞は頗る帝の寵遇を恣にしたから、祿山は其の徒と結び、遂に請ひて貴妃の兒と爲り、益帝の親任を得たが、同九年には魯東平郡王を賜ひ、河北道採訪處置使を兼ねるに至つた。祿山は體肥大であつたが、帝嘗て其の腹を指して曰く、此の胡の腹中何物をか藏するやと。祿山は對へて曰く赤心有るのみと。帝が妃と並び坐すれば、祿山は常に先づ妃を拜し、然る後帝に及ぶので、帝其の故を問ひたるに、對へて曰く、胡人の俗は、母を先にし父を後にすと。帝は聞いて大に悦んだ。祿山の生日には賜與甚だ多く、後三日にして召して宮中に入れたが、時に妃は錦繡を以て大襁褓を爲りて祿山を裹み、宮人數人をして綵輿を以て之を昇かしめ、歡聲頗る聞えたので、帝は故を問うたが、左右對へて曰く、貴妃が祿兒を洗ふのであると。帝よりて貴妃に洗兒金銀錢を賜ひ、歡を盡して罷めた。祿山は是より屢、宮掖に出入し、頗る醜聲が、洩れたが、帝は猶疑はず、



祿山を以て河東の節度使を兼ねしむるに至つた。斯くて祿山は、既に三節度使を兼ね、唐の武備の弛廢せるを見、壯士を養ひ兵仗を聚め、潜かに機會の到るを待つて居つたが、相國の李林甫を憚つて敢て發せなかつた。然るに天寶十一年に林甫が死し、楊國忠が相と爲つたので、祿山は素より國忠を蔑視したから、同十四年遂に反し、所部及び奚契丹の兵凡そ十五萬を率ゐて范陽より南下した。時に承平既に久しく、武備漸く廢れ、民皆兵革を知らなかつたから、賊軍は無人の境を往くが如く、直に河を渡りて東京(洛陽)を陥れた。帝聞いて嘆じて曰く「二十四郡曾て一人の義士無きか」と。既にして平原(郡名、今の山東陵)の太守頭眞卿、常山(郡名、今の河北正定)の太守顏杲卿、眞源(河南唐邑縣)の令張巡、睢陽(河南省歸德府)の太守許遠等が、各起つて賊を討つたが何れも勝たず。翌至徳元年には、祿山は自ら燕帝と稱した。此の年賊將の史思明は常山を陥れ、杲卿を執へて洛陽に送り、勢益々猖獗であつた。既にして朔方の節度使郭子儀、河北の節度使李光弼等は、賊將史思明を破つて河北十餘郡を復したが、兵馬副元帥哥舒翰は、賊軍と靈實(縣名、陝州に屬す)に戦つて大に敗れ、賊軍が進んで潼關(陝西華陰縣の東)に入るに及び、帝は倉皇として西に奔り、馬嵬(縣名、陝西興平縣の西に在り)に次した。時に諸將士は皆憤怒し、楊國忠を殺し、帝に逼つて楊貴妃を縊殺し、然る後に發した。是に於て太子が靈武(郡名、即靈州)に即位し、之を肅宗とし、遙に玄宗を尊んで上皇天

顏眞卿

張巡・許遠

顏杲卿

郭子儀

李光弼

安慶緒

史思明

史朝義

帝とした。初め祿山は兵を起してより、眼昏み、又疽を病み、性頗る狂暴と爲つたが、常に嬖妾の子を鐘愛し、長子慶緒に代へて嗣と爲さんとしたから、至徳二年に慶緒は遂に祿山を殺して自立し、史思明をして范陽に鎮せしめた。既にして郭子儀等は回紇西域の援兵を得、進撃して賊軍を破り、西京及び東京を復したから、帝は西京に入り、上皇も亦蜀より還つた。乾元二年に賊將思明は慶緒を殺して范陽に還り、燕帝と稱した。然るに思明も亦少子を愛して長子朝義を殺さんとしたので、上元二年(肅宗の六年)に朝義は人をして父思明を殺さしめて自立した。寶應元年(肅宗の七年)に玄宗崩じ、尋いで肅宗も亦崩じ、太子廣平王豫が立つた。之を代宗と爲す。代宗は皇子雍王迥を元帥と爲し、回紇の援兵を得、諸道の兵を發して史朝義を討ち、大に之を破つたから、朝義は北に奔り、尋いで賊將李懷仙は、朝義を殺して來り降り、内亂が始めて平定した。斯くて天寶十四年に祿山が兵を擧げてより九年、玄宗肅宗代宗の三代に亘れる安史の亂も茲に全く平いだ。(安史の亂と史氏の亂なるを以てである)此の亂に勳功の最も大であつた者は、郭子儀・李光弼等で、顏眞卿・顏杲卿・張巡・許遠は皆義兵を起し、忠節を以て著はれた。

安史の内亂は三代の久しきに亘り、唐は之が討滅に全力を盡して、また邊疆を顧みるの違が無かつたから、吐蕃は間に乘じて蠶食し、盡く河西隴右を取り、遂に涇州(今甘肅省に屬)